

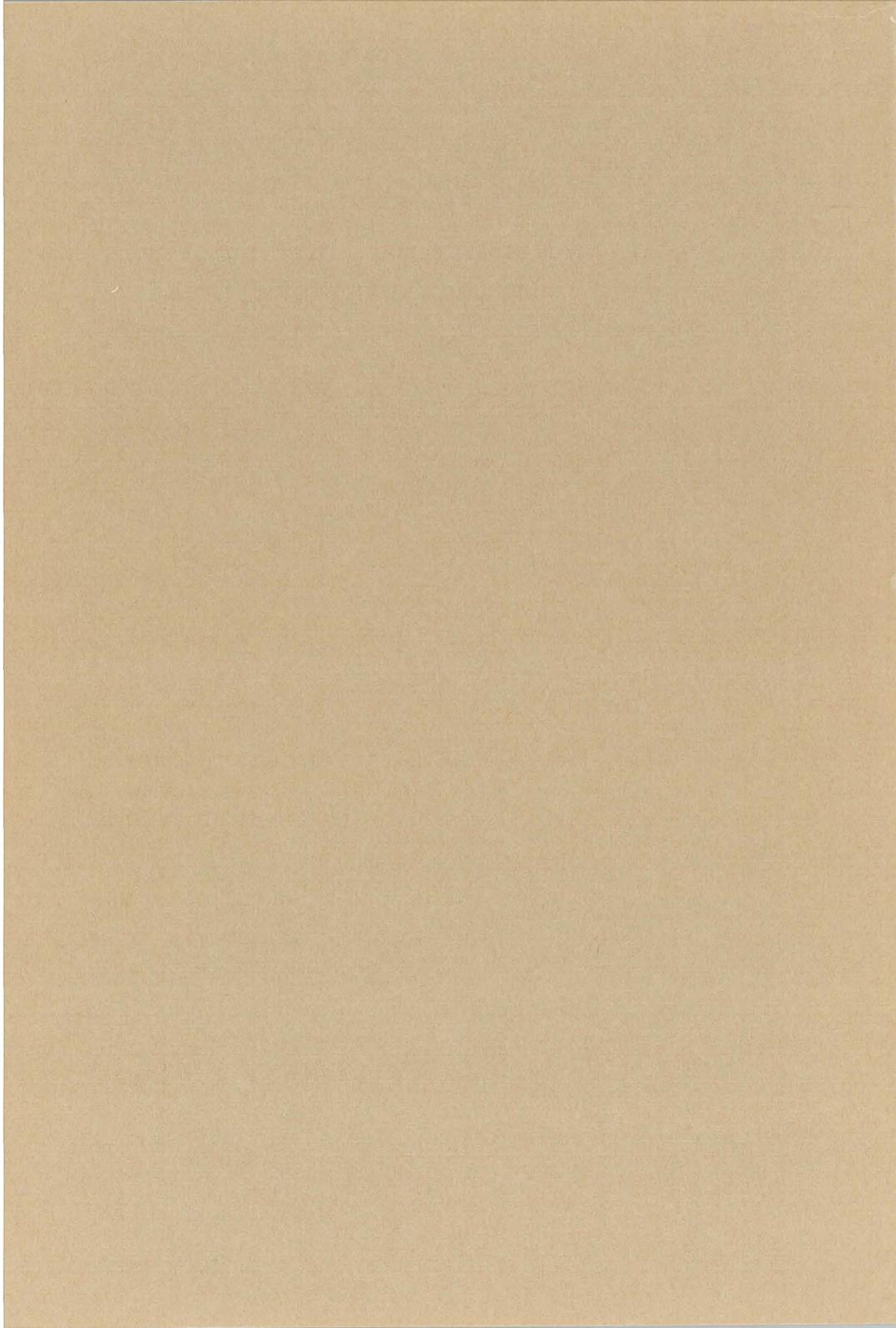
ISSN 1344-476X

財団
法人

東洋文庫年報

平成 19 年度

財団法人 東洋文庫



目次

I	平成19年度の東洋文庫	1
II	図書事業	4
1.	資料の収集	4
2.	資料の整理	5
3.	資料の利用と複写サービス	6
4.	書庫資料の見学と研修	10
5.	資料の保存整理と複製	11
6.	業務の機械化	11
7.	書庫内資料と書架スペース	12
III	研究事業	14
1.	調査研究	14
A	超域アジア研究	14
B	アジア諸地域研究	15
C	資料研究	24
D	平成19年度 研究部6部門12研究班 研究組織	25
E	地域研究プログラム	32
F	東洋文庫研究員等・研究課題一覧	35
G	日本学術振興会科学研究費補助金による調査研究	41
H	その他の民間学術助成金による調査研究	47
2.	学術図書出版	49
A	定期出版物刊行	49
B	論叢等出版	49
3.	講演会	49
A	研究情報普及	49
B	データベース公開	51
4.	学術情報提供	52
A	研究者の交流および便宜供与のサービス	52
B	各種研究会等への会場提供サービス	54
C	研究資料の復刻・増刷の刊行サービス	55

D 参考情報提供のサービス	55
E 広報普及	55
5. 研究員等の研究業績	56
IV 業務報告	93
1. 総務報告	93
2. 人事報告	94
3. 会計報告	97
V 役職員名簿	105
1. 役員	105
2. 評議員	106
3. 東洋学連絡委員会委員	106
4. 名誉研究員	107
5. 職員・研究員	108
6. 客員研究員	111

I 平成19年度の東洋文庫

平成19年度において東洋文庫が実施した諸事業の経過、及び内容の要旨は次の通りである。

まず本年度内に生じた役員・職員の異動について述べる。6月の理事会にて、平成13年より5年間に渡り理事長を勤められた斯波義信氏よりの理事長辞任のご意向を受け、榎原稔理事が新理事長に選任された。

又、6月に任期満了となった西田龍雄、若井恒雄の両理事が退任され、評議員会で、新たに大崎仁、濱下武志、福澤武、三木繁光の各氏が理事に新任された他、榎原稔、草原克豪、佐藤次高、田仲一成、鶴見尚弘、原實の各理事が再任された。監事には、岡野理一郎、東條和彦の両氏が再任された。

一方、評議員では、同じく6月に任期満了となった池端雪浦、大崎仁、濱下武志の各氏が退任、福澤武氏も理事就任の為任期途中であるが退任された。一方新たに6月の理事会にて、荒蒔康一郎、有馬朗人、久保正彰、瀬谷博道、西田龍雄、増田信行、Wang Gungwuの各氏が評議員に新任され、安西祐一郎、梅村坦、尾池和夫、岸本美緒、後藤明、小宮山宏、佐竹昭広、白井克彦、平野健一郎、間野英二の各氏が再任された。

これにて、当文庫は理事15名、監事2名、評議員17名の体制となった。

次に職員であるが、総務部光田憲雄課長が依願退職された。一方、4月より青木雄二氏が総務課長兼会計課長に、10月には総務部に藤代和卓参事が着任した。人間文化研究機構の地域研究推進事業の一環として、昨年発足したイスラーム地域研究に加え、本年度より現代中国研究が発足し、当文庫現代中国研究資料室に人間文化研究機構より大澤肇氏が出向着任した。又、6月より斯波義信前理事長が当文庫の特別顧問に、濱下武志氏が図書部顧問にそれぞれ就任された。尚、田仲理事（図書部長）は春の叙勲で瑞宝重光章を授与された。

懸案事項である文庫の建替えの問題については、19年1月に三菱金曜会にて湯島への移築を前提に建替え・移転の資金支援を決定頂いたが、その後文京区側の事情で早期の移転が出来ない事となった為、現在地での建替えを実施する事にて改めて三菱金曜会のご了解を得た。20年3月より、埋蔵文化財調査、植栽の伐採・移植、周辺構築物の撤去等の具体的作業が開始された。

20年2月の理事会・評議員会では、20年度予算の審議・承認に加え、文庫建替に関連して建物・構築物を基本財産から一般財産に管轄替えを行う事、建替え関連の特別会計を設定する事、並びに役員給与規程の一部改定も併せ決議された。

尚、19年5月には特定公益増進法人の資格が更新されている。

図書部関係では、昭和23年より約60年間続いた当文庫と国立国会図書館との支部契約を平成21年3月末をもって解消する合意書に5月に調印した。これに伴い、国立国会図書館より当文庫への派遣員が19年4月より従来の8名より5名に減少した。

一方、当文庫のデータベース化は着実に進展しており、本年度新規データベース入力は合計約10千件であり、データベースへの月間アクセス数は約40千件のレベルに達している。本年度の当文庫の図書の増加は、購入約4,843冊、受贈約4,446冊、合計約9,289冊であった。

故仲田浩三氏収集のインドネシア碑文拓本をご遺族より寄贈を受けた。

又、当文庫の複写サービスの見直しを行い、新たに職員によるデジカメによる複写サービス、並びにセルフ複写サービスを導入し、閲覧者の利便性を高めた他、日本語逐次刊行物の保存年限を新たに定めた。

研究部では、平成15年度より始まった新しい研究体制が5年目を迎え、定期出版物7冊の刊行に加え、論叢類2冊を発刊した。又、一昨年度発刊した「東アジアの都城と渤海」が韓国語に翻訳されて出版される事になった。当文庫の論叢が外国で翻訳出版されるのは初めてのケースである。東洋学講座はいよいよ500回を数え、500回記念東洋学講座を春・秋それぞれ3回開講した。大変好評を博し毎回ほぼ満員で、一度は出席者120名と当方講演室のキャパシティ一杯となった。又、各種研究会・講演会を計109回開催し、合計参加人数は1,981人であった。又、受入れ外国人研究者7名、外国人研究者への便宜供与は、オーストラリア、中国、台湾、フィンランド、イラン、韓国、カザフスタン、トルコより8名に達した。

4月には人間文化研究機構を共同拠点として、早稲田大学、京都大学、慶應義塾大学、東京大学、総合地球環境学研究所、東洋文庫の連携による現代中国研究が発足した。当文庫はその資料センターとして、研究部の下部組織として「現代中国研究資料室」を発足させ、室長には高田幸男研究員が就任し、研究員として大澤肇氏が出向着任した。

EUではフランス極東学院が中心となって、EUの東洋学研究機関が共同でECAAF (European Consortium for Asian Field Study) を結成したが、当文庫もそのアンソシエーテッド・メンバーとなった。9月に調印式がパリで開催され、斯波特別顧問が出席・調印した。

財政面では、ここ数年当文庫は年間の収支赤字を引当金・積立金を取り崩して賄って来たが、本年度は三菱金曜会加盟の維持会各社の寄付金の増額を頂き、加えて三菱金曜会よりの臨時寄付金を頂いた為、引当金・積立金を取り崩さずに年

間収支をバランスさせる事が出来た。

内部統制の面では、当文庫の諸規定の整備を継続しており、新たにコンプライアンス関連諸規定を整備した。又、出張規程改定、発注・購買規程並びに附則1、会計処理規程附則3、等を整備し、物品の購入、出張、謝金支払い等において不正の起りにくい制度を整備する事が出来た。又、内部監査も新規定に基づき実施した。

当文庫が過去に刊行した寄贈用・頒布用図書約7万冊の見直しと余剰本の寄贈を実施。継続保存は寄贈用約9千冊、頒布用約6千冊の計約15千冊とし、残りは図書館・研究所・研究者等に寄贈を完了した。

普及活動の面では、10月に理事・監事・評議員・三菱金曜会幹部に対する特別展示会を開催し、国宝・重要文化財を含む約60点の貴重書を出陳した他、駐日フランス大使の来訪に際し特別展示会を開催した。又、11月には文京区が文京シビックセンターで「文京ミュージックフェスタ」を開催し、当文庫も1小間出展参加した。

東洋文庫80年史の第1巻を「東洋文庫の名品」と言う別冊で、そしてこの英文版を「Treasures of Toyo Bunko」としてそれぞれ刊行した。

一般の方々にもっと東洋文庫への関心を持って頂き、普及活動を強化する為、個人を対象とする「友の会」（年会費5千円）を発足させ、初年度で約70名の会員数となった。会員誌「友の会だより」も発刊した。又、当文庫の記念品もそれなりに充実させるべく、「名品」に加え、トートバッグ、しおり、クリアファイル、絵葉書等品揃えを行った。

又、広報活動では、ホームページを大幅に改定し、より充実した内容のものにした。尚、マンスリー三菱誌の20年新年号に横原理事長の対談が特集掲載された。19年はモリソン文庫渡来90周年に当たり、11月の創立記念日には斯波特別顧問に記念講演をして頂き、その内容は「友の会だより」に掲載した。

次に、19年度中に実行した文庫全体の幾つかの改革は次の通り。

まず、当文庫の図書には事実上保険を掛けていなかったが、今般、国宝・重文並びに貴重書は付保する事とした。その一環で国宝・重文計12点に付き鑑定評価をしたところ、合計約27億円との評価であった。給与規程を改定し、S級の創設、私傷病休暇の創設、管理職処遇の明確化を図った。その他、事務合理化の一環として、メール・ネット・サーバーの外出しを実施した他、電子支払いシステムを20年度より導入する事とした。又、時間外の入館をカード方式に切り替え、勤務時間外、土日にも必要に応じフレキシブルに当文庫施設を利用出来る様にした。これに伴い、土曜日の警備会社よりの派遣契約は解約した。

Ⅱ 図 書 事 業

1. 資 料 の 収 集

(1) 資料購入

本年度資料購入費の支出総額は31,928,045円で、各部門別の冊数内訳は次のとおりである。

	和漢書(うち非図書)	洋書(うち非図書)	計
超域・現代中国研究	411(55)	53(32)	464(87)
超域・現代イスラーム研究	0	1,582(4)	1,582(4)
東アジア研究	636	16	652
内陸アジア研究	14	97(5)	111(5)
インド・東南アジア研究	0	204(29)	204(29)
西アジア研究	0	511	511
共通(継続・大型資料)	289(32)	89(34)	378(66)
計	1,350(87)	2,552(104)	3,902(191)

※単位：冊(非図書資料はマイクロフィルム1リール、CD1枚を1冊に換算)

主な購入図書としては以下のものがある。

エジプト新聞 Al-Ahram 1920-31年マイクロフィルム	34リール
嵯峨本古今和歌集 他 和古書	3点
「満州」植民地中国人用教科書集成	8冊
朝鮮戦争期宣伝ビラコレクション	47種
東北辺疆档案選輯(清代・民国)	151冊
渤海史研究学術叢書	55冊
清代稿鈔本	27冊

(2) 資料交換

出版物交換の実績は次のとおりである。

区 分	受 贈			寄 贈		
	和漢書(冊)	洋書(冊)	計(冊)	国内(冊)	国外(冊)	計(冊)
単行本	1,165	488	1,653	1,131	597	1,728
定期行物	2,133	660	2,793	4,808	11,721	16,529
非図書資料	0	0	0	0	0	0
計	3,298	1,148	4,446	5,939	12,318	18,257

主な受贈資料としては、以下のものがある。

台湾中央研究院歴史語言研究所寄贈 俗文学叢刊	500冊
中村菊之進氏寄贈資料	309冊
嶺南大學校民族文化研究所金皓東氏寄贈資料	18冊
韓国中央文化財研究院寄贈 発掘調査報告書	17冊
Bibliothèque Nationale de France 寄贈資料	15冊
The National Library of Korea 寄贈資料	15冊

(3) 蔵書数

収蔵する蔵書総数は947,814冊で、和漢書533,608冊、洋書384,406冊、複写資料29,800冊である（イスラム地域研究資料室、現代中国研究資料室収集分を含む）。

2. 資料の整理

(1) 図書

整理冊数は次のとおりである。

和漢図書	1,447冊	(現代中国研究資料室の138冊を含む)
欧米語図書	883冊	
アジア諸言語図書	3,276冊	(イスラム地域研究資料室の900冊を含む)

整理した主な図書

(1) 甘肅人民出版社刊 中国蔵西夏文献1-8巻	8冊
(2) 新編中国地方志	16冊

(2) 雑誌

本年度の受入タイトル・冊数は次のとおりである。なお、そのうち新規受入誌は和・中・韓文24タイトル、欧文5タイトルである。

	タイトル数		冊数	
	和・中・韓	欧	和・中・韓	欧
受贈	679	167	2,133	660
購入	168	92	841	187
小計	847	259	2,974	847
計	1,106		3,821	

(3) 新聞

本年度は21種（何れも中文）を受入れた。

3. 資料の利用と複写サービス

(1) 閲覧サービス

本年度、閲覧証の新たな交付は188名で、内訳は教職員84名（外国人28名）、研究機関関係者15名（外国人7名）、大学院生43名（外国人11名）、大学生39名（外国人9名）、その他7名（外国人1名）であった。

閲覧開館日は230日、利用者数は2,365名、利用資料数36,258冊で、詳細は次のとおりであった。

なお、東洋文庫研究員および職員の研究室等での資料の利用は延べ1,039名、2,184冊であった。

開館日数および閲覧者数

	開館日数	閲覧者数	日平均	昨年同月比 (△印は減)
平成19年 4月	(日) 19	(人) 146	(人) 8	(人) △36
5	20	204	10	5
6	20	191	10	△33
7	20	216	11	5
8	22	255	12	△24
9	17	203	12	△21
10	21	182	9	△28
11	19	219	12	44
12	17	196	12	△4
平成20年 1月	17	171	10	△26
2	19	189	10	△34
3	19	193	10	△10
計	230	2,365	10	△162

閲覧カウンター出納冊数

	和 書		漢 書		洋 書		合 計		日平均	昨年同月比 (△印は減)
	部 数	冊 数	部 数	冊 数	部 数	冊 数	部 数	冊 数		
平成19年 4月	157	591	187	1,205	93	292	437	2,088	110	△ 207
5	107	182	282	1,533	165	349	554	2,064	103	241
6	83	153	236	1,840	203	478	522	2,471	124	△ 356
7	83	288	422	2,463	148	374	653	3,125	156	△ 606
8	129	548	448	3,821	242	622	819	4,991	227	190
9	308	747	369	2,942	109	263	786	3,952	233	689
10	47	289	220	1,570	161	278	428	2,137	102	△ 1,756
11	133	347	344	2,308	112	232	589	2,887	152	354
12	73	157	375	2,046	146	317	594	2,520	148	△ 56
平成20年 1月	77	183	381	2,798	95	196	553	3,177	187	502
2	75	228	363	2,186	196	268	634	2,682	141	△ 974
3	146	629	393	3,231	100	304	639	4,164	219	1,664
計	1,418	4,342	4,020	27,943	1,770	3,973	7,208	36,258	158	△ 315
比率	12.00%		77.00%		11.00%		100.00%			

(2) 複写サービス

国内外の研究者・研究機関の便宜に供するために行ったもので、実績は次のとおりであった。

マイクロ・フィルム

申込件数	紙焼用撮影齣数	紙焼提供枚数	フィルム提供齣数
259	19,190	27,722	6,634

電子複写

申込件数	提供枚数
833	35,687

(3) レファレンス

受付数は目録室、閲覧室など合わせて685であった。

(4) 資料の貸出

博物館・美術館などが主催しておこなう展覧会への資料の貸出は4件で、詳細は次のとおりである。

	展覧会名	主催者	展覧会会期	開催場所	主な資料と数量
1	開館20周年記念展『中国憧憬 日本美術の秘密を探れ』	町田市立国際版画美術館	平成19. 4. 14 ～ 6. 24	町田市立国際版画美術館	『名山勝概記』はじめ全3点
2	開館30周年記念特別展『大にぎわい 城下町名古屋』	名古屋市博物館、中日新聞社、中部日本放送	平成19. 9. 22 ～11. 4	名古屋市博物館 一階特別展示室・部門展示室	『尾張年中行事略絵抄』はじめ全5点
3	雑協・書協創立50周年世界出版文化史展『百学連環－百科事典と博物図譜の饗宴』	凸版印刷株式会社 印刷博物館	平成19. 9. 22 ～12. 9	凸版印刷株式会社 印刷博物館 地階本展示室	シーボルト『日本植物誌』はじめ全2点
4	『鶴見合戦…『太平記』にみる横浜…』	横浜市歴史博物館	平成19.10.20 ～11.25	横浜市歴史博物館 企画展示室	『塚本文庫』1点

4. 書庫資料の見学と研修

申請は26件あり、259名に便宜を計った。その詳細は次のとおりである。
なお、このほかに当日申込の書庫見学が43件124名あった。

	実施日	申請者	参加者	人数	主な内容
	平成19年				
1	4月6日	佐藤典子	国立国会図書館職員	10	書庫及び所蔵資料見学
2	4月9日	松本英明	青島市档案館一行	10	〃
3	5月7日	梅村坦	中央大学大学院学生	6	〃
4	5月18日	初山明	董珊北京大学助教授他	4	〃
5	5月23日	小松久男	東京大学学生	12	〃
6	5月24日	山地代里子	三菱ゆかりの地ツアー一行	27	〃
7	6月15日	高橋智慶	台湾淡江大学教員	9	〃
8	6月22日	本野英一	早稲田、慶応義塾大学学生	13	〃
9	7月10日	高島元洋	お茶の水女子大学学生	11	〃
10	7月11日	吉田光男	東京大学大学院学生	24	〃
11	7月12日	三浦徹	お茶の水女子大学学生	10	〃
12	7月18日	味岡徹	聖心女子大学学生	7	〃
13	7月19日	岸本美緒	お茶の水女子大学学生	5	〃
14	7月26日	白井佐知子	東京外国語大学学生	10	〃
15	8月2日	高田幸男	明治大学学生	14	〃
16	8月23日	阿部伊作	東京基督教大学図書館他	13	〃
17	9月7日	楠木賢道	筑波大学学生	13	〃
18	10月2日	門脇廣文	大東文化大学学生	20	〃
19	11月2日	日向祥子	三菱人権啓発連絡会	14	〃
20	12月5日	中村邦子	国立国会図書館職員	3	〃
21	12月12日	関根美穂	日本関係司書研修受講生	3	〃
	平成20年				
22	1月22日	春日井明	清泉女子大学学生	7	〃
23	1月23日	初山明	台湾中央研究院研究員ほか	3	〃
24	1月25日	味岡徹	聖心女子大学学生	7	〃
25	2月13日	大澤肇	国際日本文化研究センター職員	3	〃
26	3月7日	湯野基生	国立国会図書館職員	1	〃

5. 資料の保存整理と複製

平成18年度末をもって複写室と撮影室が閉鎖され、原資料の保存整理と劣化資料のマイクロフィルム化などの作業は行わないことになった。実施した作業項目と内容は次のとおりである。

雑誌合冊製本（外注）

496冊。

6. 業務の機械化

引き続きデータベースの入力作業を継続する一方、インターネット上でのオンライン検索ができるよう作業を進めた。平成19年度末現在、東洋文庫の Web ページでオンライン検索が可能な目録データベースは次の29種である。このうち※印のついているものが平成19年度新規公開分である。

- | | |
|---------------------------------|--------------|
| (1) 中国語逐次刊行物 | (約4,600件収録) |
| (2) 日本語逐次刊行物 | (約2,000件収録) |
| ※(3) 欧文逐次刊行物 | (約2,640件収録) |
| (4) 漢籍資料オンライン検索 | (約27,000件収録) |
| (5) 岩崎文庫(和貴重書) | (約8,000件収録) |
| (6) 続修四庫全書 | (約6,200件収録) |
| ※(7) ラテン文字資料 欧文図書 | (約68,410件) |
| ※(8) キリル文字資料別置ロシア語図書 | (約11,300件) |
| (9) 中国語図書の検索 | (約48,390件) |
| (10) 日本語図書の検索 | (約61,270件) |
| (11) 日本語図書(近代中国研究委員会収集)分類表による検索 | (約17,000件) |
| (12) 韓国・朝鮮語図書の検索 | (約4,300件) |
| (13) 藤井文庫オンライン検索 | (約1,450件) |
| (14) モンゴル語資料検索 | (約1,600件) |
| (15) アラビア語図書の検索 | (約13,770件) |
| (16) ペルシャ語図書の検索 | (約10,620件) |
| ※(17) 現代トルコ語図書の検索 | (約10,210件) |
| (18) オスマントルコ語図書の検索 | (約1,340件) |
| (19) 南アジア諸語(アラビア文字)図書検索 | (約3,560件) |
| (20) キルギス語図書全リスト(PDF) | (約20件) |

- (21) ウイグル語図書全リスト (PDF) (約1,100件)
 (22) カザフ語図書全リスト (PDF) (約 240件)
 ※(23) スインディー語図書の検索 (約190件)
 (24) チベット語文献 (河口慧海将来蔵外文献) (約500件)
 (25) チベット語文献 (米国議会マイクロフィッシュ版) (約4,000件)
 ※(26) ビルマ (ミャンマー) 語図書の検索 (約700件)
 ※(27) インドネシア語・マレーシア語図書の検索 (約310件)
 ※(28) タイ語資料の検索 (約880件)
 (29) 南方史資料 (約4,200件)

入力及び公開にむけての作業は次年度以降も引き続き進めていく予定であり、同時に所蔵資料のデジタル化も積極的に推進していく計画である。

7. 書庫内資料と書架スペース

書庫内資料の排架一覧と新規排架および主な調整箇所

階	1 号 棟	新規排架・調整箇所	2 号 棟	新規排架・調整箇所
6	朝鮮本、越南本、満州本、蒙古本、和書 (XV～XVII、大型)、辻文庫	ウルドゥー語		
5	Old Book、PB、MS、漢籍稀観書、岩崎文庫、銅版画、古地図、梅原考古資料、辻文庫・榎文庫		和書 (II - XIV)	
4	洋書 (I～XII・大型)、モリソン二世文庫、ペラルデ文庫、ロシア語別置資料	岩見文庫 洋書 (VI～)	現代トルコ語資料、榎文庫、ペルシア語資料 (P-A-1～P-LI-761)、チベット語資料	ペルシア語、現代トルコ語
3	漢籍 (経部・子部・集部・叢書・大型)、日本語・ハングル新着雑誌	漢籍 (I、III～V)	洋書 (XIII～XVII・XIX) モリソンバンフレット、アラビア語資料、ペルシア語資料 (P-LI-762～P-Z-6)	アラビア語
2	漢籍 (史部)		近代中国研究委員会収集資料	
1	逐次刊行物 (日・中・朝・洋新聞)、中国語、欧文新着雑誌		逐次刊行物 (欧文)	

臨時書庫

オスマン・トルコ語 アジア諸言語

書架調整のみでは対応しきれない現状を打開し、書架狭隘を大きく解消するため、1号棟の3階に単式書架を中心に計85連を増設した。この書架増設は3カ年計画の最終年度分である。これに伴う本年度の主な資料移動は以下のとおりである。

1. この増設書架に資料を展開させる形で、漢籍（Ⅰ、Ⅲ～Ⅴ）の排架調整を行った。併せて書庫棟外に分散していた資料をも集中し、出納作業を円滑に行えるよう改めた。
2. また、前年度より継続していた洋書（Ⅵ～）の排架調整を行った。
3. ウルドゥー語資料を6階に、岩見文庫資料を4階2号棟から4階1号棟へ順次移動してできたスペースに、アラビア語、ペルシア語、現代トルコ語資料を展開させた。

Ⅲ 研究事業

東洋文庫は、アジアを構成する諸地域の歴史・文化の発展に関する基礎資料を、組織的かつ継続的に収集してこれを広く内外の研究者の利用に供するとともに、これらの資料に基づく広範なアジア研究を推進して、内外のアジア研究の進展に大きく貢献することを主要な目的としている。

東洋文庫はこの事業のいっそうの拡充に向けて、平成15年度以降、研究体制を一新した。すなわち（イ）研究員の編成において若手研究員の参加に意を注ぐとともに、（ロ）現代アジアの課題に多面的かつ総合的に取り組む方策を打出し、（ハ）欧文による成果の発信を拡充して国際的な活動を強化し、（ニ）研究情報および資料情報の公開と共同利用、内外にわたる情報の授受を促進すべく、研究部と図書部を一元とした電子情報システムの構築に着手した。これを機に、研究分野は《超域アジア研究》と《アジア諸地域研究》に二分され、前者は現代アジアの学際的な動態研究、後者は各ディシプリンを生かした基礎研究に取り組んでいる。

1. 調査研究

A. 超域アジア研究

1940年代以降のアジアは激変と急成長をとげ、21世紀の世界情勢の展望にとってアジアの占める位置と役割は高まりつつある。中国は1949年の革命ののち、急速な変容と発展を経過しており、中国情勢は国内問題に加えて、隣接アジア諸地域を包摂した課題として総合的・多面的な研究を不可避としている。また、イスラームのグローバル化とその先鋭化も近年の著しい現象であり、現代世界の理解のためには、中東や中国・東南アジアのイスラームの現実を柔軟に解析することが必要である。

このような意味で、現代の中国圏域およびイスラーム圏域に関するアジア研究を新たに組織し、これを政治学・経済学・国際関係論・歴史学などを融合した学際型のプロジェクト研究として実施した。

○超域アジア・プロジェクト研究

(1) 「現代中国の総合的研究」

(超域アジア研究部門、現代中国研究班、総括・平野健一郎)

本プロジェクトでは、20世紀後半において激変を経験し、東アジアから世界にまで政治・経済的な影響力をもちつつある現在中国の全容を、歴史・文化の要因を含めて総合的に分析する研究体制(政治と外交、経済、国際関係・文化の各グループ)を構築した。このための基礎資料の収集は東洋文庫の蓄積を基点にしつつ、学際的研究・公開利用の観点から拡充と再編をはかる。

[研究実施概要]

- a) 政治グループでは、成果の刊行にむけ、これまでに実施した研究会における討論をふまえて成果刊行の準備作業を行った。
- b) 経済グループでは、現代中国経済に関する英文叢書出版の準備として平成20年度に日本語による論集『歴史的視野から見た現代中国経済』の刊行を計画しており、研究会を催してその準備・編集作業を進めた。
- c) 国際関係・文化班においては、*Modern Asian Studies Review* No. 3 に成果を発表するため、編集作業を進めた。

(2) 「現代イスラームの超域的研究

－議会主権の展開と立憲体制に関する研究－
(超域アジア研究部門、現代イスラーム研究班、総括・佐藤次高)

本プロジェクトでは、これまでほとんど用いられることのなかった中東諸国の議会文書(アラビア語、ペルシア語、トルコ語)を分析し、それぞれの地域(国家)に誕生した議会主義の政治思想と立憲体制の実態を比較・検討することを通じて、中東・イスラーム地域における国民国家の歴史的役割と今日的意義を総合的に考察する。

[研究実施概要]

「現代イスラーム研究班」では、平成17、18年度に刊行した成果(*Agenda Index of the Minutes of the Iranian National Assembly, A Guide to Egyptian Parliamentary Records*, 『トルコにおける議会制の展開－オスマン帝国からトルコ共和国へ－』)にもとづいて各国議会資料の分析を進めた。また、平成20年度に刊行を予定している3グループ合同の英文論文集 *Toyo Bunko Research Library* (以下TBRL) No. 12 *Development of Parliamentarism in the Modern Islamic World* に掲載する論文の執筆を進めた。

B. アジア諸地域研究

現代アジアの複合的かつ動態的な発展を理解する上で、各民族が有する個性豊

かな歴史と文化の基礎的研究が欠かせない。本研究は、アジアの現状に影を落としている歴史・文化の諸要素につき、基礎的かつ長期の取り組みを要する総合的な研究を継続した。

〈東アジア研究部門〉

(3) 前近代中国研究班

①「中国古代地域研究—『水経注』の分析から—」 (総括・宇都木章、太田幸男)

『水経注』(原典6世紀、中国最古の地理書)とその諸注を考古学上の諸発掘成果およびランドサット衛星地図などと合わせて分析することによって、中国古代の地域社会の構造を再検討する。

[研究実施概要]

- a) 陳橋驛復校『水経注疏』(江蘇古籍出版社刊)をテキストとして、隔週の研究会において、その巻17・18・19「渭水」(甘肅省に発し、陝西省咸陽の南、西安(長安)の北を経て黄河に注ぐ)の部分、旧ソ連製('78年、1/100,000)の詳細なランドサット衛星地図およびアメリカの航空写真と重ね合わせ、継続して諸注及び諸校訂を丁寧に検討した。また、昨年度にひき続き、巻19の講読を行った。
- b) 20世紀以降の中国における渭水流域の諸遺跡の考古学的調査・発掘の報告書を集め、5月に実施調査を行った。この地域の古代遺跡と『水経注』記載の内容を合わせて検討し、これを反映させた『水経注』巻17・18(上巻)を刊行した。さらに同巻19(下巻)の出版準備を進めた。

②「宋代社会経済史用語解の作成」 (総括・斯波義信)

『宋史』食貨志の諸篇の訳注および『宋会要』食貨の諸篇語彙の索引カードの成果にもとづいて、宋代社会経済史研究の推進に寄与する《用語解》を作成し、データベース化して公開する。

[研究実施概要]

- a) 東洋文庫既刊『宋史食貨志訳注(一)~(六)』(昭和35年~平成17年)に収まる用語の注解、および東洋文庫の《宋会要輯稿食貨篇語彙索引》事業(昭和39年~)で蓄積した索引カードを中心にして、宋代の経済史・社会史の研究に役立つ《用語解》を作成し『宋会要輯稿食貨篇社会経済用語集成』を刊行した。

③「東アジア都城の考古学的調査・研究(2)」

(総括・田村晃一)

平成14・15・16年度と続けて、渤海を中心として東アジアにおける都城の比較研究を行ない、その研究成果として平成16年度に『東アジアの都城と渤海』(全394頁)、平成18年度に『渤海都城の考古学的研究Ⅱ』を公刊した。しかしながらその中心的なものであった、渤海上京龍泉府址(東京城)出土遺物の調査・研究は、予想以上に多数の遺物があったため、整理に手間取り、一部の遺物の調査・研究については、平成19年度においても継続実施する。

[研究実施概要]

- a) 平成18年度に引き続き、中国東北地区では遼・金時代の都城研究を行なうと共に、中原では隋・唐以前の洛陽を研究対象に選んで、この時期の洛陽に関する中国側の研究成果を、報告書や論文からとりまとめる作業を実施した。
- b) ソウル大学校に所蔵されている西古城の押印瓦資料を調査した。
- c) 吉林大学の王培新教授を招き、中国東北地域の都城史について意見交換を行った。

④「前近代中国の法と社会(2)」

(総括・鈴木立子)

宋から明清時代にかけての戸婚・田土・錢穀などに関する法を明らかにし、前近代中国の「民事的」法の特質、歴史的変遷、地域性などを分析し、前近代中国の地方と中央政府との関係を考察することを目的としている。主として宋代以来の判例、契約文書を史料とするために、併せてこれらの史料の所在を調査し、蒐集する。

[研究実施概要]

- a) 従来の研究を分析し、今後の研究への展望を検討し、平成20年度に、その成果を冊子体にまとめるため、作業を継続した。
- b) 「民事」的法、規範、契約文書などに関する研究文献のデータ蓄積を進めた。
- c) 国内外の判牘文集及び条例の蒐集を継続した。

(4) 近代中国研究班

①「1910～30年代における日本の中国認識」

(東アジア研究部門、近代中国研究班プロジェクト研究)(総括・本庄比佐子)

近代日本の官民様々な機関が作成した中国実態調査資料の検討を通して、日

本の同時代中国認識を明らかにする研究の一環である。平成15～17年度に行った第1次大戦期の日本軍の山東占領にかかわる諸問題の研究、及び18年度に行ったシンポジウム「日本の青島占領と山東の社会経済をめぐって」の成果を踏まえながら、河北・山西など華北の他地域に対象を拡げて研究を行う。

[研究実施概要]

- a) 日本軍の山東占領期に同地域で獲得した経済的基盤がその後の華北における日本の進出とどのようにつながっていったかについて研究を進めた。
- b) 関連する内外研究者との交流

班員以外の研究者を交えた研究会を実施し、以下の報告を得た。『満鉄の山西省農村調査について』（内山雅生研究員）、『近代華北皮革産業史研究にむけて』（吉田建一郎氏）『日本占領下の華北統制経済と工場調査』（久保亨研究員）、『行楽地としての“支那”-1920年前後の中国観光業』（瀧下彩子研究員）。

(5) 東北アジア研究班

① 「日本所在近世朝鮮文献資料研究」

(総括・吉田光男)

京都大学附属図書館河合文庫、東京大学総合図書館阿川文庫、天理図書館今西文庫をはじめとして、日本各所に所蔵されている近世朝鮮文献資料の歴史的・文献学的研究を行う。18～19世紀の商人関係文書群など、朝鮮半島では類例が発見されていない非刊本資料も多く、その全体像を把握する必要がある。本研究では、文献資料の調査と分析を行い、平成16～19年度の4ヶ年計画でその成果の刊行を期する。

[研究実施概要]

- a) 朝鮮近世史研究の基礎的基盤を構築するために、日本散在の近世朝鮮文献資料、主として官民の帳簿や成冊などの調査と収集を継続した。
- b) 4ヶ年間のプロジェクトの研究成果として『日本所在朝鮮近世記録類目録』を刊行するため、編集作業を進めた。

② 「清朝満洲語檔案資料の総合的研究」

(総括・松村潤)

近年、中国清朝満洲語檔案資料の重要性が注目されてきているが、清朝の基盤組織である八旗のひとつ鑲紅旗満洲の衙門（事務所）の文書群である、東洋文庫所蔵の「鑲紅旗檔満洲都統衙門檔案」の研究を継続する。同檔案には、衙門が設けられた雍正元年（1723）から民国十一年（1922）にいたる、約2,240件の文書が残されている。その文書群の「概要」については、すでにTBRL

No. 1 *The Bordered Red Banner Archives in the Toyo Bunko* に紹介したが、檔案のもつ歴史的意味、個別檔案の内容等について「研究編」を編み英文での刊行を期す。

[研究実施概要]

- a) 東洋文庫所蔵鑲紅旗檔滿洲語檔案の「研究編」(英文)刊行の作業を前年度より継続して行った。
- b) 「清入関前内国史院檔滿文檔案」(北京の中国第一歴史檔案館所蔵)の『内国史院檔、天聰七年』(ローマ字転写・和訳・原文写真収載)の出版(平成15年3月)につづき、「天聰五年(1631)檔」を刊行するために中国第一歴史檔案館において行った調査と意見交換にもとづき、資料の分析を進めた。また、平成20年度の出版計画に備えるため、「天聰八年(1634)檔」について原稿を作成した。

③ 「清代東アジア・北アジア諸領域の歴史的構造分析」 (総括・石橋崇雄)

ここでは、西欧による世界の一体化が進展する時代と重なりながら、東アジア・北アジアに亘る大規模な統合を独自に進展・実現させて現在の「中国」領域を形成する軸となった、清朝の国家領域構造と対外関係を総合的に分析するべく、1932年以降の満洲国や現在の中国における自治区・民族問題と清朝史との関わりをも含め、清代東アジア・北アジア諸領域における歴史的構造の全容を総合的に捉える研究体制を構築する。

[研究実施概要]

現代中国に直結する清朝の新たな総合的歴史像を提示する具体的作業をすすめている。

- a) 清朝政治史、清代中国社会経済史、清代中国近代政治史、清代モンゴル・露清関係史、清代中国西南民族史の各専門研究領域をもとに、既成の領域世界・時代区分の枠を越えて個別に史料調査・現地調査を実施した。その調査結果をもとに専門研究を深化させ、文献史料の調査・整理・分析を継続して行った。
- b) 平成18～20年度の3年間の研究成果として、平成21年度に英文論文集TBRL No. 14 *The Historical Structures of Eastern and Northern Asia in the Qing Dynasty Era* を刊行する。

(6) 日本研究班

- ① 「岩崎文庫貴重書の書誌的研究」 (総括・佐竹昭広)

東洋文庫所蔵の岩崎文庫には日本の文化・文学・言語を研究する上で重要な典籍が数多く所蔵されているが、その書誌的調査は未だ十分にはなされていない。平成15年までに室町時代以前の成立の古写本・古版本についての書誌解題（Ⅰ～Ⅴ）を公刊してきたことを受けて、ひき続き近世の成立ないしは刊行の貴重書を調査して研究の基盤を整備するとともに、その成果を広く公開することをめざしている。

[研究実施概要]

- a) 岩崎文庫貴重書書誌プロジェクトは、平成18年度に、近世期の成立または刊行の歌書99点を収めた『岩崎文庫貴重書書誌解題Ⅴ』を公刊した。平成19年度は、岩崎文庫の中でも万葉集関係のものを中心とする木村正辞旧蔵書約100点について、その資料群の全体像を把握するため書誌調査を開始し、シリーズⅥ（平成21年度刊行）の公刊に備えた。

〈内陸アジア研究部門〉

(7) 中央アジア研究班

① 「St. ペテルブルグ文書研究」

(総括・梅村坦)

東洋文庫所蔵のマイクロフィルム（ロシア科学アカデミー St. ペテルブルグ東洋学研究所所蔵文書）のうち、ウイグル語・ソグド語・コータン語・マニ文字文献およびモンゴル語文献に関する解題カタログの整備をふまえ、ウイグル文献を中心に、文献学・言語学・仏教学・歴史学等の側面から個別に読解研究をすすめる。5、6世紀から15世紀にいたる中央ユーラシア資料文献学に欠かすことのできないこれらの資料は、小断片にいたるまで精査する価値をもつ。したがって資料使用の基盤を形成することがすべての基本となる。個別文書研究と全体像の明示とを並行してすすめていくことにより、出土地域の歴史像解明をはかる。

[研究実施概要]

- a) ウイグル文書を中心におこなっている画像スキャニング作業を継続した。画像データはデータベース上の目録とを組み合わせることによって、研究資料を充実させるものである。ただし、ロシア科学アカデミーとの契約により、画像資料は一括公刊することができないため、当面本研究グループ内部での閲覧に供する。
- b) とりわけウイグル文書は、他機関所蔵のものとの比較対象が必須であり、その総合カタログ化が必要であるため、前年度に引き続き個別文書研究を

すすめた。

② 「近現代中央アジアにおける民族の創成」

(総括・小松久男)

1991年のソ連解体と中央アジア5ヶ国の独立以来、現今のアフガニスタン情勢まで連動して、中央アジア諸国および、ヴォルガ・ウラル地域ではあらたな「民族意識」がさまざまな形で姿を現し、周辺地域（たとえば新疆ウイグル自治区）にも影響を与えている。このような現代中央アジアの動態を近年における東洋文庫の収集資料を活用して主に歴史学の方法によって検証し、「国民国家」の枠組みを問いなおしつつ、「民族」創成の多様な論理と過程を明らかにする。この地域に「民族意識」の原形が生まれたのは、19世紀末のことであり、これを創出したムスリム知識人たちはおもに新聞・雑誌などの新しいメディアを活用しながら民族的なアイデンティティの形成にあたった。したがって、19世紀末から20世紀初頭に刊行された新聞・雑誌は、重要な史料であり、これをもとに実証的な研究を進める。

[研究実施概要]

- a) 近代中央アジア新聞・雑誌コレクションの整理と研究を継続し、あわせて関連する新刊資料・研究図書収集と分析につとめた。
- b) 平成20年度に、TBRL No.10として、論文集 *Studies on Xinjiang Historical Sources in 17-18th Centuries* を刊行するため英文原稿の校閲作業を進めた。
- c) 研究協力者の参加を得て、本研究テーマに関する研究会を毎月開催した。
- d) 日本における中央アジア史研究の成果を日本語論文英訳シリーズとして国際的に発信するために、インディアナ大学内陸アジア研究所と協力して準備作業を行った。

③ 「敦煌・トルファン出土漢文文書の文献学的研究」

(総括・土肥義和)

これまで、中国の中央で編纂された漢語史料を中心に進められてきた中国の内陸及び内陸アジア諸地域の諸民族の歴史を現地で作成された生の漢文文書を分析研究することによって、諸民族の歴史の実態を明らかにすることにある。このために、本研究は、3世紀から13世紀に至る時代に作成された漢文文書を記述内容によって分類し、それぞれの文書がどのような特質をもっているかを、書誌学的、あるいは古文書学的に研究することによって、諸種文書の外形的な特徴、即ち、様式を究明するとともに、内陸アジア諸民族の歴史の実態を明らかにすることを期す。

[研究実施概要]

- a) ロシアのSt.ペテルブルク東洋学研究所所蔵の漢文文献マイクロフィルム

107リール (Nos. 256-362リール) の文献整理番号とその齣数とを示す対照一覧表について、既存の『俄蔵敦煌文献』(全17冊、上海古籍出版社) に収録された文献(図版)の所在(巻数・頁数)を明示した冊子本を作成するため校正作業を継続した。

- b) 上記 a) の対照一覧表のデータについて、構成メンバーの担当分野にかかわる漢文文書の重要なものを抽出し、その史料価値を究明する作業を行った。
- c) 上記の107リールの漢文文献のうち、トゥルフアンやクチャ、ホータンなどから出土した文献について焼付け写真を作成するため、調査・検出作業を継続した。
- d) 平成20年度に『敦煌・吐魯番出土漢文文書の文献学的研究』を刊行するため、原稿の執筆を進めた。

(8) チベット研究班

①「チベット蔵外文献の書誌的研究」 (総括・川崎信定、吉水千鶴子)

河口慧海将来文献を含む東洋文庫所蔵チベット撰述蔵外文献解題目録のデータベース作成を継続する。また、チベットの伝統的仏教学の基礎研究書である『トゥカン一切宗義書』(インド仏教編)テキスト校訂と語彙収集およびデータベース化を行う。

[研究実施概要]

- a) 東洋文庫所蔵チベット撰述蔵外文献解題目録の編纂カードを点検して、目録データベースの作成を継続した。
- b) チベット人研究協力者の協力のもとに、ひき続き、東洋文庫所蔵チベット蔵外文献中の河口慧海将来文献の校訂と語彙収集およびデータベース化を行った。

〈インド・東南アジア研究部門〉

(9) インド研究班

①「南アジアにおける支配権力—ムガル帝国支配に関わる文書史料の研究」 (総括・小名康之)

本研究において、これまで、ムガル帝国時代の歴史史料に関して、各皇帝の代ごとの歴史書を検討し、さらに通史など、ムガル時代のペルシャ語史料を

検討してきた。近年のインド、ヨーロッパにおける研究によれば、一次史料に基づいた研究の必要性がますます高まっている。今年度においても、一次史料たる、各皇帝名の勅令（ファルマーン）について収集、調査、分析を行う。最終年度の成果出版に向けて、文献の整理、史料研究を行うものとする。

[研究実施概要]

- a) 平成18年度にひき続き、ムガル帝国の公文書について、マイクロフィルムなどによる収集と分類整理につとめるため、小名康之（研究班統括）が大英図書館において調査を行った。
- b) 文献史料を分析し、史料研究を行うため、研究会を実施した。
- c) 6年間の研究成果として、平成21年度に『ムガル帝国支配の文書史料の研究』（仮題）を出版するため、原稿作成の準備作業に入った。

(10) 東南アジア研究班

① 「近代移行期の東南アジアの港市世界に見る自画像と他者像」

（総括・石井米雄）

古くから東西海洋交易の要衝となった東南アジアの港市には、東西世界の商人が逗留するとともに、中国やインド、西アジアなどから多くの移住者が流入した。東南アジアの港市は、地元の人々をはじめ移住者や奴隷さらにはそれらの人々の間に生まれた混血者など、多様な人々が居住する空間となった。他方でこうした港市は、地元世界の外部への窓口となり、地域社会の結節点ともなった。本研究計画では、近代移行期の東南アジアの港市を取り上げ、港市住民がどのように「自分たち」と「彼ら」を区分したかを考察することで、彼らによる地元世界と広域秩序世界を構築するダイナミズムを探る。

[研究実施概要]

- a) 近代移行期の東南アジアの港市に関する文献資料の収集と分析を継続した。
- b) 東南アジアの主要港市における外来系住民の居住空間の歴史的展開を調査するため、弘末雅士（研究班統括）が、インドネシアのチレボンおよびスマランにおいて調査を行った。
- c) 研究会を開催して文献調査や訪問調査の成果をもとに議論構築を進めた。その成果は、平成20年度にTBRL No. 11 *The Changing Self Image of Southeast Asian Society during the Nineteenth and Twentieth Centuries* として出版する。

〈西アジア研究部門〉

(11) 西アジア研究班

① 「イスラーム世界における契約文書の研究」 (総括・三浦徹)

個人間の契約（売買契約など）にとどまらず、広く君臣契約や行政契約（徴税請負など）を含め、現存する文書や史料をもとに、イスラーム世界における契約を保証するシステムと契約によって結ばれる社会関係の全体像を検討する。

[研究実施概要]

- a) イスラーム世界における契約文書の国際比較研究を、国文学研究資料館アーカイブズ研究系の主催する「歴史的アーカイブズの多国間比較に関する研究」と連携して実施するため準備を進め、総括研究会を開催した。平成20年度にその研究成果を日本語およびトルコ語による論文集『オスマン朝と中近世日本における文書史料の比較研究』（仮題）として出版する。
- b) 平成21年度以降に研究成果を刊行するため、ヴェラム文書（東洋文庫所蔵、モロッコの羊皮紙契約文書）の研究を行った。
- c) 他機関の協同プロジェクト「中央アジア古文書研究」（京都外国語大学）、「イスラーム写本・文書の総合的研究」（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）などと共同研究会を催し、イスラーム法廷文書にかかわる研究者のネットワークの構築を継続した。

C. 資料研究

(12) 東アジア資料研究班

① 「東アジア資料の研究」 (総括・斯波義信)

現在、研究資料の収集のためには、内外の文献刊行状況、電子データの構築状況を随時に把握することが必要となる。そのためには、各種の東洋学専門分野にわたり、海外の東洋学の有力機関と不断に交流を続けることが有効である。このたび東アジア資料の調査のため、新たに東アジアの専門家を結集して本部門を組織することとした。さしあたり、台北の中央研究院との間で締結された漢籍全文資料庫の運用、研究員の交換などを担当するほか、上海復旦大学、華東師範大学、上海図書館、北京社会科学院文献中心などとの交流促進の任にあたる。

[研究実施概要]

- a) 台湾中央研究院の李孝悌教授、国立台湾大学の林鋒雄教授を招聘し、研究交流を行った。
- b) 田仲一成（研究班統括補助者）が北京大学中文系を訪問し、研究交流および資料調査を行った。また、瀧下彩子（東洋文庫研究員）は台湾中央研究院歴史語言研究所に滞在し、1930年代中国の社会文化関係資料の所蔵調査を行った。

D. 平成19年度 研究部 6 部門12研究班 研究組織

（◎は専従者、Wは重複を示す）

超域アジア研究部門

研究顧問 石井米雄 (人間文化研究機構機構長)

○現代中国研究班「現代中国の総合的研究」

総括	平野健一郎	(早稲田大学教授)
政治	毛里和子	(早稲田大学教授)
	興梠一郎	(神田外語大学准教授)
	唐亮	(横浜市立大学准教授)
	青山瑠妙	(早稲田大学准教授)
	天児慧	(早稲田大学教授)
	平野聡	(東京大学准教授)
経済	中兼和津次	(青山学院大学教授)
	加藤弘之	(神戸大学教授)
	川井伸一	(愛知大学教授)
	巖善平	(桃山学院大学教授)
	佐藤宏	(一橋大学教授)
	田嶋俊雄	(東京大学教授)
	丸川知雄	(東京大学准教授)
国際関係・文化	平野健一郎 ^W	(前出)
	衛藤瀋吉	(東京大学名誉教授)
	濱下武志	(京都大学東南アジア研究センター教授)
	田中明彦	(東京大学東洋文化研究所教授)
	伊香俊哉	(都留文化大学准教授)
	内田知行	(大東文化大学教授)
	川島真	(東京大学准教授)

貴志 俊彦	(神奈川大学教授)
金 鳳珍	(北九州市立大学教授)
胡 潔	(名古屋大学准教授)
黄 東蘭	(愛知県立大学准教授)
小浜 正子	(日本大学教授)
砂山 幸雄	(愛知大学教授)
高田 幸男	(明治大学准教授)
土田 哲夫	(中央大学教授)
古田 和子	(慶應義塾大学教授)
村田雄二郎	(東京大学教授)

○現代イスラーム研究班「現代イスラームの超域的的研究

—議会主義の展開と立憲体制に関する比較研究—

総括	佐藤 次高 [◎]	(東洋文庫研究部長)
アラブ	長沢 栄治	(東京大学東洋文化研究所教授)
	小杉 泰	(京都大学教授)
	池田美佐子	(名古屋商科大学教授)
	関本 照夫	(東京大学東洋文化研究所所長)
	松本 弘	(大東文化大学准教授)
イラン	八尾師 誠	(東京外国語大学教授)
	黒田 卓	(東北大学准教授)
	吉村慎太郎	(広島大学准教授)
	松永 泰行	(同志社大学一神教学際研究センター 客員フェロー)
	鈴木 均	(アジア経済研究所新領域研究センター 国際関係・紛争グループ長代理)
トルコ	永田 雄三	(明治大学教授)
	設楽 國廣	(立教大学教授)
	新井 政美	(東京外国語大学教授)
	小松 久男	(東京大学教授)
	粕谷 元	(日本大学講師)
	大河原知樹	(東北大学准教授)
	秋葉 淳	(千葉大学准教授)

歴史・文化研究 (アジア諸地域研究)

○東アジア研究部門

前近代中国研究班

「中国古代地域史研究—水経注の分析から—」

総括	宇都木 章	(青山学院大学名誉教授)
	堀 敏一	(明治大学名誉教授)
	松丸 道雄	(東京大学名誉教授)
	太田 幸男	(東京学芸大学名誉教授)
	多田 狷介	(日本女子大学名誉教授)
	藤田 忠	(国士舘大学教授)
	飯尾 秀幸	(専修大学教授)
	塩沢 裕仁	(法政大学講師)
	初山 明	(駒澤大学教授)

「宋代社会経済史用語解の作成」

総括	斯波 義信 [◎]	(東洋文庫特別顧問)
	中嶋 敏	(東京教育大学名誉教授)
	千葉	(桐朋学園大学名誉理事長)
	吉田 寅	(立正大学元教授)
	梅原 郁	(京都名誉大学教授)
	渡辺 紘良	(獨協医科大学名誉教授)
	窪添 慶文	(お茶の水女子大学教授)
	妹尾 達彦	(中央大学教授)
	長谷川誠夫	(千葉工業大学講師)

「東アジア都城の考古学的調査・研究(2)」

総括	田村 晃一	(青山学院大学名誉教授)
	飯島 武次	(駒澤大学教授)
	清水 信行	(青山学院大学教授)
	井上 和人	(奈良文化財研究所平城京跡発掘調査部 考古第一研究室室長)
	妹尾 達彦 ^W	(前出)
	早乙女雅博	(東京大学准教授)
	小嶋 芳孝	(金沢学院大学教授)

「前近代中国の法と社会(2)」

総括(元代)	鈴木 立子	(愛知大学教授)
--------	-------	----------

	大澤 正昭	(上智大学教授)
明 代	鶴見 尚弘	(山梨県立大学学長)
明 清	岸本 美緒	(東京大学教授)
	寺田 浩明	(京都大学教授)
	山本 英史	(慶應義塾大学教授)
	濱島 敦俊	(臺灣暨南國際大學教授)

近代中国研究班

「1910～30年代における日本の中国認識」

総 括	本庄比佐子	(東洋文庫研究員)
経 済	久保 亨	(信州大学教授)
	奥村 哲	(首都大学東京教授)
	金丸 裕一	(立命館大学教授)
	弁納 才一	(金沢大学教授)
	富澤 芳亜	(島根大学准教授)
政 治	内山 雅生	(宇都宮大学教授)
	曾田 三郎	(広島大学教授)
	松重 充浩	(日本大学教授)
文化・社会	三谷 孝	(一橋大学教授)
	瀧下 彩子	(東洋文庫研究員)

東北アジア研究班

「日本所在近世朝鮮文献資料研究」

総 括	吉田 光男	(東京大学教授)
	糟谷 憲一	(一橋大学教授)
	山内 弘一	(上智大学教授)
	井上 和枝	(鹿児島国際大学教授)
	須川 英徳	(横浜国立大学元教授)
	武田 幸男	(岐阜聖徳学園大学教授)
	六反田 豊	(東京大学准教授)
	山内 民博	(新潟大学准教授)
	森平 雅彦	(九州大学准教授)

「清朝満洲語案資料の総合的研究」

総 括	松村 潤	(日本大学名誉教授)
-----	------	------------

加藤 直人	(日本大学教授)
中見 立夫	(東京外国語大学アジア・アフリカ 言語文化研究所教授)
細谷 良夫	(東北学院大学教授)
楠木 賢道	(筑波大学准教授)

「清代東アジア・北アジア諸領域の歴史的構造分析」

総括	石橋 崇雄	(国士館大学教授)
	岸本 美緒 ^W	(前出)
	C. A. ダニエルス	(東京外国語大学アジア・アフリカ 言語文化研究所教授)
	並木 頼寿	(東京大学教授)
	柳澤 明	(早稲田大学准教授)

日本研究班

「岩崎文庫貴重書の書誌的研究」

総括	佐竹 昭廣	(京都大学名誉教授)
語学	酒井 憲二	(田園調布学園大学名誉教授)
	柳田 征司	(奈良大学教授)
	石塚 晴通	(北海道大学名誉教授)
文学	枳尾 武	(成城大学名誉教授)
	今西祐一郎	(九州大学教授)
	大谷 俊太	(奈良女子大学准教授)
	上野 英二	(成城大学教授)
	深沢 眞二	(和光大学教授)
	辻本 裕成	(南山大学准教授)
思想・文化	宮崎 修多	(成城大学教授)
	中野真麻里	(国文学研究資料館准教授)
	和田 恭幸	(龍谷大学准教授)

○内陸アジア研究部門

中央アジア研究班

「St. ペテルブルグ文書研究」

総括	梅村 坦	(中央大学教授)
----	------	----------

社会・文化	林 俊雄	(創価大学教授)
歴史	片山 章雄	(東海大学教授)
モンゴル	杉山 正明	(京都大学教授)
コートン	熊本 裕	(東京大学教授)
ウイグル	庄垣内正弘	(京都大学教授)
	森安 孝夫	(大阪大学教授)
ソグド	吉田 豊	(神戸市外国語大学教授)

「近現代中央アジアにおける民族の創成」

総括	小松 久男 ^W	(前出)
	新免 康	(中央大学教授)
	梅村 坦 ^W	(前出)
	片山 章雄 ^W	(前出)
	濱田 正美	(京都大学教授)

「敦煌・トルファン出土漢文文書の文献学的研究」

総括	土肥 義和	(國學院大学名誉教授)
	池田 温	(創価大学名誉教授)
	氣賀澤保規	(明治大学教授)
	荒川 正晴	(大阪大学教授)
	關尾 史郎	(新潟大学教授)
	妹尾 達彦 ^W	(前出)

チベット研究班

「チベット蔵外文献の書誌学的研究」

総括	川崎 信定	(東洋大学教授)
歴史	山口 瑞鳳	(東京大学名誉教授)
宗教文献	松濤 誠達	(大正大学名誉教授)
密教図像	立川 武蔵	(愛知学院大学教授)
仏教稀覯本	御牧 克己	(京都大学教授)
チベット仏教思想	吉水千鶴子	(筑波大学講師)

○インド・東南アジア研究部門

インド研究班

「南アジアにおける支配権力—ムガル帝国支配に関わる文書史料の研究」

総括	小名 康之	(青山学院大学教授)
ドラヴィダ	辛島 昇	(大正大学特任教授)
サンスクリット	山崎 元一	(東洋文庫研究員)
ウルドゥ	萩田 博	(東京外国語大学准教授)
サンスクリット	水野 善文	(東京外国語大学准教授)
	太田 信宏	(東京外国語大学准教授)

東南アジア研究班

「近代移行期の東南アジアの港市世界に見る自画像と他者像」

総括	石井 米雄 ^W	(前出)
	桜井由躬雄	(前東京大学教授)
	弘末 雅士	(立教大学教授)
	嶋尾 稔	(慶應義塾大学准教授)
	西尾 寛治	(立教大学非常勤講師)

○西アジア研究部門

西アジア研究班

「イスラーム世界における契約文書の研究」

総括	三浦 徹	(お茶の水女子大学教授)
契約観念	後藤 明	(東洋大学教授)
トルコ	永田 雄三 ^W	(前出)
	林 佳世子	(東京外国語大学教授)
トルコ・ペルシア	清水 宏祐	(九州大学教授)
	堀川 徹	(京都外国語大学教授)
	磯貝 健一	(京都外国語大学国際平和言語研究所研究員)

○資料研究

東アジア資料研究班

総括	斯波 義信 ^{OW}	(財団法人東洋文庫特別顧問)
総括補助者	田仲 一成 ^O	(財団法人東洋文庫図書部長)
日本	浅野 秀剛	(千葉市美術館学芸課長)
	片桐 一男	(青山学院大学名誉教授)
	永積 洋子	(東京大学元教授)

	延広 真治	(帝京大学教授)
	吉田 伸之	(東京大学教授)
中 国	丘山 新	(東京大学東洋文化研究所教授)
	小川 裕充	(東京大学東洋文化研究所教授)
	佐藤 慎一	(東京大学教授)
	鈴木 博之	(山形短期大学講師)
	戸倉 英美	(東京大学教授)
	濱下 武志	(京都大学東南アジア研究センター教授)
	矢吹 晋	(横浜市立大学名誉教授)
	平勢 隆郎	(東京大学東洋文化研究所教授)
	片山 剛	(大阪大学教授)
朝 鮮	藤本 幸夫	(麗澤大学教授)
内陸アジア	森安 孝夫 ^W	(大阪大学教授)
情 報	廣瀬 紳一	(A. T Kearney. Principal)

6 部門12研究班23グループ 事務統括

瀧下 彩子^W (東洋文庫研究員)

なお、その他の研究員については、平成 19 年度現在、以上の組織に分属していないため、ここに記載しない。

E. 地域研究プログラム

○イスラーム地域研究資料室

「イスラーム史料情報学の開拓」

本研究では、イスラーム地域の現地語史料について、書誌情報や文献情報の体系化を進めることによって研究の基盤を作り、同時に史資料の体系的な収集や利用のための環境を構築する。史料群を地域社会全体を表す縮図と捉え、これを体系的・俯瞰的に研究することによってイスラーム地域の重層的な像を解明することを目的とする。

具体的には次の3つを柱とした研究活動を行う。

1. 現地語史資料の体系的収集
2. 文献情報ネットワークの構築

3. 文書史料による比較制度研究

[研究実施概要]

- a) 文書史料による比較制度研究では、近現代を含む文書史料（とりわけイスラーム法廷文書や寄進文書など）をもとにその地域間比較を通しイスラーム地域の社会制度・社会関係の研究を進めるべく、7研究会及び1国際シンポジウムを開催した。
- b) アラビア文字資料の所蔵・整理環境改良に向けて「日本におけるアラビア文字資料の所蔵及び整理状況の調査」を実施した。次年度に成果刊行を予定している。また、文献情報ネットワーク立ち上げの一環で、イスラーム地域研究上智大学拠点グループ2と共に東南アジアのキターブ整理・目録作成のため5回の研究会、またアラビア文字資料所蔵9機関でアラビア文字図書DB連絡会を開催し、情報交換と協議を行った。
- c) 海外派遣（調査および資料収集）・招聘：下記の通り実施した。

《派遣》カッコ内は被派遣者

- (1) 「歴史的アーカイブズの多国間比較」パリ研究会参加および研究連絡（三浦徹）
- (2) ウズベキスタンにおけるイスラーム法廷文書の調査及び撮影作業（磯貝健一）
- (3) シリアにおける資料収集・資料調査（柳谷あゆみ）
- (4) オスマン朝研究に関する国際会議（於チューリヒ大学）参加（Stefan KNOST）
- (5) イランにおける資料収集・資料調査（為永憲司）

《招聘》

- (1) オスマン朝期文書史料研究者オゼル・エルゲンチ氏（トルコ）を招聘して国際シンポジウムを開催、研究交流・意見交換等を行った。
 - (2) オスマン朝期ワクフ研究者アストリド・マイヤー氏（スイス）を招聘し、研究会開催・意見交換を行った。
- d) イスラーム地域研究資料室ウェブサイトの開設（2007年6月）：活動報告（原則として実施1ヶ月以内に掲載）と収集資料DB、イスラーム地域史資料参考サイトへのリンク及び解説集を掲載している。収集資料DBは20年度初旬に初期入力分の公開を開始する。また日本中東学会と提携し「日本における中東研究文献DB」を構築し、入力作業を進めた。

○ 現代中国研究資料室

「現代中国研究資料の収集・利用の促進と現代中国資料研究の推進」

《現代中国研究資料室》は、現代中国研究の基盤となる文献・資料の体系的な収集・利用態勢の拡充とそのため研究に重点を置く。文献・資料の収集にあたっては、各研究拠点と連携するほか、とくに基本的図書・資料の充実を図る。さらに書誌情報の整理、中国語書誌検索システムの整備および資料情報の提供をおこない、わが国の現代中国研究全体を支援する態勢を構築し、史料学的観点に立った現代中国研究を開拓する。

具体的な事業としては、以下の3つを柱として活動をおこなう。

1. 現代中国関係資料の組織的、体系的な収集と整理、公開
2. 諸機関との連携、共同を進め、現代中国関係資料の利用を促進する。
3. 現代中国関係の一次資料に基づく実証的研究の推進。

[研究実施概要]

a) 中国語資料の体系的収集と、収集資料の研究

1950から60年代において、中国で起きた様々な政治運動の一次資料の入手に成功した。また、雑誌のリプリント版やマイクロフィルムについて、日本国内で所蔵していないものを中心に収集を行った。2月にはこれらの資料についての共同研究会を2回開催し、来年度の本格的展開へ準備を進めた。この他、県レベルでの資料公開や出版状況の視察のため、大澤研究員が8月に中国・無錫に出張し、無錫市档案馆で館長等と交流を行い、地方アーカイブの状況について知見を深めた。また室長である高田幸男が1月に韓国に出張し、韓国の中国研究者と交流し、韓国における現代中国資料収集の状況について知見を深めた。

b) 資料収集・資料情報の共有面での分担・協力の推進検討を行った結果、資料のデジタル化とNACSIS-Webcatへの登録を推進することとし、後者について、研究員をNIIの研修事業に参加させ、H20年度での本格的展開の準備を行った。以下のワークショップを開催した。

c) ネットワーク化と収集資料の整理・公開についての研究

近年急速に発達してきたデジタル資料やデジタルアーカイブの問題点、研究成果発信のためのデータベース構築、そして何よりも国外の状況については、情報や経験の蓄積がなされていないという弱点が存在したため、その問題点を解消すべく、また国内外の研究者と実務関係者（ライブラリアン、アーキビスト）との間のネットワーク形成という狙いもあって、本資料室では「中国研究データベース・ワークショップ」を開催した。

9月には、本資料室の海外共同研究者でもあるフランスのアンリオ氏と国立公文書館の大沢武彦氏を招いて、日仏のデジタルアーカイブの紹介と問題点について、議論を行った。結果、技術的な問題（画像の保存規格やGIS利用）と著作権の問題について、日仏双方で試行錯誤の状態にあることが判明した。

2月には、台湾・中央研究院の研究者2名（内1名は現在アメリカで研究中）とアーキビスト1名を招いて、台湾・アメリカでの歴史研究とデジタル化の現状について報告をお願いした。結果、台湾・アメリカともに、研究と資料のデジタル化が大いに進んでおり、日本が国際的に極めて遅れている現状が判明した。

また、以上の研究事業を対外的に発信するために、ウェブサイトを構築した。10月に日本語版を、11月に英語版、簡体字中国語版、繁体字中国語版を開設した。2月にはインターネット上に公開されている一次資料（統計データ、デジタルライブラリ、デジタルアーカイブ等）へのリンクとして、「デジタルリソースリンク集」を構築した。

F. 東洋文庫研究員等・研究課題一覧

研究員	研究課題
青山 瑠妙	現代中国政治・外交の研究
秋葉 淳	オスマン帝国末期の社会及び制度
浅野 秀剛	日本版画美術の研究
天児 慧	現代中国の政治体制及び国際関係
荒 松雄	南アジア史、民族・宗教の研究
新井 政美	トルコ近代史
荒川 正晴	中央アジア古代史
飯尾 秀幸	中国古代国家史
飯島 武次	殷周時代の考古学研究
池田 温	中国中古史、前近代東亜文化交流史
池田美佐子	エジプト近現代史
伊香 俊哉	日本近現代史、戦争責任研究
石井 米雄	タイ史・三印法典の研究
石塚 晴通	日本語の歴史的研究、古代漢字文献学
石橋 崇雄	清朝政治史
磯貝 健一	イスラーム期中央アジア古文書研究
市古 宙三	太平天国及び中国共産党の研究
井上 和枝	李氏朝鮮時代郷村社会史研究・朝鮮女性史研究
井上 和人	東アジア古代都城制度の比較研究
今西祐一郎	源氏物語を中心とした平安時代文学の研究
上野 英二	平安朝文学の研究

内田 知行	中華民国社会史
内山 雅生	近代中国華北農村經濟史
梅田 博之	現代朝鮮語の記述的研究
梅原 郁	宋元時代の法制制度の研究
梅村 坦	ウイグル民族誌、内陸アジア史
大江 孝男	現代朝鮮語及び中期朝鮮語の研究
大河原知樹	19-20世紀シリアの社会史・政治史
大澤 肇	近現代中国における学校教育史
大澤 正昭	唐宋時代社会史
太田 信宏	南インド近世史
太田 幸男	秦墓竹簡の研究
大谷 俊太	室町・江戸時代文学の研究
岡田 英弘	アジア史
丘山 新	中国仏教資料研究
小川 裕充	中国絵画資料研究
奥村 哲	中国近現代史
小名 康之	インド・ムガル朝史
風間喜代三	印欧語の比較言語学的研究
粕谷 元	トルコ現代史
糟谷 憲一	18-19世紀朝鮮政治史
片桐 一男	日蘭文化交渉史の研究
片山 章雄	中央アジア古代史
片山 剛	明清時代広東における族譜研究
加藤 直人	清朝の民族統治政策・清代档案史料の研究
加藤 弘之	地域開発の現状と政策に関する実証研究
金丸 裕一	中国政治經濟史・日中関係史
辛島 昇	南アジア史
川井 伸一	中国企業研究
川崎 信定	チベット仏教の研究
川島 真	近代中国外交史
菊池 英夫	唐宋時代の行政および法制の研究
貴志 俊彦	近代中国における権力と秩序の形成史
岸本 美緒	明清時代地方社会史
北本 朝展	文献のデジタル・アーカイブ化
金 鳳珍	東アジアの歴史・思想・国際関係
草野 靖	宋代税財政史

楠木 賢道	清初の「民族」関係
久保 亨	中国近現代史
窪添 慶文	魏晉南北朝時代史
熊本 裕	イラン語史の研究
黒田 卓	近現代イラン史
氣賀澤保規	魏晉南北朝隋唐時代の政治社会文化史
巖 善平	中国の三農問題
胡 潔	和漢比較文学の研究・比較家族史の研究
黄 東蘭	近代日中関係史
興梠 一郎	現代中国論、中国現代史
小嶋 芳孝	渤海文化の考古学的研究
小杉 泰	現代イスラム政治の研究
後藤 明	イスラム社会と政治の研究
小浜 正子	中国近現代都市社会史
小松 久男	中央アジア近代史
早乙女雅博	東アジア考古学の研究
斉藤真麻理	中世日本文学の研究
酒井 憲二	日本語の史的研究
桜井由躬雄	ベトナム史
佐竹 昭広	中世日本文学の史的研究
佐藤 次高	西アジア・イスラム史
佐藤 慎一	中国近代政治史資料研究
佐藤 宏	農村経済社会の長期変動
塩沢 裕仁	中国古代歴史地理研究
重近 啓樹	秦漢社会経済史
設楽 国広	オスマン帝国末期政治史
部 勇造	南アラビア古代史
斯波 義信	中国社会経済史
嶋尾 稔	ベトナム史
清水 宏祐	セルジューク朝時代イランの研究
清水 信行	古代の日本・大陸交流史
志茂 碩敏	13・4世紀モンゴル政権中枢・中核の研究
庄垣内正弘	チュルク語の研究
新免 康	東トルキスタン史
末成 道男	東アジア社会人類学
須川 英徳	高麗・朝鮮時代の商業

杉山 正明	モンゴル帝国史
鈴木 均	イランおよびアフガニスタンの地域研究
鈴木 博之	徽州民間祭祀の研究
鈴木 立子	元朝社会経済史
砂山 幸雄	現代中国思想・文化・政治体制
妹尾 達彦	中国古代・中世都市史
関尾 史郎	敦煌・トルファン文書研究
関本 照夫	東南アジア伝統工芸業の研究
曾田 三郎	中国近代政治・社会史
高田 幸男	長江下流域の地域社会・エリート・教育団体
瀧下 彩子	近現代中国文化史
武内 紹人	古代チベット語の歴史言語学的研究
武田 幸男	朝鮮古代・近世史
田島 俊雄	中国農業・農家の経済計算と所得分配
多田 狷介	漢魏晋史
立川 武蔵	チベット密教教理の研究
田中 明彦	現代東アジア国際政治の研究
田仲 一成	中国演劇史
田中 時彦	日本の政治的近代化の研究
C. A. ダニエルス	清代社会経済史、中国技術史
田村 晃一	東北アジアの考古学研究
竺沙 雅章	中国仏教文化史
千葉 巖	宋代宮廷史
辻本 裕成	中古・中世日本文学の研究
土田 哲夫	1920～40年代の中国政治・外交史
鶴見 尚弘	明・清時代社会経済史
寺田 浩明	中国明清法制史
唐 亮	現代中国政治史の研究
戸倉 英美	中国古典文学資料研究
枋尾 武	和漢比較文学の研究及び日本に伝来した漢籍の研究
土肥 義和	西域出土漢文文書の研究
富澤 芳亜	中国近代経済史
島海 靖	日本近現代史
中兼和津次	現代中国経済・移行経済の研究
長沢 栄治	近代エジプト社会経済史
永田 雄三	オスマン帝国社会経済史

永積 洋子	日本近世対外交渉史
中見 立夫	清代モンゴル史・清代文書の史料的研究
並木 頼寿	中国近現代史
西尾 寛治	マレーシア・インドネシア近世史
西田 龍雄	チベット・ビルマ語派の研究
延廣 眞治	江戸・明治の文芸
萩田 博	ウルドゥー語学・文学の研究
長谷川誠夫	宋代官僚制の研究
八尾師 誠	20世紀初頭のイランにおける立憲革命の研究
花田 宇秋	正統カリフ・ウマイヤ朝史
濱下 武志	中国近現代史
濱島 敦俊	中国近世社会経済史
濱田 正美	中央アジアにおけるイスラーム研究
林 佳世子	オスマン朝期中東社会史
林 俊雄	中央ユーラシア史・草原考古学の研究
原 實	インド古代文学の研究
平勢 隆郎	中国考古資料研究
平野健一郎	近代東アジア国際関係論
平野 聡	中国党支配（国民党・共産党）の史的研究
弘末 雅士	インドネシア宗教社会史
廣瀬 紳一	漢字文化圏電子情報学の研究
深澤 眞二	連歌・俳諧の研究
藤田 忠	中国古代政治・社会史
藤本 幸夫	朝鮮本研究
古田 和子	情報・流通ネットワークの歴史的分析
古屋 昭弘	中国語の音韻史的研究
弁納 才一	近現代中国農村経済史
細谷 良夫	清朝政治史
堀川 徹	中央アジア文書研究
本庄比佐子	近現代日中関係史
松重 充浩	近現代中国政治・社会史及び東北アジア地域史
松永 泰行	現代イランの政治・宗教及びシーア派研究
松濤 誠達	インド古代神話学の研究
松丸 道雄	殷周金文の研究
松村 潤	東北アジア民族史
松本 弘	イエメン地域研究、エジプト近代史、現代中東政治

丸尾 常喜	魯迅の文学とその伝統
丸川 知雄	中国の産業集積および日中経済関係
三浦 徹	イスラム都市社会史
水野 善文	古典サンスクリット文学と中世ヒンディー文学
三谷 孝	近現代中国の秘密結社研究
御牧 克己	チベット宗義書の研究
宮崎 修多	近世近代漢詩文の研究
村井 章介	日本中世を中心とする東アジア文化交流史
村田雄二郎	中国近代ナショナリズム、改革開放期の文化問題
毛里 和子	現代中国政治・外交及び東アジア国際関係
本野 英一	清末民初における対外経済関係
初山 明	中国古代法制史・辺境史
森平 雅彦	朝鮮中世・近世史
森安 孝夫	古代ウイグル文書の研究、中央ユーラシア古代中世史
矢沢 利彦	西洋人の見た中国事情研究
柳澤 明	清代外交史・民族関係史
柳田 征司	日本語の歴史的研究
柳谷あゆみ	中世イスラーム政治史、イスラーム地域資料研究
矢吹 晋	近現代中国経済
山内 弘一	李朝史、朝鮮儒教研究
山内 民博	朝鮮後期郷村社会史研究
山口 瑞鳳	チベット史、チベット語文法、チベット仏教研究
山崎 元一	インド古代史
山本 英史	17-19世紀中国社会構造の研究
山本 毅雄	東洋学研究資料のデジタル・アーカイブ化
吉田 寅	中国塩業史
吉田 伸之	日本近世都市社会史
吉田 光男	朝鮮近世史
吉田 豊	ソグド語及びソグド語文献の研究
吉水千鶴子	インド・チベット仏教思想史の研究
吉村慎太郎	イラン近現代史
六反田 豊	朝鮮中世・近世史
和田 博徳	明清時代社会経済史
和田 恭幸	仮名草子および近世通俗仏書の研究
渡辺 紘良	宋代社会史

(全 200 人)

G. 日本学術振興会科学研究費補助金による調査研究

(1) 研究成果公開促進費

「東洋学多言語資料のマルチメディア電子図書館情報システム」

(An Information System of Multimedia Digital Library of Multilanguage Materials for Asian Studies)

[東洋文庫電算化委員会委員長：斯波義信] (平成6年度以降採択)

[分野] 「東洋学全般」

[目的・内容]

本プロジェクトは、東洋学に関する世界5大機関の一つに数えられる研究所図書館である(財)東洋文庫が80年にわたり収蔵してきた言語種類50数種、部数約400,000件、冊数約940,000冊におよぶ大量の他言語資料について、従来構築した書誌データのオンライン検索の基礎の上に、画像資料をデジタル化した上、インターネットを通じて内外の研究者が自由に利用できるようにすることを目指している。

本文庫のモリソン・岩崎コレクションには国宝・重文を含む貴重な文献・絵画が含まれる。これらは、本文庫として従来から細心の注意を払って保存してきたが、近年の電子技術により、これをデジタル撮影して保存し、画像データベースとして公開すれば、内外の要請に応えることができ、また資料保存の面でも劣化に対応することができる。特に地図(江戸地図200種、欧米人のアジア地図300種)、銅版画、浮世絵、挿絵本、中国南北朝拓本、考古学者の中国・朝鮮・日本関係発掘資料、器物写真など、デジタル化して画像資料として研究者に提供する価値のあるものが多い。また、マルコ・ポーロ東方見聞録のテキスト50数種、16世紀以来のイエズス会士の書簡、江戸時代のオランダ商館関係者の記録などの古文書、岩崎家収蔵の万葉集、源氏物語、徒然草などの貴重古典籍なども、全文テキストとして公開することが内外研究者から期待されている。昨年度から、画像データベースの構築に着手した。台湾の国家典藏数位計画、上海の資料構築計画、シンガポールアーカイブのデジタル資料状況などを視察した上、独立行政法人情報学研究所と技術提携し、資料のデジタル化を試行してきた。文化庁・総務省によるデジタルアーカイブの構築にも情報学研究所を通じて画像資料を提供している。本文庫として、デジタル化の対象となる膨大な資料を擁している。デジタル化計画は着手したばかりであるが、関係諸機関との協力の下に、できるだけ早く目的を達成する。

[事業実施概要]

本年度における構築実績は次のとおりである。

(1) 書誌データ

- a) 欧文逐次刊行物2,638件のデータをチェックし、Websiteに公開した。
- b) タイ語878件を外注により入力し、websiteに公開した。

(2) 全頁データ

- a) 岩崎善本の全頁データ6,038頁（過年度に外注撮影済み）をWebsiteに公開した。
- b) モリソンパンフレット20,000頁を外注により撮影し、うち3,208頁をWebsiteに公開した。

(3) 画像データ

- a) 中華帝国図38枚を外注によりデジタル撮影した。
- b) 彩色絵画592点を外注により撮影、デジタル加工して入力した。
- c) 洋書善本20冊、10,774頁を外注によりデジタル撮影した。
- d) 梅原考古資料（器物写真）を2,015件、追加して、Websiteに公開した。

(4) 動画データ

香港の祭祀と演劇につき、次の資料をWebsiteに公開した。

- a) 概観：香港における広州人、潮州人、海陸豊人の3つのエスニックグループごと神輿巡遊、祭祀儀礼、演劇の状況を動画により紹介した。（約50分）
- b) 香港龍躍頭太平清醮：1982年、広東正一派道士による儀礼、及び粵劇団による演劇、郷民による祭祀行事などを動画により詳細に示した。（約50分）
- c) 香港粉嶺太平洪朝：1982年、広東正一派道士による儀礼、歌曲団による演唱、郷民による神輿巡幸などの状況を動画により詳細に示した。（約50分）

本年度実績の特徴は、書誌データの公開が前年度までにほぼ完了したことを受けて、画像、動画の公開に着手し、その入力と公開を推進したことにある。今後もこの方針を続けたい。

[作成担当者] 田仲一成（図書部長）

(2) 基礎研究 (B)

「古代インドの環境論」

[研究代表者：原 實]（平成18年度採択、3カ年間・第2年度）

【目的】

科学技術、機械文明の発達は反面自然破壊を結果し、近年生態系の変化や地球の温暖化が問題視され、人間とそれを取巻く自然環境との共存が識者の注意を喚起しているが、この問題が古代インドにおいてどのように考えられていたかを見直そうとするのが本研究の目的である。

インドには古くから「不殺生」の思想があり、それは仏教の「山川草木悉有仏性」

「草木国土悉皆成仏」の教義を通じて我が国にも伝えられた。その思想的背景をより体系的に検討する為に、この視点から梵文原典や漢訳仏典を詳細且つ綿密に検討し直す必要がある。

研究代表者は先ず現在古代インド乃至仏教の環境問題に関心を寄せている欧州の有力な学者を訪ねその教示を得つつこの研究に国際性を持たせ、その水準に於いて同様の諸氏の協力の下、この研究を進めていきたいと考える。

〔研究実施概要〕

前年度に引き続き、本研究は財団法人東洋文庫に事務局を置いて、順調にその研究活動を継続した。この間、新たに関心を共有する田辺和子（財団法人 東方研究会研究会）と、松村淳子（神戸国際大学教授）を研究分担者に、又清水洋平（日本学術振興会特別研究員）と北田信（ドイツ連邦共和国ハレ大学哲学博士）を研究協力者に依頼して、年度始めより研究集会に参加することとなった。

今年度は本郷の学士会館分館に於いて4回の研究集会を開催し、3人の研究分担者と1人の研究協力者がその研究を発表した。即ち、平成19年4月3日・岡田真美子「環境思想としての悉有仏性論」、6月19日・デレアヌ・フロリン「パリ文献における動物像—象徴と観察の間」、10月23日・川崎信定「仏教の自然環境論—考察—草木に心はあるか?—バヴィヤの見解—」、平成20年2月12日・北田信「アーユルヴェーダにおける環境—美食、戦争、環境破壊—」の4回であり、研究発表後に自由討論に入って意見の交換を行った。

研究代表者は課題に沿って「古代インドの草木観（第一部）」と題する論文を「超域アジア研究報告」第4号（東洋文庫、2006）に発表し、さらにその第二部・第三部をあわせ4月12日、日本学士院の例会において報告を行った。その他、再度に亘って八王子の創価大学・国際高等仏教学研究所に於ける研究集会に参加し、又11月には愛知学院大学に招聘されて口頭発表を行った。

尚、今年9月愛知学院大学に於いて開催される日本印度学仏教学会第59回学術大会のパネル討論会に本研究が採用され、平成19年度の成果を中心として、原實が基調講演、4名の研究分担者の個別問題の講演、川崎信定が総括講演を行うこととなっている。

〔宋代社会経済史語彙解釈のデータベース化〕

〔研究代表者：斯波義信（平成19年度採択、4ヶ年間・初年度）

本研究は、中国社会経済語彙の電子辞典化を狙いとし、手始めにその基幹をなす宋代史語彙を選定し、分析・解説を施し、データベース化を図るものである。われわれは中国経済史の基本資料に当たる13種の歴史正史の食貨志（経済・財政記録）の詳しい訳註を作成してきた。このうち最も大部な『宋史』食貨志篇の訳

註成果は、逐次刊行の結果平成17年度に全6巻の完成を見た。同じく宋代の根本資料たる『宋会要輯稿』食貨篇については、年月日・詔勅、人名・書名、職官、地名の各語彙索引を順次刊行し、残りの一般語彙（経済・社会・法制・文書・難読語彙等）についてもすでにそのデータベースを構築した。

このような成果をもとに、『宋史』および『宋会要輯稿』の食貨篇から採録した語彙（前者1万語、後者9万語）について、語彙とその解釈を選定集成し、語彙解の編纂、電子化を図るものである。

[研究実施概要]

1. 研究者および補助研究者全体の会合を2度開催し、解説すべき「宋代社会経済史用語」選定のための規準、用語の分類、解説の方法・内容、作業手順、分担等を検討・調整し、準則を共有して作業をすすめる体制を整えた。
2. 「用語」解説に当たっては、同義語、用法、用例、時代・地域の特定制等を考慮することとし、具体例を作成した。
3. 『台湾私法』『清国行政法』等を活用して「用語」の分類（コード・サブコード化）を行った。
4. 『宋史食貨志訳註』全6巻の電子テキストを作製した。
5. 『宋史食貨志訳註(5)(6)語彙索引』『宋会要輯稿 食貨篇社会経済用語集成』を刊行した。
6. 上記2種刊行物及び刊行済の『宋史食貨志訳註(1)～(4)語彙索引』をもとに、「宋代社会経済史用語」の選定作業をほぼ終了させた。
7. 中国社会経済史用語解説に関する先駆的な業績としての星斌夫『中国社会経済史語彙』正・続・三編の3冊の全文を電子化し、項目の索引を作成した。
8. ノートパソコンおよびプリンターを購入した。
9. 各種語彙解説書及び『漢語大辞典』等を購入した。
10. 社会経済用語は「筆記」「稗史」範疇に属する史料中にも存在することを考慮し、筆記等史料検討グループを本研究事業内に付設した。

(3) 基盤研究 (C)

[敦煌・トルファン漢語文献の特性に関する研究]

[研究代表者：土肥義和]（平成18年度採択、3ヶ年間・第2年度目）

本研究は、旧来、中国の中央で編纂された漢語史料を中心に進められてきた敦煌・トルファンなど内陸アジア諸地域の諸民族の歴史を、現地で作成された生の漢文文書を分析することによって、諸民族の歴史の実態を新たに研究することにある。これに関連して、近年東洋文庫がmicrofilmで入手したロシア科学アカデミー東方学研究所サント・ペテルブルク分所の漢文文書がどのような特質をもって

いるかについて、書誌学的、あるいは古文学的な整理と研究を行う。このために、本年度は、「サンクト・ペテルブルク東洋学研究所所蔵漢語文献 microfilm (107 リール) 文献番号・コマ数対照表」をデータベースとして作成すること、及びそれらを共同で利用・研究する研究者組織をつくることを目的とする。

[研究実施概要]

1. 東洋文庫が収集したロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクト・ペテルブルク分所蔵内陸アジア出土文書microfilm中、敦煌等漢語文献 (40リール) 『文献番号・コマ数対照一覧表』のデータベース化完了にともない、これを一般の閲覧 (公開) に供するための『仮目録 (第一稿)』として刊行するための準備にとりかかった。
2. この『仮目録』(リール)には、既存の『俄蔵敦煌文献』(全17冊, 19,000余点, 上海古籍出版社)に収録されていない約数百点の漢語文献新資料が含まれていることが明らかになったので、本年度から新資料の内容分類・研究に着手した。
3. 本研究が対象とする内陸アジア出土漢語文献を補充するために、本年度も中国唐宋文物視察団 (土肥義和・石田勇作・張銘心・宇都宮美生・西尾亜希子ら)を組織して、旅順博物館・河南大学歴史系・開封市繁塔 (国家重点文物指定)・中国国家図書館善本特藏部等を訪問した (2008年2月29日~3月8日)。
 - (1) 旅順博物館では、大谷探検隊吐魯番将来遺品に含まれる唐代彩色絵画資料断片の接続関係の調査を行った。
 - (2) 河南大学では、北宋第二代太宗期 (10世紀後半)に建立した繁塔に現存する供養人題記や石経題記を昨年引き続き調査し、写真による資料の収集を行った。これらの収集は、敦煌莫高窟に残っている厩大な壁画群に記された供養人層の題記と比較する上で貴重である。
 - (3) また開封では、同市博物館主任研究員や河南大学の専門研究者と繁塔の資料について2回の検討会議を行い、ここでえた成果の一部は来年の研究報告書において発表することが確認された。
4. 中国国家図書館では、いまだ未公開の「社」関係文書数点の特別の閲覧許可をえて、文書の調査と抄録とを行った。

(4) 外国人特別研究員奨励費

「オスマン都市の自治的行政組織—タンジマート期以前のアレppo—」

[申請者: Stefan KNOST (学振外国人特別研究員)、研究代表者: 三浦徹]

(平成18年度採用、3ヶ年間・第2年度目)

イスラーム世界の都市はヨーロッパ都市のような自治制度をもたないとされてきたが、街区における宗教施設や寄進に着目し、法廷文書や寄進文書を

もとに、寄進者、寄進財産の運用と管理、それにかかわる行政官、街区の名士などの役割を分析することによって、街区の宗教施設や寄進財産が、地域住民に公的なサービス（集会場、水道、浴場など）を提供し、街区が自治団体として機能していたことを実証的に検証する。イスラーム法廷文書とワクフ（寄進）関係文書から、上記の目的にそったデータベースを作成し、シリアの2都市（アレppo、ダマスカス）を対象とし、都市社会組織についての比較研究を、特別研究員と受入研究員が共同して行い、オスマン朝時代の都市の社

会組織について、街区のもつ自治的役割をあきらかにする。

[研究実施概要]

2007年度は現地での文書史料調査（2007年11月?12月にかけてシリア及びヨルダンにて歴史文書館での文書史料調査）を実施し、結果を踏まえつつ前年度の検証をさらに発展させた。具体的には、隣人共同体のイマーム（ここでのイマームは共同体の長を指しモスクのイマームとは異なる）隣人ワクフ隣人モスクの三つがタンジマート以前アレppoの行政において枢要をなしていたとの仮説のもとに、文書史料及び文書史料データベースを用いてこの精査を行い以下の通り成果を発表した。本成果はイスラーム世界の都市における自治制度の存在を実証しその具体的な構造を明らかにしたものであり、イスラーム都市及びその社会制度研究に新たな知見をもたらす重要なものと考ええる。

研究分担者クノスト研究員は、これらの研究成果の一部として "The Impact of the 1822 Earthquake in Aleppo on Waqf Administration ."in Sluglett, Peter et al.(ed.):Recent Research on Bilad al-Sham under Ottoman Rule (1517-1918). Festschrift Abdul-Karim Rafeq, Leiden(Brill),"Renovation and restoration of waqf property and their financing in Ottoman Aleppo(18th and 19th century). "In:Bakhit, Adnan(ed.):The Awqaf in Bilad al-Sham from the Arabic Islamic Conquest until the End of the Twentieth Century.Amman (The University of Jordan),等論文9件を発表し、また海外の2国際会議にて成果報告を行った。（詳細後述）。

また、海外におけるこれらの報告及び研究交流の結果、オスマン朝社会史研究者アストリド・マイヤー氏の訪日及びワークショップ開催（イスラーム地域研究東洋文庫拠点主催）などオスマン朝社会史研究、文書研究の分野で海外研究者との研究交流の活性化が実現された。国内でもクノスト研究員は若手研究者との文書史料講演会を継続的に実施し、平成19年7月には東京大学にて大学院生等を対象としたオスマン朝アレppoのワクフ及びスーフィー教団に関する研究セミナー（アラビア語文書史料講読を含む）を実施するなど、研究交流及び若手研究者の育成においても成果を上げつつある。

H. その他の民間助成金による調査研究

(1) 三菱財団人文科学研究助成金特別事業

① 「中国社会経済史用語解（宋代篇）作成の研究」

〔代表者：斯波義信〕（平成17年10月～20年9月・3ヶ年間・最終年度）

中国社会経済史の研究が興って約100年に近いが、この研究の基礎前提をなす漢籍史料の校訂・読解・および必要情報の抽出という作業段階において、これを容易にする専門的な辞書・用語解がまだ整っておらず、研究の推進や普及を困難にしている。中国社会経済の用語は、用例・用法ごと、時期・地域ごとに多義かつ複雑であるのに、専門辞書が皆無にちかく、詳細な漢和辞典においてもまれにしか掲載していない。本研究はこれを打開するため、これまでに蓄積された用語知識を集成してデータベース化しつつ、研究者が常備使用できる用語解を作成することをめざし、とりあえずこれを宋代史について実施する。

東洋文庫では、創立当初からの継続的事業の一つとして、中国経済史の基本史料に当たる13種の歴代正史食貨志（経済・財政記録）の詳しい訳註を作成してきた。このうち最も大部で、しかも元・明・清時代の制度や実体のルーツを記録する『宋史』の食貨志篇について、その訳註を逐次刊行し平成17年度にその完成を見るに至った。

そこで、これまでに蓄積された用語解釈を選定集成し、国内及び海外の宋代社会経済史の研究者が常時必携参照し、研究全体の推進に資すべき用語解の編纂を計画した。用語の選定範囲は基本的には『宋史』食貨志篇の各章とするが、各章の記述の源泉をなす『宋会要輯稿』食貨篇の語彙索引（現在同時推進、刊行中）及び専門学術書中の附註なども広く参照し、また各語彙の用例、用法、典拠史料、時期別、地域別の限定も付し、要するに実用的な辞書機能を帯びた用語解釈の集成を行なうものである。この企画を実現し、さらに将来その成果を日本文・英文で刊行することに至れば、中国社会経済史の研究の推進と解釈の深化が大いに期待される。

〔研究実施概要〕

1. 初年度に作成した『宋史食貨志訳註(一)～(五)』のテキスト・データベースにつづき、上記『宋史食貨志訳註(六)』のデータベースを作成した（ともに語彙解釈作業のため）。
2. 上記の『宋史食貨志訳註(五)(六) 語彙索引』につき、(五)に関して、社会経済語彙の抽出を完了させた。
3. 収集済みの『宋会要輯稿』食貨篇一般語彙カード7万枚については、社会経

済語彙のみの抽出作業を完了させ、更に5000枚あまりを追加補充した。

4. 宋代社会経済史語彙解釈の編集作業については、全体会を2回開催して語彙選定の方法、語彙解釈の方法等、具体的な話し合いを行い、その結果、語彙選定は大中小項目に分けることとし、大項目に収める事項はほぼ『宋史食貨志』の各篇目に従うが、このほかに大中小項目を問わず、現在の「社会史」分野・「経済史」分野の専門用語に対応する歴史語彙を立項して加えることにした。
5. 語彙解釈の方法については、大項目「商税」案を事例として検討した。
6. 各大項目解説担当者を決定した。

②「清代諸領域の歴史的構造分析：総合研究

－清代東アジア・北アジアにおける政治・社会・経済・民族・文化の展開－

[研究代表者：石橋崇雄]（平成18年10月～21年9月・3ヶ年間・第2年度目）

西欧による世界の一体化が進展する時代と重なりながら、東アジア・北アジアには清朝による大規模な統合が実現した。しかも清朝の統合が現在の中国の領域を形成する軸となっているが、それは単に清朝の領土を継承したというだけにとどまらず、その政治・社会・経済・民族・文化の展開をも継承していることに大きな特徴がある。これらは全て、現在の中国分析に直結する研究課題であるが、その総合的な研究については未だ充分とはいえない現状にある。本プロジェクトは、中国内地の諸領域世界とその国家領域構造と対外関係を総合的に分析することによって、現代中国に直結する新たな清朝の総合的な歴史像を提示することを目的とする。その際、従来その歴史的な意義について充分に言及されてこなかった、1932年に中国東北部で造られた満洲国の位置付けの問題や、現在の中国における自治区・民族問題と清朝史との関わりについても、新たな具体像を提示したい。

[研究実施概要]

本プロジェクト研究グループの各構成分担員は、研究助成金を利用して個別に史料調査・現地調査を実施し、それを基盤に専門研究を深化させ、各分担者の研究成果を持ち寄って総合検討を進め、論文集に結実して、その成果を公表する計画である。但し、初年度は現地調査を予定していた構成分担員が本務校の事情で調査期間を次年度に繰り越さなければならない等の事情から、清代実測地図を初めとする工具類の購入と不定期なプロジェクト会議を開催したほかは、代表研究者（石橋）が清朝政治都市研究の一環として北京における短期の基礎作業と現地における打ち合わせを2度実施しただけに留まり、本格的な現地調査は次年度以降に残される結果となった。

2. 学術図書出版

新しく発表される、或いは「調査研究」の成果として東洋学に関する重要な研究業績を出版し国内国外に紹介する。また、アジア研究の国際化をさらに促進すべく、東洋文庫を中心とする日本のアジア研究の優れた研究成果を、主に英文等の欧文を中心に『東洋文庫欧文論叢』として刊行する。

A. 定期出版物刊行

『東洋学報』（東洋文庫和文紀要） 第89巻第1～4号	A 5判	4冊	526頁
<i>Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko</i> （東洋文庫欧文紀要）No.65	B 5判	1冊	130頁
『近代中国研究彙報』 第30号	A 5判	1冊	115頁
『東洋文庫書報』 第39号	A 5判	1冊	192頁
『東洋文庫年報』平成18年度版	A 5判	1冊	114頁

B. 論叢等出版

『宋会要輯稿食貨篇社会経済用語集成』	A 4判	1冊	470頁
『水経注疏訳注』[上巻；渭水の条・巻17, 18]	A 5判	1冊	500頁

3. 講演会

A. 研究情報普及

(1) 東洋学講座

(春 期) 500回記念講演

第499回 平成19年5月8日(火)

「砂糖から見たイスラーム社会」

東洋文庫研究部長 佐藤 次高 氏

第500回 平成19年5月15日(火)

「中国史における商業」

東洋文庫理事長 斯波 義信 氏

第501回 平成19年5月22日(火)

「聖戦から自治構想へー 20世紀初頭の中央アジアー」

東洋文庫研究員

東京大学教授

小松久男氏

(秋 期) 500回記念講演

第502回 平成19年10月9日(火)

「フランスから見た江戸の絵入り本ーフランス国立図書館の蔵書を中心にー」

東洋文庫研究員

フランス国立東洋言語文化研究学院教授

クリストフ・マルケ氏

第503回 平成19年10月16日(火)

「明清徽州の農村演劇ー宗族・鬼・亡霊ー」

東洋文庫図書部長

田仲一成氏

第504回 平成19年10月23日(火)

「イスラームの預言者ムハンマド伝」

東洋文庫研究員

東洋大学教授

後藤明氏

(2) 特別講演会

第1回 平成19年7月10日(火)

“The Sharia Courts Documents as a source of the Egyptian socie-economic history”

Cairo University

Prof.Mohamed Afifi

第2回 平成19年7月27日(金)

「唐代女性の意義世界ー唐代文化の一個側影ー」

台湾大学歴史系

陳弱水教授

第3回 平成20年1月22日(火)

“Moral education in Central Asia, 19th-21st centuries: Continuity and change”

Institute for Islamic and Middle Eastern Studies, University of Bern

Prof. Dr. Anke von Kugelgen

第4回 平成20年3月7日(金)

“National Library and Archives of the Islamic Republic of Iran”

Collection Development Director Mr.Abdoullah Hosseinian

第5回 平成20年3月28日(金)

「世界各地の宋元版」

北京大学古文獻センター主任教授

全国大学漢籍整理指導委員会主任 安 秋 平 氏

(3) 研究会(東洋文庫談話会)

平成20年3月31日(木)

「マルムーク朝アミール Qijmas al-Ishagi のワクフ」

日本学術振興会特別研究員PD 五十嵐大介 氏

B. データベース公開

平成19年4月1日～同20年3月31日までの期間に、東洋文庫の図書・資料の(データ日本語、英語)に対するオンライン検索アクセス件数は、概略、以下の通りです。

区分/2007年4月～2008年3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
漢籍資料	1,084	1,099	1,596	2,252	1,209	1,505	1,417	1,564	715	1,191	1,089	1,102
中文・日文・欧文・ロシア新収図書目録	275	195	257	245	168	133	47	102	82	93	74	85
中文図書(含・近中、逐次)	2,488	2,147	3,021	3,483	1,995	1,970	2,964	2,751	2,098	1,769	1,768	1,670
日本文図書(含・近中、逐次)	2,482	2,741	3,188	3,871	2,447	2,507	3,056	2,860	2,074	1,593	1,662	1,798
日本関係文献目録(含・近代、岩崎)	1,629	439	1,264	1,424	1,015	1,008	3,783	1,683	962	931	1,021	1,113
洋書(欧文図書)目録(含・近中)	1,142	726	1,355	3,440	2,665	1,338	1,801	2,082	1,493	1,350	1,266	1,393
洋書総合	1,371	1,545	1,672	1,218	558	400	537	250	212	193	280	208
アラビア語図書	1,379	1,141	989	1,144	794	793	714	663	463	828	915	975
トルコ語図書(含・オスマン語)	288	229	1,022	1,216	603	451	923	385	427	400	416	409
ペルシア語図書	557	353	470	420	315	265	192	313	174	283	365	602
チベット語文献(河口・蔵外文献)	346	190	720	837	443	438	166	329	109	174	214	317
モンゴル語図書・資料	252	245	310	324	248	151	129	154	142	313	271	308
ウイグル語図書・資料	253	56	196	253	75	214	75	148	12	99	144	208
ビルマ語図書	99	99	330	360	305	287	217	354	182	93	146	107
タイ語図書・資料							57	78	32	248	239	250
インドネシア・マレーシア語図書	148	58	246	199	135	103	29	42	16	42	30	47
中央アジア研究文献目録	409	166	375	431	254	263	130	271	135	63	81	89
中東イスラーム研究文献目録	880	251	1,020	1,182	447	447	518	483	577	260	188	213
アジア歴史研究者ディレクトリ	412	186	465	743	410	315	408	146	233	456	354	326
画像DB(梅原考古資料、香港銅版画等)	1,240	3,729	4,406	6,627	4,596	6,841	12,551	16,020	13,359	169	280	331
画像・香港銅版画水彩画等										1,582	1,931	2,165
画像・岩崎文庫善本										3,663	4,646	5,245
画像・和書貴重書										1,632	1,871	2,159
動画資料(香港の祭祀と演劇)							1,904	1,275	1,362	1,672	1,691	5,034
そのほか(別置ロシア・カザフ朝鮮など)	7,116	4,416	8,456	8,099	6,036	7,884	5,015	8,251	10,519	18,374	15,900	17,526
合計	23,850	20,011	31,358	37,768	24,718	27,313	36,633	40,204	35,378	37,471	36,842	43,680

4. 学 術 情 報 提 供

東洋文庫は、日本における東洋学の共同利用の研究機関であると同時に、国内外の研究者並びに研究機関との連絡に当たって今日に至っている。従って、学術情報の提供に関する下記の諸事業は東洋文庫として最も力を入れているところである。

A. 研究者の交流および便宜供与のサービス

(1) 長期受入

1) 外来研究員の受け入れ

光田 剛 (成蹊大学教授)

「アジア革命としての中国革命」

(平成20年1月1日～同12月31日・延長予定)

2) 平成19年度日本学術振興会特別研究員 PD の受入

① SPD

野田 仁 (東京大学大学院 PD)

「カザフ・ハーン国の対外関係史の研究：18～19世紀の清朝との関係を中心に」

(平成19年度採用、同20・21年度・3ヶ年間)

② PD

五十嵐大介 (中央大学大学院 PD)

「マムルーク朝後期エジプト・シリアにおけるイクター制の崩壊過程と

社会体制の変容」

(平成17年度採用、3年度目・終了)

河原 弥生 (東京大学大学院 PD 見込)

「コーカンド・ハーン国期におけるフェルガナ・ムスリム社会の形成と

イスラーム」

(平成17年度採用、3年度目・延長)

飯山 知保 (早稲田大学大学院 PD)

「士人層の変遷からみた金元代華北における社会統合と

後世華北漢族社会形成の淵源」

(平成18年度採用、同19・20年度3ヶ年間)

小笠原弘幸（東京大学大学院 PD）

「オスマン帝国における歴史意識

—建国神話に見られる「起源」の記憶の創造と変容」

（平成18年度採用、同19・20年度3ヶ年間）

森山 央朗（東京大学大学院 PD）

「10～12世紀の中東におけるウラマーと地方史人名録編纂の社会史的研究」

（平成18年度採用、同19・20年度3ヶ年間）

小野寺 史郎（東京大学大学院 PD）

「近代中国におけるナショナリティと政治的シンボル」

（平成19年度採用、同20・21年度・3ヶ年間）

吉田 建一郎（慶応大学大学院博士取得）

「近代中国の卵、獣骨、皮革を中心とした畜産品貿易に関する総合的考察」

（平成19年度採用、同20・21年度・3ヶ年間）

3) 外国人研究者の受入

Claus M. FISCHER（ドイツ連邦ゲッチンゲン大学教授）

「近世日本の古典芸能、特に歌舞伎史の研究」

（平成16年2月8日～同19年2月7日・私費）

Stefan KNOST（フランス近東研究所）

「オスマン都市の自治的行政組織」

（平成18年11月1日～同20年10月31日・科学研究費補助金）

Christophe MARQUET（極東学院東京支部 代表）

「江戸中期・後期の絵入り本と画譜」

（平成16年9月1日～同20年8月31日・フランス国立極東学院経費 [東京支部代表]）

Pierre-Étienne WILL（コレッジ・ド・フランス教授）

「中国の公牘・政書類を中心とする文献の調査と研究」

（平成19年5月10日～同20年3月31日・私費）

Harmen BEUKERS（ライデン大学医学系教授）

「医学関係資料を中心とする文献調査」

（平成19年7月19日～同19年8月31日・私費）

陳 弱水（台湾大学歴史系教授）

「唐宋女性史の研究」

（平成19年7月23日～同20年8月22日・私費）

李 培德 (香港大学アジア研究センター研究員)
 「近代中国企業史関係資料の調査」

(平成19年9月16日～同19年12月29日・私費)

(2) 外国人研究者への便宜供与

Australia

Dr. Robert Cribb

The Australian National University Senior
 FellowChina
 (Peoples Republic)

China (Peoples Republic)

張 利 民

天津社会科学院歴史研究所 所長 (以下、23名)

China (Taiwan)

李 孝 悌

中央研究院歴史語言研究所研究員
 (以下、4名)

Finland

J. A. Janhunen

Prof., University of Helsinki

Iran

Sayyd A·mad Mu·affari

東京外国語大学博士課程 (以下、2名)

Korea

安 承 俊

韓国学中央研究院 専門委員 (以下、18名)

Kyrgyzstan

Guljanat Kurmangaliyeva

Senior Lecturer, Kyrgyz-Turkish Manas
 University

Turkey

Talal Ergena

Ankara University (以下、3名)

B. 各種研究会等への会場提供サービス

数量/月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
研究会回数	10	10	5	12	1	6	13	7	11	9	13	12	109回
参加人数	111	312	48	120	12	54	459	100	172	121	212	260	1,981人

C. 研究資料の復刻・増刷の刊行サービス

東洋学報 第88巻4号	330部
東洋学報 第89巻第1～3号	330部
東洋文庫欧文紀要 Vol. 64	50部
岩崎文庫貴重書書誌解題V	150部
晋書食貨志訳註	150部
日中戦争期の中国における社会・文化変容	180部
TBRL No. 8	
Restructuring China Party, State and Society after the Reform	80部
A Guide to parliamentary records in monarchical Egypt	50部
同上 (CD)	50枚
宋史食貨志訳註(五)・(六) 語彙索引	150部
Agenda Index of the Minutes of the Iranian National Assembly	50部
近代中国研究彙報 第29号	50部
東洋文庫書報 第38号等2件	各50部
東洋文庫年報 平成18年度	10部

D. 参考情報提供のサービス

『東洋文庫年報』 平成18年度版 A 5版 1冊

E. 広報普及

1. 東洋文庫ホームページ(和文・英文)の更新

平成19年4月～平成20年3月までのホームページ全体のアクセス件数は、以下のとおりである。

なお、ホームページ全体のアクセス件数には、東洋文庫図書資料データベース(書誌データ)へのオンライン検索アクセス件数を含む。

数量/月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
アクセス数	38,304	26,122	76,848	96,985	79,911	68,394	70,000	84,884	85,564	88,829	79,183	100,029	895,053

2. 東洋文庫友の会の運営

- ・ 広報誌『友の会だより』の発行(年2回/秋・春)
- ・ 貴重図書特別展示会の開催 平成19年10月18日(木)

3. 各種発行物

『東洋文庫の名品』 A4版 1冊
Treasures of The Toyo Bunko 1冊

4. グッズ製作・販売

絵葉書（8枚組） トートバッグ クリアファイル（2枚1組） しおり（4色）

5. 文京ミュージックフェスタ参加

11月16日（金）～11月23日（金）文京シビックセンター

5. 研究員等の研究業績

期間：平成19年4月1日～平成20年3月31日まで

略号：①…著書 ②…編著 ③…論文 ④…学会動向 ⑤…書評・紹介
⑥…翻訳 ⑦…講演 ⑧…その他（評論・雑記・座談会等）

秋葉 淳

③ “Kadılık Teşkilâtında Tanzimat’ ın Uygulanması: 1840 Tarihli Ta’limnâme-i Hükkâm.” (*Osmanlı Araştırmaları / The Journal of Ottoman Studies* 29, Enderun Kitabevi (Istanbul), 2007年7月, pp. 9-40)、④ 「リビアの文書館・研究所事情」(『イスラム世界』69、社団法人日本イスラム協会、2007年11月、47～55頁)、⑦ 「オスマン帝国の「ミッレト制」論争再考—比較史的考察に向けて」(NIHUプログラム・イスラーム地域研究公開コロキウム、2007年7月7日)、⑧ 「コメント2 (近代史部会：学校教育と「マイノリティ」)」(『歴史学研究』833、歴史学研究会、2007年10月、125～126頁)。

荒川 正晴

③ 「魏氏高昌国の王権とソグド人」(『福井重雅先生古稀・退職記念論集 古代東アジアの社会と文化』、汲古書院、2007年3月、337～362頁)、“Sogdians and the Royal House of Ch’ü in the Kao-ch’ ang Kingdom” (*Acta Asiatica (Bulletin of The Institute of Eastern Culture)* 94, The Tōhō Gakkai, Tokyo, 2008, pp. 67-93.)、⑦ 「遊牧民とオアシス民の共生関係とは何か?—西突厥と魏氏高昌国のケースから—(内陸アジア出土古文献研究会、於：東洋文庫、2007年7月21日)。

飯尾 秀幸

②『水経注疏訳注（渭水篇上）』（東洋文庫古代地域史研究班編、(財) 東洋文庫、2008年3月、x+463+36頁）。

飯島 武次

④「中国考古学」（『季刊考古学』100、雄山閣、2007年8月、128～130頁）、⑥「汪向荣『邪馬台国』（同成社、2007年12月、243頁）。

池田 温

①『中国古代籍帳研究』（龔澤銑訳、中華書局、2007年5月、196+523頁）、『敦煌文書の世界』（張銘心・郝軼君訳、中華書局、2007年12月、313頁）、④「日本における敦煌研究の発展」（『朝日敦煌研究員派遣制度記録集』、2008年3月、1～3頁）、「科举一瞥」（笠谷和比古編『公家と武家IV』、思文閣出版、2008年3月、 頁）、⑤「内陸アジア研究の新逐刊『西域文史』—朱玉麒主編『西域文史』1—」（『東方』318、東方書店、2007年8月、32～34頁）、「沙知・呉芳思編著『斯坦因第三次中亞考古所獲漢文文献（非佛經部分）①②』（『東洋学報』89-2、(財) 東洋文庫、2007年9月、86～99頁）、⑦「日本上代の大陸文献受容をめぐって」（二松学舎大学国際シンポジウム「日本漢文の黎明と発展」、2007年9月9日、要旨：『日本漢文の黎明と発展要旨集』、2007年9月、22～23頁）、⑧「堀敏一博士を偲ぶ」（『東方学』114、(財) 東方学会、2007年7月、202～204頁）、「宇都木章教授を偲ぶ」（『東方学』115、(財) 東方学会、2008年1月、256～258頁）。

池田 美佐子

① *A Guide to Parliamentary Records in Monarchical Egypt*, (The Toyo Bunko, 2007, 179p.+ CD-ROM)、③「公共圏と中東・イスラーム研究」（『Cross Culture』24、光陵女子短期大学、2008年3月、21～37頁）、⑦「公共圏と中東・イスラーム歴史研究」（人間文化機構「イスラーム地域研究」拠点1グループ2「中東政治の構造変容」の「中東社会史班」研究会、於：東京大学文学部、2007年10月7日）、「Parliamentary Records and Historical Research : the Case of Monarchical Egypt」（Kantaoui Forum（第8回チュニジア日本文化科学技術シンポジウム）スース、チュニジア、2007年10月30日）。

石塚 晴通

①『尊経閣文庫本 日本書紀 本文・訓点総索引』（八木書店、2007年8月、432頁）、②『寺院経蔵の構成と伝承に関する実証的研究—高山寺の場合を例とし

て一』（平成14年度～平成18年度科学研究費補助金（基盤研究(S)）研究成果報告書、代表者：石塚晴通、2007年5月、345頁＋CD1,500頁分）、『漢字字体規範データベース（HNG）平成19年度公開分』（科学研究費研究成果公開促進費事業、2008年3月）、③「正倉院本の中の新羅写経」（韓文：『口訣研究』20、韓国、2008年2月）、『漢字字体規範データベース（HNG）』（岡墻裕剛氏等と共著、『通信』122、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2008年3月、1～5頁）、④「敦煌の百年、1907-2007」（『東方学会報』92、（財）東方学会、2007年9月）、⑦“The Kozanji Collection”（“A Hundred Years of Dunhuang, 1907-2007”, The British Academy, London, 2007年5月）、「前田日本書紀の訓点に附された声点」（第97回訓点語学会研究発表会、2007年10月）、「訓点語学会 回顧と展望」（口訣学会二十周年記念学術大会招待講演、於：韓国、2008年2月）、「徳川時代の漢文訓読」（第五屆日本漢学国際学術研討会発表、於：台湾、2008年3月）。

石橋 崇雄

⑤「中国制度史の「当為と実態」を解く実証研究の金字塔—山本英史著『清代中国の地域支配』—」（『東方』321、東方書店、2007年11月、16～19頁）。

井上 和枝

③「苗代川『朝鮮人』の姓氏に関する歴史的考察」（『国際文化学部論集』84、鹿児島国際大学国際文化学部、2008年1月、219～243頁）、⑦「日鮮同化のモデルとしての近代苗代川」（九州史学会大会朝鮮学部会、於：九州大学、2007年12月9日）、「植民地朝鮮における『新女性』のジェンダー意識と行動に関する研究」（国際研究集会2007 見る・学ぶ・暮らす—比較植民地学の樹立を目指して、於：九州大学、2007年12月15日）。

井上 和人

③「平城京の坊墻制—平城京の街区区画施設の実態—」（『奈良文化財研究所紀要2007』奈良文化財研究所、2007年6月、16～17頁）、「日本古代都城の源流」（『季刊考古学 特集・21世紀の考古学』100、雄山閣、2007年8月、91～95頁）、「目から鱗の古代都市論二題」（『斎宮アカデミー会報』8、三重県立斎宮歴史博物館、2007年12月）。

内山 雅生

③「中国「共同体」論と「東アジア共同体」」（弁納オー・鶴園裕編『東アジア共生の歴史的基礎—日本・中国・南北コリアの対話』、御茶の水書房、2008年2月、

5～30頁)、⑤「祁建民著『中国における社会結合と国家権力』」(『歴史学研究』830、歴史学研究会、2007年8月、55～58頁)。

梅村 坦

②『中央ユーラシアを知る事典』初版第2刷(一部訂正・追加、小松久男編集代表、平凡社、2007年10月)、③「新疆のウイグル人鍛冶屋」(『中国ムスリムの宗教的・商業的ネットワークとイスラーム復興に関する学際的共同研究』、平成17年度～平成19年度科学研究費補助金(基盤研究(B))研究成果報告書(課題番号17320141)、研究代表者:松本光太郎、2008年3月、117～128頁)、「現代ウイグル文化の歩む道:中華の波の中にある言語」(佐藤次高・岡田恵美子編著『イスラーム世界のことばと文化』(早稲田大学国際言語文化研究所、世界のことばと文化シリーズ)、成文堂、2008年3月、244～261頁)、⑦「ウイグル農民、職人の生活断章」(『シルクロードのひとびとPart2—新疆におけるウイグルの生活と文化の今昔』、奈良女子大学大学院人間文化研究科平成19年度「魅力ある大学院教育」イニシアティブ生活環境の課題発見・解決型女性研究者養成、平成17年度文部科学省採択教育プログラム:大学院生の自主企画による研究セミナー、於:奈良女子大学、2007年10月27日、概要:『平成19年度大学院生の自主企画による研究セミナー実施報告書』、奈良女子大学大学院人間文化研究科、2008年3月、1～37頁)。

大江 孝男

③ “On the -o/u- Stem in the Conjugation of Middle Korean—Contrasts In Morphology and Semantics—” (*The Memoires of the Research Department of the Toyo Bunko*, No.64, (財) 東洋文庫, 2006, pp. 1-35)。

大澤 肇

③「近現代上海・江南の小学教員層 一九二七～一九四九年」(『中国—社会と文化』22、中国社会文化学会、2007年6月、240～259頁)、④「近十年的中国近現代教育史在日本」(『海外中国学評論』2、上海古籍出版社、2007年5月、225～233頁)、「2006年の歴史学界回顧と展望(中国・現代)」(加島潤氏と共著、『史学雑誌』116-5、史学会、2007年6月、237～244頁)、⑥「呂美頤「近代中国における『女国民』概念についての歴史的考察」」(早川紀代ほか編『東アジアの国民国家形成とジェンダー』、青木書店、2007年7月、213～233頁)、⑦「デジタル化時代の中国研究—デジタルライブラリ・アーカイブを中心に—」(高田幸男氏と共同発表、現代中国地域研究・拠点連携プログラム第1回シンポジウム「現代中国研究—現段階と展望」、於:早稲田大学、2008年2月2日)、「1950

年代中国における学校教育の拡大と民衆の教育観」(東洋文庫超域アジア研究部門現代中国研究班「国際関係・文化」グループ研究会、2008年2月23日)。

大澤 正昭

③「唐宋変革期的家庭規模与結構—依拠小説史料進行分析—」(張國剛主編『中国社会歴史評論』5、商務印書館、2007年8月、12~29頁)、「胡石璧の“人情”—《名公書判清明集》定性分析的嘗試—」(戴建國編『唐宋法律史論集』、上海辭書出版社、2007年12月、210~231頁)、「袁采の現実主義—『袁氏世範』分析への視点—」(多田狷介・太田幸男編『中国前近代論集』、汲古書院、2007年12月、397~425頁)、「唐宋時代社会史研究の現状と課題・試論」(『メトロポリタン史学』3、メトロポリタン史学会、2007年12月、23~49頁)、「無能な夫をもつ妻は…」(上智大学文学部史学科編『歴史家の散歩道』、SUP上智大学出版会、2008年3月、179~197頁)。

太田 幸男

①『中国古代国家形成史論』(汲古書院、2007年6月、440頁+索引9頁)、②『中国前近代史論集』(多田狷介氏と共編、汲古書院、2007年12月、454頁)、『水経注疏訳注(渭水篇上)』(東洋文庫古代地域史研究班編、(財)東洋文庫、2008年3月、x+463+36頁)、⑧「若き日の歴研活動と現在の歴研についての一感想」(『歴史学研究月報』569、歴史学研究会、2007年5月、36~38頁)。

大谷 俊太

①『和歌史の「近世」—道理と余情』(2007年10月、ペリかん社、総298頁)、③「真田幸弘の和歌」(『松代』21、松代文化施設等管理事務所、2008年3月)、「『名墨新詠』 解題と翻刻」(共著、『叙説』35、2008年3月)。

岡田 英弘

①『日本人のための歴史学 こうして世界史は創られた!』(WAC BUNKO、2007年5月、372頁)、③“The Role of Women in the Erdeni-yin Tobchi: The post-imperial period in particular” (*The Role of Women in the Altaic World*, edited by Veronica Veit, Asiatische Forschungen 152, Harrassowitz Verlag, Wiesbaden, 2007, pp. 173-181.)、「日本人よ、中国の微笑外交に騙されるな!」(『WiLL』6月号、ワック・マガジズ株式会社、2007年4月、38~43頁)、「中国人にとって『歴史』とは何か」(『別冊正論』8月号、産経新聞社、2007年8月、3~7頁)、⑧「世界史はモンゴル帝国からはじまった 日本の誕生から近代まで」(宮脇淳子氏と共著、『べるそーな』2007年4月号、株式会社MD、72~75

頁)、「世界史はモンゴル帝国からはじまった 中央ユーラシアの草原の道と遊牧騎馬民」(宮脇淳子氏と共著、『べるそーな』2007年5月号、72~75頁)、「世界史はモンゴル帝国からはじまった 現代史の見方」(宮脇淳子氏と共著、『べるそーな』2007年6月号、70~73頁)「世界史はモンゴル帝国からはじまった 日本映画「蒼き狼」をモンゴル人はこのように見た」(宮脇淳子氏と共著、『べるそーな』2007年7月号、70~73頁)、「世界史はモンゴル帝国からはじまった 日本とモンゴルの文化の違い」(宮脇淳子氏と共著、『べるそーな』2007年8月号、72~75頁)、「世界史はモンゴル帝国からはじまった 続・日本とモンゴルの文化の違い」(宮脇淳子氏と共著、『べるそーな』2007年9月号、74~77頁)、「世界史はモンゴル帝国からはじまった 続々・日本とモンゴルの文化の違い」(宮脇淳子氏と共著、『べるそーな』2007年10月号、78~81頁)、「世界史はモンゴル帝国からはじまった モンゴルにおける朝青龍のこと」(宮脇淳子氏と共著、『べるそーな』2007年11月号、72~75頁)、「世界史はモンゴル帝国からはじまった 女は自分の財産を持っていた」(宮脇淳子氏と共著、『べるそーな』2007年12月号、72~75頁)、「世界史はモンゴル帝国からはじまった カザンにて」(宮脇淳子氏と共著、『べるそーな』2008年1月号、72~75頁)「世界史はモンゴル帝国からはじまった 岡田英弘のこと」(宮脇淳子氏と共著、『べるそーな』2008年2月号、72~75頁)、「世界史はモンゴル帝国からはじまった 『満文老檔』とは何か?」(宮脇淳子氏と共著、『べるそーな』2008年3月号、70~73頁)。

奥村 哲

②『銃後の中国社会—日中戦争下の総動員と農村』(笹川裕史氏と共著、岩波書店、2007年5月、総273頁)。

小名 康之

⑧「研究室便り67」(『東方学会報』93、(財)東方学会、2007年12月)

糟谷 憲一

⑦「書評：李垌丘『朝鮮後期金門研究』(ソウル・一志社、2007年3月)」(朝鮮史研究会、関東部会 2008年1月例会、於：東京大学)。

片桐 一男

①『阿蘭陀宿長崎屋の史料研究』(雄松堂出版、2007年11月、374頁)、③「阿蘭陀通詞中山氏と庄内藩医中山氏」(『鳴滝紀要』17、シーボルト記念館、2007年3月、53~72頁)、「ロシア国王書翰と通詞—レザーノフ来航と阿蘭陀通詞2—」(『洋学史研究』24、洋学史研究会、2007年4月、23~37頁)、⑦「ケ

ンペルと日本」(第21回ケンペル・バーニー祭、2007年4月12日)、「阿蘭陀通詞中山氏と庄内藩医中山氏」(洋学史研究会月例研究会、2007年5月12日)、「出島のカピタンと遊女—異文化交流の実況—」(佐原高等学校同窓会船橋支部総会、2007年7月1日)、「“咸臨丸”発注、回航、働きなど」(洋学史研究会・船の科学館共催研究大会、2007年11月10日)、「通詞馬場為八郎の伝えたオランダ語表記」(洋学史研究会月例研究会、2007年12月1日)、「長崎海軍伝習」(第150回幕末史研究会記念講演、2008年1月12日)、「將軍謁見—カピタンの拝礼からハリスの謁見へ—」(洋学史研究会新春研究大会、2008年1月27日)、⑧「ケンペルと日本」(『第21回ケンペル・バーニー祭』、ケンペルとバーニーを讃える会、2007年4月、6～13頁)、「長崎はワンドーランドか—私の長崎クロニクル—(旅するカステラの目 Vol. 13)」(『よむカステラ』13、松翁軒、2007年5月、24～28頁)、「オランダから来た“ヤパン号”、翌年変身“咸臨丸”(日蘭交流の遙かなる旅 16)」(『青山学報』220、青山学院本部広報室、2007年6月、33頁)、「赤い玉、白い玉、くるくるまわって、心の和み(日蘭交流の遙かなる旅 17)」(『青山学報』221、青山学院本部広報室、2007年10月、33頁)、「リンネ、ツェンペリーと通詞・吉雄耕牛(日蘭交流の遙かなる旅 18)」(『青山学報』222、青山学院本部広報室、2007年12月、33頁)、「江戸の阿蘭陀宿・長崎屋—追って、追って、追い続けて—」(『Net Pinus』70、雄松堂、2007年12月、1～5頁)、「外交使節とお菓子(日蘭交流の遙かなる旅 19)」(『青山学報』223、青山学院本部広報室、2008年3月、33頁)、「カピタンの江戸幕府と鞆」(『特別展 鞆まるごと博物館—「鞆の町並と商家の賑わい」』、福山市鞆の浦歴史民俗資料館活動推進協議会、2007年10月、78～82頁)。

片山 剛

②『近代東アジア土地調査事業研究ニューズレター』3(大阪大学文学研究科、2008年3月、100頁)、⑦「珠江三角洲地区“漢族社会”的形成及其社会、文化特徴」(国際シンポジウム「区域社会与文化類型」、於：上海大学、2007年6月29日)、「1930年代広東省土地調査事業と郷の境界画定：「村の土地」の存否をめぐる」(第2回ワークショップ「近代東アジア土地調査事業研究」、於：大阪大学豊中キャンパス、2007年11月24日、内容：片山剛編『近代東アジア土地調査事業研究ニューズレター』3、大阪大学文学研究科、2008年3月、31～50頁)、「中国における「近代」「国民」国家への志向をめぐる：土地調査事業と土地改革」(大阪大学中国文化フォーラム第1回セミナー「現代中国学の新たなプラットフォーム」、於：大阪大学中之島センター、2008年3月9日)。

加藤 直人

③「八旗の記録が如何に史書となったか」(細谷良夫編『清朝史研究の新たな地平—フィールドと文書を追って—』、山川出版社、2008年2月、4～21頁)。

加藤 弘之

②『日本経済新論—日中比較的視点』(丁紅衛と共編著、中国市場出版社、2008年)、③「グローバリゼーション、地域格差と中国の地域政策」(西島章次編『グローバリゼーションの国際経済学』、勁草書房、2008年3月、147～173頁)、「中国の資本主義はどこに向かうか—「新西山会議」をめぐる」(西村成雄・許衛東編『現代中国の社会変容と国際関係』、汲古書院、2008年3月、1～13頁)。

川井 伸一

② *New Challenges and Perspectives of Modern Chinese Studies*, (Universal Academy Press (Tokyo), 2008年3月, 334p.)、③「中国経済の台頭と東アジア経済との関係変化」(『アジア経営研究』13、アジア経営学会、2007年6月、27～38頁)、「中国企業の海外進出と現地経営—アンケート調査結果に基づく業種別分析」(『愛知経営論集』157、愛知大学経営学会、2008年2月、1～24頁)、「中国企業の国際競争戦略—ハイアールとレノボの比較分析」(高橋五郎編『海外進出する中国経済』、日本評論社、2008年3月、164～183頁)、⑤「中国企業の海外進出と海外経営—商務部国際貿易経済合作研究院化国籍企業研究センター王志楽主任からのヒアリング記録」(『経営総合科学』90、愛知大学経営総合科学研究所、2008年3月、65～100頁)、「今井健一・渡邊真理子著『企業の成長と金融制度』(名古屋大学出版会)」(『アジア経済』49-1、アジア経済研究所、2008年1月、73～77頁)、⑦「中国会社制度の歴史的検討—法人の二重性の視点から」(『中国経済学会第6回全国大会研究報告要旨集』、中国経済学会、於：城西大学、2007年6月、76～80頁)、「現代中国学の新しいパラダイムをめぐる」のコメントおよび司会(『愛知大学国際中国学研究センター2007年度国際シンポジウム報告書：現代中国学の新しいパラダイムをめぐる』、愛知大学国際中国学研究センター、2007年12月、90～91、113～156頁)、⑧「地域研究と国際関係論のいま」(加々美光行・鈴木則夫と座談会、『国際問題研究所紀要』131、愛知大学国際問題研究所、2008年3月、1～51頁)。

川崎 信定

②「トゥカン『一切宗義』序章「インドの思想と仏教」(吉水千鶴子氏と共著、『西藏仏教宗義研究』8、(財)東洋文庫、2007年3月、202頁)、③「『チベット死者の書』と日本の四十九日中陰回向」(『東洋学研究 別冊「日本における死へ

の準備教育—死の実存的把握をめざして—』、東洋大学東洋学研究所、2007年4月、123～141頁）、⑦「大正大学総合佛教研究所特別講座「大乘仏教から密教へ」（於：大正大学総合佛教研究所、第1回「はじめに；問題の所在と研究意義（今までの研究の状況）」、2007年5月9日、第2回「トゥカン『一切宗義・善説水晶経』序章の内容と研究意義」、2007年5月30日、第3回「〈一切（sarva）〉から〈普門（samanta）〉へ」、2007年6月27日、第4回「仏教の自然環境論の一考察—草木に心はあるか？バヴィヤの見解—」、2007年10月17日、第5回「論理の問題としての『一切智』が意味するもの」、2007年11月7日、第6回「『華嚴経』と〈一切智〉」、2007年12月12日、第7回「智慧と道徳—ほとけ（一切智者）の倫理性の問題—」、2008年1月23日、第8回「一切智思想の密教の見解—一切智と一切智・薩婆若—日本仏教に〈一切智〉思想は存在したか？」、2008年2月20日）、「真言宗豊山派教師研修会（教師有資格者対象）教養講座、於：真言宗豊山派宗務所、第1回「序論・『仏説』としてのお経」、2007年4月19日、第2回「『般若心経』とは？」、2007年5月17日、第3回「『観音経』の世界」、2007年6月28日、第4回「『理趣経』の意味するもの」、2007年9月6日、第5回「真言とは？」、2007年10月18日）、「お経とは？—『仏説』としてのお経—」（於：真言宗豊山派教相講習所（栃木県ならびに群馬県教場）、2007年7月27日）、「仏教の自然環境論の一考察—草木に心はあるか？バヴィヤの見解—」（科学研究費補助金（基礎研究(B)）・研究代表者：原實「古代インドの環境論」研究分担者発表、於：本郷学会館、2007年10月23日）、⑧「お経とは何か？—「如是我聞」と「仏説」—」（『大法輪』74-7、大法輪閣、2007年7月、68～73頁）。

川島 真

②『東アジア国際政治史』（服部龍二氏と共編著、名古屋大学出版会、2007年5月、398頁）、『中国の外交—自己認識と課題—』（＜異文化理解講座⑥＞、山川出版社、2007年、240頁）、③「中華民国の国際連盟外交—『非常任理事国』層から見た連盟論」（緒方貞子・半澤朝彦編著『グローバル・ガヴァナンスの歴史の変容—国連と国際政治史—』、ミネルヴァ書房、2007年4月、49～74頁）、「民国期における中国近代史の創成とアジア像—Chinese World Orderとウェストファリア体制のはざままで—」（『中国内外政治と相互依存—中国政治研究の新機軸—』、愛知大学21世紀COE国際中国学研究センター、現代中国政治とアジア世界平和構築研究会COE最終報告書、2007年3月、249～266頁）、「日本占領期華北における留日学生をめぐる動向」（『中国研究月報』61-8＜特集＝中国人日本留学史、日本人中国留学史＞、中国研究所、4～18頁）、「戦時下の『共栄圏』における日本語・日本研究の位相—華北を例として」（黄自進主編『近現代日本社会的変遷』、中央研究院人文社会科学研究中心亜太区域研究專題中心、2006年、571

～605頁)、「華北における『文化』政策と日本の位相」(平野健一郎編『日中戦争期の中国における社会・文化変容』、(財)東洋文庫、2007年、61～86頁)、「日本対外援助與国際NGO」(『亜洲研究』55、香港珠海書院亞洲研究中心、2007年7月、24～33頁)、「黄遵憲与清末中日外交—以《朝鮮策略》為中心」(王曉秋・陳応年主編『黄遵憲与近代中日文化交流』、遼寧師範大学出版社、2007年、136～141頁)、「広東政府論—初期外交からの検討」(松浦正孝編著『昭和・アジア主義の実像—一定刻日本と台湾・「南洋」・「南支那』』、ミネルヴァ書房、2007年、22～53頁)、「日露戦争における中国外交—満洲における局外中立」(東アジア近代史学会編『日露戦争と東アジア世界』、ゆまに書房、2008年、77～100頁)、「日中戦争期における重慶ラジオ放送とその内容」(軍事史学会編『日中戦争再論』、錦正社、2008年3月、377～393頁)、「1971年以前日本の二中議政」(国史館編『台湾の歴史省思 1950-60年代』<第八屆中華民國史專題>、国史館、2007年12月、45～64頁)、⑤「松田康博著『台湾における一党独裁体制の成立』(慶応大学出版会、2006年)」、「加茂具樹著『現代中国政治と人民代表大会』(慶応大学出版会、2006年)」、「佐藤公彦著『「氷点」事件と歴史教科書論争』(日本橋報社、2007年)」(『外交フォーラム』226、都市出版社、2007年4月、84～87頁)、「真壁仁著『徳川後期の学問と政治—昌平坂学問所儒者と幕末外交変容』(名古屋大学出版会、2007年)」、「家近亮子・松田康博・段瑞聡著『岐路に立つ日中関係—過去との対話・未来への模索』(晃洋書房、2007年)」、「西川博史著『日本占領と軍政活動—占領軍は北海道で何をしたか』(現代史料出版、2007年)」(『外交フォーラム』229、都市出版社、2007年7月、84～86頁)、「酒井哲哉著『近代日本の国際秩序論』(岩波書店、2007年)」、「鳥飼鈎美子著『通訳者と戦後日本外交』(みすず書房、2007年)」、「小関隆著『記念日の創造』(人文書院、2007年)」(『外交フォーラム』232、都市出版社、2007年11月、84～87頁)、「齋藤希史著『漢文脈と近代日本—もう一つのことばの世界』(NHK出版、2007年)」(『教養学部報』506、東京大学教養学部、2007年11月7日)、「青山瑠妙著『現代中国の外交』(慶應義塾大学出版会、2007年)」、「松方冬子著『オランダ風説書と近世日本』(東京大学出版会、2007年)」、「小林聡明著『在日朝鮮人のメディア空間』(風響社、2007年)」(『外交フォーラム』235、都市出版社、2008年1月、70～73頁)、⑥「張力「国連特別基金と台湾経済建設—国際機関と技術協力」(緒方貞子・半澤朝彦編著『グローバル・ガヴァナンスの歴史の変容—国連と国際政治史—』、ミネルヴァ書房、2007年4月、235～252頁)、「曹大臣「台湾総督府の外事政策—領事関係を中心とした歴史的検討」」(松浦正孝編著『昭和・アジア主義の実像—一定刻日本と台湾・「南洋」・「南支那』』、ミネルヴァ書房、2007年、236～258頁)、⑦「Historical problem in the historical context in East Asia」(Salzburg Seminar, Institute for Historical Justice and Reconciliation East Asia Scholars

Meeting, June 10, 2007, Third Plenary Session)、 「中国認識の乖離と日韓関係」(現代日本学会国際学術大会 [韓国]、 「脱冷戦期日韓関係の再照明： 両国間相互認識乖離の脱冷戦の根源に対する研究」、 於： 濟州島西帰浦市、 2007年6月15日)、 「1945年9月以後的在日中国人—以法律地位和政治變動為主」 (ペーパー参加、 「1940年代的中国国際学術研討会」 中国社会科学院近代史研究所ほか主催、 第三場B組、 司会： 歩平、 コメント： 鹿錫俊、 於： 展覽館賓館、 2007年8月17～20日)、 「20世紀前半日本作為家常菜的“中華料理”之形成—以《主婦之友》為例—」 (國立政治大學外國語文學院跨文化研究中心主催「第三屆國際學術研討會 東西飲食文化與禮儀」、 司会： 傅琪貽、 於： 国立政治大学行政大樓會議室、 2007年11月9日)、 「Dialogue between Diplomacy and Immigration: introduction on a Qiaobao (僑報) of Jinmen Island until 1949」 (“The International Conference on Modern Asian Politics, Culture, and Society” in Hong Kong Baptist University, Summary for May 26, 2007. Session I Chinese Communities and Immigration in Asia, Moderator: Lee Pui-tak)、 「The Sino-Austrian Relationship in Waiwupera (1901-1911): An illustration by Chinese Diplomatic Archives」 (Japanese-Austrian Workshop on Cultural Exchange, September 3, 2007., Institute for East Asian Studies/Sinology, Austria University)、 「制度的に見た租界・租借地・勢力範囲と近代日中関係」 (国際共同研究シンポジウム「清末中華民国初期の日中関係史—協調と対立の時代1840-1931年」、 第一組「利権と外交」、 座長： 藤井昇三・高橋伸夫、 於： 東京大学駒場キャンパス、 2007年11月3日・4日)、 「僑郷としての金門島と『僑刊』史料の可能性—1920～1940年代」 (日本台湾学会第九回学術大会・第四分科会、 司会： 貴志俊彦、 コメント： 陳来幸、 村上衛、 於： アジア経済研究所、 2007年6月2日)、 「A Comparison of Image toward China between Japan and Korea : A basic survey and preliminary consideration」 (日本政治学会、 日韓セッション「日韓の中国認識と対中政策の比較」、 司会： 梁勝威、 コメントーター： 金相準、 高原明生、 2007年10月7日)、 「1860～70年代の琉球関係—東アジアにおける册封・朝貢・互市の遷移—」 (史学会<公開シンポジウム>琉球からみた世界史、 司会： 三谷博、 コメント： 佐藤信、 與那覇潤、 小泉順子、 高山博、 於： 東京大学文学部1番大教室、 2007年11月17日)、 「中日関係現状与未来」 (於： 安徽省馬鞍山市政治協商會議、 2007年4月1日)、 「日本学界 近代中国外交史研究with当代中国外交研究的対話」 (於： 南京大学歴史系、 2007年4月2日)、 「書評： 礪波護・岸本美緒・杉山正明『中国歴史研究入門』 (名古屋大学出版会、 2006年1月) 外交史の面からの考察」 (中国現代史研究会、 2007年4月28日)、 「中国外交—その自画像と外からの目線」 (若手政治外交研究者リレー政策懇談会： 歴史のレンズで見る東アジア 第2回、 於： 日本財団ビル2階會議室、 2008年2月20日)、 「戦後初期的台／中日関係史之研究」 (於：

台湾中央大學歴史学系、2008年3月20日)、⑧「『敵対』・『断絶』・『友好』の次にくる新時代への挑戦—日中関係史80年」(『エコノミスト』臨時増刊<最新中国情報>、毎日新聞社、2007年12月、88~91頁)、「『歴史』の再構成とアーカイブズ」(『論座』2008年2月号、朝日新聞社、122~127頁)、「近現代の北東アジア」(『東京大学新聞』2410号、2008年1月1日)、「『蒋介石日記』スタンフォード大で公開」(『朝日新聞』朝刊、2008年1月23日)、「東アジア近代史における『史料化』の課題」(『アジア遊学』100<アジア遊学100号の提案>、勉誠出版、2007年7月、54~57頁)、「特集によせて—『中華民国史』南京大学版との対話と討論」(『中国研究月報』711、中国研究所、2007年5月、1~4頁)、「特集『戦後東アジアにおける人の移動と20世紀史の再展開』にあたって」(『東アジア近代史』10、ゆまに書房、2007年3月、1~9頁)、「対話から和解のプロセス化」(『外交フォーラム』229<巻頭随筆>、都市出版社、2007年7月、7頁)、「戦後補償問題と歴史学の役割について」(『歴史評論』689、校倉書房、2007年8月、40~51頁)、「対談・国民国家とリージョナリズム—地域統合を比較する」(司会：山本博之、出席者：家田修、白杵陽、遠藤貢、押川文子、村上勇介、山影進、『地域研究』8-1、京都大学地域研究統合情報センター、7~42頁)。

貴志 俊彦

③「日中戦争前期上海の印刷業界の苦悩と希求—『芸文印刷月刊』(1937~1940)を通じて—」(西村成雄・田中仁編『中華民国の制度変容と東アジア地域秩序』、汲古書院、2008年3月、121~137頁)、「戦後中国の『戦勝』報道」(佐藤卓己・孫安石編『東アジアの終戦記念日—敗北と勝利のあいだ』、ちくま新書、2007年7月、222~239頁)、「満洲国の情報宣伝政策と記念行事」(平野健一郎編『日中戦争期の中国における社会・文化変容』、(財)東洋文庫、2007年3月、13~60頁)、⑦「1920年代在华無線通信設備をめぐる日中米の相克」(国際シンポジウム「清末民初の日中関係史—協力と対立の時代」、於：東京大学駒場キャンパス、2007年11月5日)、「An Analysis of the Propaganda Posters & Bills in the Early Manchukuo Period (1932-1937)」(PNC and ECAI 2007 Annual Conference and Joint Meetings “Area Studies, Then and Now”, in University of California, Berkeley, U.S.A., 2007年10月20日)、「The influence of the Empires' collapse in East Asia after World War I: The recovery of Chinese “sovereignty” in the old Germany and Austrian - Hungary Settlements」(“Japanese- Austrian Workshop on Cultural Exchange”、於：ウィーン大学東アジア研究所、2007年9月3日)、「Fusion and Crack between Cultural Policy and Placation Policy in Manchukuo」(韓国・満洲学会第15次学術大会、於：安東大学語学院、2007年8月24日)、「Tribulations and Aspirations of the Printing

Industry in Shanghai during the Sino-Japanese War: Through the examination of “the Graphic Printer” from 1937 to 1940) (国際シンポジウム International Conference on “Foregin” Communities, Immigrants, and Influence in Modern Asia、於：香港・浸会大学、2007年5月26日)。

岸本 美緒

①『中国社会の歴史的展開』(放送大学教育振興会、2007年4月、全203頁)、③「発展還是波動?—中国『近世』社会的宏観形象」(講演記録、国立台湾師範大学歴史学系『近世中国的社会和文化(960-1800)』、国立台湾師範大学歴史学系、2007年5月、277~296頁)、「清朝をどう見るか」(講演記録、『大東文化大学漢学会誌』47、2008年3月、194~215頁)、⑤「ドロシー・コウ著、小野和子+小野啓子訳、『纏足の靴—小さな足の文化史—」(『女性史学』17、2007年7月、93~96頁)、⑧「中国における暴力と秩序—前近代の視点から—」(『歴史評論』689、2007年9月、70~80頁)。

金 鳳珍

③「第6章世界化への便乗と抵抗：明治日本思想史における『アジア連帯論』」(ソウル大学校美国学研究所編『世界化の歴史と覇権競争』、ソウル大学校出版部、2007年、161~196頁)、「東アジア地域主義と文化：韓国と日本の東アジア共同体構想」(ソウル大学校国際問題研究所編『文化と国際政治』、ソウル：論衡、2007年、123~152頁)、「公共哲学의 地平」(哲学文化研究所『季刊 哲学과 現実』2007秋・74、111~122頁)、「西周における『権利』概念の受容と変容—兪吉濬との比較考察」(北九州市立大学大学院社会システム研究科編『社会システム研究』6、2008年3月、1~18頁)、⑤「稲垣久和著『国家・個人・宗教 近現代日本の精神』」(公共哲学共働研究所刊『公共的良識人』(月刊新聞)、2008年4月1日付、7面)、⑧「商人の宗教と公共倫理」(『公共的良識人』192、公共哲学共働研究所、2007年11月1日付、3面~8面)、「東アジアにおける生命共働体と公共哲学」(『公共的良識人』195、公共哲学共働研究所、2008年2月1日付、6面~7面)。

楠木 賢道

③「清朝檔案史料から見たサンゲ・ギャンツォ殺害」(細谷良夫編『清朝史研究の新たな地平—フィールドと文書を追って—』、山川出版社、2008年2月、163~187頁)、⑤「清代モンゴル史研究の到達点—岡洋樹著『清代モンゴル盟旗制度の研究』—」(『東方』319、東方書店、2007年9月、30~33頁)。

久保 亨

②『中国企業史研究の成果と課題』（中国企業史研究会共編、汲古書院、2007年4月、1～183頁）、③「国定税則委員会的作用和張福運」（程麟蓀・張之香主編『張福運与近代中国海関』、上海社会科学院出版社、2007年8月、14～27頁）、「中国とロシア革命：国民党、国民政府への影響を中心に」（『ユーラシア研究』37、ユーラシア研究所、2007年11月、21～27頁）、⑦“Business Voices in the Cotton Industry and Beyond: The Struggles of Private Companies in Wartime Chongqing”（ワークショップ Wartime Chongqing、於：シンガポール大学、2007年6月26日）、「關於企業管理公司的新思考」（「近代社会環境下の企業発展」国際シンポジウム、中国・上海・上海社会科学院主催、2007年7月20日）、「從戦時經濟到戦後經濟的轉換：其嘗試与挫折」（「1940年代的中国」国際シンポジウム、中国・北京・中国社会科学院近代史研究所主催、2007年8月19日）。

窪添 慶文

②『水経注疏訳註（渭水篇 上）』（東洋文庫中国古代地域史研究班編、（財）東洋文庫、2008年3月、x+463+36頁）、③「北魏における榮陽鄭氏」（『お茶の水史学』51、読史会、2007年12月、181～207頁）、⑤「なのお座右に置きたい書—姚薇元著『北朝胡姓考』—」（『東方』325、東方書店、2008年3月、20～23頁）。

黒田 卓

③「ヘイダール・ハーンの事績再考」（『上智アジア学』25、上智大学アジア文化研究所、2007年12月、197～220頁）、⑦「イラン人遣欧使節が見た19世紀初めのイングランド」（東北大学大学院国際文化研究科科長裁量経費共同研究「中東」表象研究会、2007年7月4日）、「近代イラン社会運動史の系譜」（東京外国語大学AA研2007年度中東イスラーム教育セミナー、2007年9月19日、要旨：http://www.aa.tufts.ac.jp/fsc/meis/kyouiku_rpt07_Kuroda.html、2007年11月）、「アゼルバイジャン共和国における文書・文献調査」（2007年度イラン研究者集会、2008年3月30日）。⑧「変容のなかのイスラーム主義」（『インターカルチュラル』5、日本国際文化学会、2007年6月、56～61頁）。

巖 善平

③「上海市における二重労働市場の実証研究」（『アジア経済』48-1、アジア経済研究所、2008年1月、1～24頁）、「日中農産物貿易における戦略的互惠関係の構築を急げ」（『地域農業と農協』27-3、農業開発研修センター、2007年12月、4～9頁）、「中国貴州省における持続可能な発展に向けた諸政策—貧困対策、環境保全及び国際協力を中心として（藤田・竹原・竹歳・大塚との共著）」

(『総合研究所紀要』33-2、桃山学院大学、2007年12月、66～100頁)、「制度的差別」で取り残される「絶対的貧困」(『リベラルタイム』、蕎麦社、2007年11月、28～29頁)、「中国経済はなぜ成長したか」(学術先端情報-学術 mini 情報誌『PS Journal』11、日本図書センター、2007年11月)、「社会を混乱させる食肉の高騰」(『エコノミスト』、毎日新聞社、2007年10月16日、36～37頁)、「第1章 農業と食糧」(佐々木信彰編『現代中国産業経済論』、世界思想社、2007年10月、29～42頁)、「どうなる今後の農産物の対中輸出」(『山形農業』、山形県農政局、2007年6月号、78～80頁)、「人力資本、制度与工資差別」(『管理世界』、國務院發展研究センター、2007年6月、4～13頁)。

胡 潔

③「『嫡』・『庶』考(1) — 七世紀、八世紀の王室の系譜を中心に —」(『言語文化論集』29-1、名古屋大学大学院国際言語文化研究科、2007年11月、1～17頁)。

黄 東蘭

③「清末直隸地方自治与日本」(『清史訳叢』7、中国人民大学出版社、2008年1月、145～172頁)、④「歴史学」(『中国年鑑』2007年版、創土社、2007年7月、205～207頁)、⑦「中国における「亜細亜」概念の受容」、東アジア近代史学会第12回研究大会「“東アジア”再考—近現代史からの問い」(於：東京大学、2007年6月22日)、「教科書にみる日中の相互認識」(愛知県立大学大学院公開講座、2007年7月14日)、「清末・民国期地理教科書の日本イメージ」(国際共同研究シンポジウム「清末中華民国初期の日中関係史—協調と対立の時代(1840-1931年)」、日中関係史研究会主催、於：東京大学、2007年11月3日・4日、要旨：『清末中華民国初期の日中関係史—協調と対立の時代(1840-1931年)』、国際共同研究シンポジウム論文集)。

小杉 泰

③「イスラーム世界における分離融合論：「宗教と科学」の関係をめぐる考察」(『イスラーム世界研究』1-2、イスラーム地域研究センター、2007年12月、123～147頁)、⑦「現代イスラームと中東政治」(定例午餐会、於：社団法人大阪倶楽部、2006年9月15日)、「現代イスラームと中東政治」(「中東ベーシック」研究会、於：社団法人日本記者クラブ、2007年5月17日)、「イスラーム世界の文明と社会」(ライフセミナー講座、泉北教養講座、2007年6月8日)、「現代イスラーム社会—暮らしと発想法—」(春秋講義、於：京都大学、2007年10月31日)、「激動するイスラーム世界と国際社会」(木曜講座、於：西宮東高校、2007年11月1日)、「イスラーム復興とグローバル化する国際社会」(グローバルゼーショ

ン研究会、於：聖学院大学総合研究所、2007年12月3日)、⑧「中東全体の安定念願に」(日本海新聞、2007年6月21日)、「中東全体の安定 関心を」(新潟日報「イラク特措法延長⑤」2007年6月22日)、「イスラーム原理主義」(『世界史の研究』611、山川出版社、2008年2月、40～43頁)、「イスラームはどう変わってきたか?ムハンマドからホメイニまで」(『世界史のしおり』連載、帝国書院、「第1回 イスラームの誕生とムハンマドの社会革命」2006年4月、「第2回 イスラーム帝国はグローバル化の始まりか?」2006年10月、「第3回 湿潤アジアへの布教とスーフィー教団」2007年1月、「第4回 イスラーム帝国の鼎立とイスラーム法学者の活躍」2007年4月、「第5回 “西洋”の衝撃とイスラーム改革」2007年10月、「第6回 第3次中東戦争後のイスラーム復興」2008年1月)。

小浜 正子

③「中国史における慈善団体の系譜—明清から現代へ」(『歴史学研究』833(2007年度歴史学研究会大会報告増刊号)、歴史学研究会、2007年10月、21～30頁)、⑦「中華人民共和国成立後の言語空間の変容—新聞紙上の生育問題関連言説から」(国際シンポジウム「中華人民共和国成立前後における都市社会・文化の変容—空間と生活の再編」、於：日本大学、2007年9月23日)、「從“非法墮胎”到“計画生育”—從建国前後性和生殖的言論變遷看公私界線重構」(第2届中国城市社会与大眾文化討論会、於：成都、2007年7月14日)、「中国史における慈善団体の系譜—明清から現代へ」(歴史学研究会2007年度大会全体会(大会テーマ：寄進の比較史—富の再配分と公共性の論理)、於：東京大学、2007年6月2日)。

小松 久男

③「ロシア革命とイスラーム：中央アジアを中心に」(『ユーラシア研究』37、ユーラシア研究所、2007年11月、15～20頁)、⑦「聖戦から自治構想へ：20世紀初頭の中央アジア」((財)東洋文庫平成19年度春期春期東洋学講座、2007年5月22日、要旨：『東洋学報』89-2、(財)東洋文庫、2007年9月、109～111頁)、「A Pan-Islamist's Journey: Russia, the Ottoman Empire and Japan,」(Japan Center for Middle East Studies, November 6, 2007, Beirut Press Club)、「イスラーム復興の潮流とその行方」(和光大学総合文化研究所公開シンポジウム「シルクロード」は、いま：中央ユーラシアの現在をさぐる」2007年12月1日、報告全文：「イスラーム復興の潮流とその行方」、『東西南北』、和光大学総合文化研究所年報、2008年3月、18～26頁)、「Central Asian Studies in Japan,」(International Conference: Central Asian Studies: History, Politics and Society,

Tsukuba University, December 14, 2007)、⑧「草原・オアシス・シルクロード：激動の中央アジア、その歴史舞台について」(NHK「新シルクロード」プロジェクト『新シルクロード・激動の大地をゆく』上、コーカサス・中央アジア・アラビア半島、NHK出版、2007年7月、267～278頁)、「中央アジア現代イスラームの相貌」(『現地調査で収録した映像資料のデジタル処理と情報共有ネットワークの構築』、平成17年度～平成19年度科学研究費補助金研究成果報告書、研究代表者：清水宏祐、2008年3月、53～60頁)。

佐藤 次高

③ “The Sufi Legend of Sultan Ibrāhīm b. Adham,” (Orient, vol. 42, 2007, pp. 41-54.)、 “Fiscal Administration in Syria during the Reign of Sultan al-Nasir Muhammad,” (Mamlūk Studies Review, 11-1, 2007, pp. 19-37.)、⑧「東洋文庫『東洋学講座』500回記念講演会に寄せて」(『UP』415、東京大学出版会、2007年5月、32～37頁)「円錐形の砂糖ウブルージュについて」(『イスラム科学研究』3、早稲田大学イスラム科学研究所、2007年、105～109頁)、「イスラーム社会の外来者：マムルーク」(『日本歴史学協会年報』22、日本歴史学協会、2007年4月25日、16～18頁)、「砂糖から見たイスラーム社会史」((財)東洋文庫平成19年度春期東洋学講座、2007年5月8日、要旨：『東洋学報』89-2、(財)東洋文庫、2007年9月、101～104頁)、「ムスリムの人名について教えてください」(『歴史と地理 世界史の研究』214 <世界史 Q & A >、山川出版社、2008年2月、44～46頁)。

佐藤 宏

③ “Revolution and family in rural China: influence of family background on current family wealth”, (*IZA Discussion Paper Series*, No. 3223, pp. 1-45, <joint with Li Shi>, Forschungsinstitut zur Zukunft der Arbeit (Institute for the Study of Labor)), “The changing structure of Communist Party membership in urban China 1988-2002,” (*Journal of Contemporary China*, Vol. 17, No.2, <joint with Li Shi>).

塩沢 裕仁

②『水経注疏訳注(渭水篇上)』(東洋文庫古代地域史研究班編、(財)東洋文庫、2008年3月、x+463+36頁)。

重近 啓樹

⑧「堀敏一先生を偲んで」(『歴史評論』692、歴史科学協議会、2007年12月、109～110頁)。

清水 信行

- ③「2007年度ロシア・クラスキノ土城発掘調査概要報告（遺構編）第3章 まとめ」（『青山史学』26、青山学院大学文学部史学研究室、2008年3月、101頁）、⑤遺跡紹介「シニェリニコヴォ I山城の発見と調査」（『アジア遊学』107、勉誠出版、2008年2月、108～110頁）、「チェルニャチノ5墓地遺跡の発見」（『アジア遊学』107、勉誠出版、2008年2月、112～114頁）、「クラスキノ土城の発見と調査」（『アジア遊学』107、勉誠出版、2008年2月、116～118頁）、⑥「E. V. シャフクノフ「渤海の屋根瓦の文様とその分類（『北太平洋の考古学 1996年 ウラジオストック』所収）」（『青山史学』26、青山学院大学文学部史学研究室、2008年3月、71～85頁）。

末成 道男

- ①羅素玫主編、何珮儀、黃淑芬編譯『臺灣阿美族之社會組織及其變化：從招贅婚至嫁娶婚』（中央研究院民族學研究所、2007年10月、416頁、原著『台湾アミ族の社会組織とその変化』、東京大学出版会、1983年）。

鈴木 均

- ②『アフガニスタン国家再建への展望—国家統合をめぐる諸問題』（明石書店、2007年5月、323頁）、『アフガニスタンと周辺国—6年間の経験と復興への展望』（アジア経済研究所、2008年3月、223頁）、③「イランにおける地方議会制度と地方自治意識の発展—ハータミー期における展開とその法的条件について」（『上智アジア学』25、上智大学アジア文化研究所、2008年3月、251～286頁）、⑦「ハータミー期における地方議会制度の導入とその歴史的淵源」（日本オリエント学会第49回大会研究発表、2007年9月30日、要旨：『オリエント』50-2、日本オリエント学会、2008年3月、363～364頁）、「尾崎三雄が見た1930年代のアフガニスタン」（アジア経済研究所講演会、2007年10月9日）、「衣・食・住からみたイスラーム—イラン人と20年間付き合ってきて」（アジア経済研究所講演会、2007年11月4日）、⑧「特集にあたって（特集：ターリバーン敗走から6年目のアフガニスタン）」（『アジ研ワールド・トレンド』139、アジア経済研究所、2007年4月、2～3頁）、「アフガニスタンの対周辺国関係」（『アジ研ワールド・トレンド』139、アジア経済研究所、2007年4月、4～7頁）、「イランの核開発問題と対米関係—高まる内政・外交上の緊張」（『アジ研ワールド・トレンド』142、アジア経済研究所、2007年7月、36～39頁）、「イラン、地方における『明』と『暗』—大統領の『支持基盤』の実態」（『時事トップ・コンフィデンシャル』2007年7月3日号、時事通信社、2～5頁）。

鈴木 博之

③「明清時代、徽州の里社について」（『山根幸夫教授追悼記念論叢 明代中国の歴史的位相』上、汲古書院、2007年6月、497～521頁）、「南京神廟の成立—明初の祠廟政策」（『東洋学報』89-2、(財)東洋文庫、2007年9月、31～58頁）。

妹尾 達彦

③「都の建築—中国大陆を事例に一」（『人文研紀要』61、2007年9月、中央大学人文科学研究所、41～79頁）、「大明宮的建築形式與唐後期的長安」（中国社会科学院考古研究所・西安大明宮遺址保護領導小組編『大明宮遺址考古發現与研究』、北京・文物出版社、2007年10月、230～245頁）、「八・九世紀の中国都城—長安と洛陽—」（『長岡京遷都—桓武と激動の時代—』、国立歴史民俗学博物館、2007年10月、102～103頁）、「長安と洛陽の内部構造」（秋山元秀・金田章裕・高橋誠一・溝口常俊・山田誠 共編『アジアの歴史地理2都市と農地景觀』、朝倉書店、2008年2月、13～26頁）、「円仁の長安—9世紀の中国都城と王権儀礼—」（『中央大学文学部紀要 史学』53、2008年3月、17～76頁）、④「歴史の風：都市と環境の歴史学—黄土高原に一」（『史学雑誌』116-9、史学会、2007年9月、38～40頁）、⑤「書評：グローバルで複雑な交流—森安孝夫著『シルクロードと唐帝国』、講談社、2006年」（日本経済新聞、2007年4月1日朝刊）、「書評：エキゾチシズムの彼方—エドワード・シェーファー著・吉田真弓訳『サマルカンドの金の桃—唐代異国文物の研究—』、勉誠社、2007年」（『中国図書』20-1、内山書店、2008年1月、2～3頁）、⑦「農業—遊牧交界地帯考査的目的と意義」（日本学術振興会科学研究費（基盤研究(S)）、於：北京・北京大学中国古代史研究センター、2007年7月30日）、「都城与王権儀礼—根拠中国歴代都城復原図—」（第3届中国史学会国際会議“基調与変奏—7-20世紀的中国国際學術研討会”、中国史学会、於：台湾・国立政治大学 行政大樓7楼第1會議室、2007年9月7日）、「長安から見た日本の都城」（「古代都城とまつりごと—飛鳥から平城京—」、青木書店・明治大学古代学研究所、於：明治大学リバティータワー2階1021室、2007年9月25日）、「隋唐長安与東亞史的轉型」（南京・東南大学建築学院、於：東南大学建築学院前工院206室、2007年10月20日）、「近代日本の都市史与建築史」（紀念劉敦楨先生誕辰110周年暨中国建築史学史專題研討会、南京・東南大学建築学院、於：同大学呉建雄記念館報告庁、2007年10月21日）、「中国複都制の沿革—隋唐期を中心に—」（東アジア比較都城史研究会第2期比較都城科学研究会、於：京都館、2007年11月25日）、「中国歴代都市図の変遷—イメージと現実—（韓国語）」（東北アジア歴史地図現状と課題、韓国東北アジア歴史地図編集委員会、於：韓国・ソウル大学奎章閣、2007年11月30日）、「中国都城の方格状街割の沿革と日本都城」（第2

回都城制研究集会 古代都城と条坊制—下三橋遺跡をめぐる—、奈良女子大学21世紀COE プログラム、於：奈良女子大学理学部G棟1階、2007年12月15日）、「中国都城の諸施設—魏晋洛陽城から南宋臨安城まで—」（東アジア比較都城史研究会第2期比較都城科研研究会、於：山口大学人文学部、2008年1月7日）、「唐代長安の印刷文化再考—S.P.12とS.P.6の分析を中心として—」（東洋文庫内陸アジア出土古文献研究会、於：東洋文庫会議室、2008年1月19日）、「胡人与漢人一異人買宝譚与漢人認識的変遷—」（空間移動之文化詮釈国際学研討会、台湾・国家図書館 漢学センター、於：国家図書館国際会議庁、2008年3月27日）、「唐代的長安与洛陽」（台湾・国立清華大学人文社会研究センター、於：清華大学人文院A302会議室、2008年3月29日）、⑧「市場（中国の）」（【辞典項目執筆】『歴史学辞典14 ものとわざ』、弘文堂、2007年6月、30頁）。

關尾 史郎

③「随葬衣物疏と鎮墓文—新たな敦煌トゥルフアン学のために—」（『西北出土文献研究』6、西北出土文献研究会、2008年3月、5～25頁）、「敦煌の古墓群と出土鎮墓文」（下）（『資料学研究』5、新潟大学「大域的文化システムの再構成に関する資料学的研究」プロジェクト、2008年3月、横1～16頁）、⑤「三崎良章著『五胡十六国の基礎的研究』」（『法制史研究』57、法制史学会、2008年3月、314～318頁）⑦「トゥルフアン文書と敦煌文物のあいだ—新たなる敦煌・トゥルフアン学のために—」（ワークショップ「シルクロード出土文物研究の新展開」、於：弘前大学人文学部、2007年7月15日）、「書評：三崎良章著『五胡十六国の基礎的研究』」（五胡の会第40回集会、於：塩原温泉、2007年7月28日）、「日本的〈五胡〉時代史研究—以前世紀的谷川道雄《隋唐帝国形成試論》与今世紀的三崎良章《五胡十六国の基礎的研究》を中心—」（中国魏晋南北朝史学会第9届年会、於：中国・武漢大学、2007年10月19日）、「アスターナ96号墓出土、上言文書（断片）」（西北出土文献を読む会例会、於：新潟大学五十嵐キャンパス、2007年11月24日）、「趣旨説明」（公開シンポジウム「簡牘の世界—越後・列島・半島・大陸・シルクロードを結ぶ—」、於：新潟大学五十嵐キャンパス、2008年3月2日）、⑧「『国家図書館蔵敦煌遺書』所収写経題記一覧」（I）（清水はるか氏と共編、『資料学研究』5、新潟大学「大域的文化システムの再構成に関する資料学的研究」プロジェクト、横39～69頁）、「ベルリン所蔵、「北涼承陽二年十一月戸籍」初探」（『在ベルリン・トルファン文書の比較史的分析による古代東アジア律令制の研究』、平成17年度～平成19年度科学研究費補助金研究成果報告書、研究代表者：小口雅史、法政大学、2008年3月、頁数未詳）、「ベルリン・トルファン・コレクション中の戸籍について」、（『在ベルリン・トルファン文書の比較史的分析による古代東アジア律令制の研究』〈前出〉、頁数

未詳)、「趣旨説明」(『公開シンポジウム「簡牘の世界—越後・列島・半島・大陸・シルクロードを結ぶ—」予稿集』、新潟大学超域研究機構、2008年3月、1頁)。

関本 照夫

③「ものを作る技の考察」(松井健編『自然の資源化』、弘文堂、2007年12月、287～315頁)。

曾田 三郎

④「中華民国成立後の憲法案起草と地方制度改革構想」(『広島東洋史学報』12、広島東洋史学研究会、2007年12月、1～20頁)、「中華民国初年の地方制度案策定をめぐる国務院と総統府」(『広島大学大学院文学研究科論集』67、広島大学大学院文学研究科、2007年12月、33～53頁)、⑤「千葉正史著『近代交通体系と清帝国の変貌—電信・鉄道ネットワークの形成と中国国家統合の変容—』」(『歴史学研究』836、歴史学研究会、2008年1月、51～54頁)。

高田 幸男

⑦「中国の大学における「中央」と「地方」」(駿台史学会2007年度大会「近代化と大学—大学から見た「中央」と「地方」—」、於：明治大学駿河台校舎、2007年12月8日、要旨：『駿台史学』133、駿台史学会、2008年3月、135～136頁)、「デジタル化時代の中国研究—デジタルライブラリ・アーカイブを中心に—」(大澤肇氏と共同発表、現代中国地域研究・拠点連携プログラム第1回シンポジウム「現代中国研究—現段階と展望」、於：早稲田大学、2008年2月2日)。

瀧下 彩子

②『中国企業経営の文化的土壌と技術移転—『中国社史目録』編纂を基礎として—』(平成16年度～平成19年度科学研究費補助金(基盤研究(B))研究成果報告書(課題番号16330067)、研究代表者：金丸裕一、2008年3月)、⑦「近現代の戦争を描いた漫画家たち」(東海大学ウィンターセッション、2008年2月21日)。

武内 紹人

② Imaeda, Takeuchi, et. al., *Tibetan Documents from Dunhuang kept at the Bibliotheque Nationale de France and the British Library*, Old Tibetan Documents Online Monograph Series Vol. I (Tokyo: Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies, 2007, XXXIII + 358 pp.)、③「チベット語文書」(吉田順一編『ハラホト出土文書の研究』、雄山閣、2007年2月、188～194頁)、Old Tibetan Buddhist

Texts from post-Tibetan Empire Period (mid 9th to late 10th centuries), Cristina Sherrer-Schaub (ed.) *Old Tibetan Studies 2: Proceedings of the 10th Seminar of the International Association for Tibetan Studies* (Brill, in press.), ⑦ “The Impact of the finds at Dunhuang on Tibetan Studies,” (A Hundred Years of Dunhuang, 1907-2007, The British Academy, the British Museum and the British Library, 17-19 May 2007.), “Problems and Progress in Old Tibetan Studies,” (13th February 2008, Oxford University, Numata Distinguished Guest Speaker Series: The Advent of Buddhism in Tibet.), “Post-imperial Old Tibetan Texts in the 10th century and Thereafter,” (14th February 2008, Oxford University, Numata Distinguished Guest Speaker Series: The Advent of Buddhism in Tibet.)。

武田 幸男

①『広開土王碑との対話』(白帝社、2007年10月、335頁)、②『広開土王碑』(天来書院、2007年10月、141頁)、⑦「私の新羅史探訪の旅」(2007年慶州新羅学国際学術大会、韓国慶州市・新羅文化遺産調査団主催、2007年11月9日)。

多田 狷介

②『中国前近代史論集』(太田幸男氏と共編著、汲古書院、2007年12月、458頁)、『水経注疏訳註(渭水篇 上)』(東洋文庫中国古代地域史研究班編、(財)東洋文庫、2008年3月、x+463+36頁)、⑤「二十世紀、怒濤の中国農村・非業の革命家—暁劍著『滄桑』—」(『東方』321、東方書店、2007年11月、33~36頁)、⑦「後漢末~魏晋期、壊乱の世相」(2006年度〔第18回〕日本秦漢史学会大会記念講演、2006年11月2日、要旨:『日本秦漢史学会会報』8、日本秦漢史学会、2007年11月、29~33頁)。

立川 武蔵

①『空の実践—ブッディスト・セオロジーⅣ』(講談社、2007年8月、220頁)、『ヒンドゥー神話の神々』(せりか書房、2008年3月、400頁)、⑥「『完成せるヨーガの環』研究(二)」(『愛知学院大学人間文化研究所紀要 人間文化』22、愛知学院大学文学部人間文化研究所、2007年9月、179~198頁)。

田仲 一成

①『中国祭祀戯劇研究』(中訳本、布和訳、北京大学出版社、2008年2月、全349頁)、③「潮劇在南戲中的地位」(『戯曲研究』72、北京、2007年1月、232~249頁)、「獻疑于以民俗学為禁忌の作風—就中国戯劇の發生等問題答解玉峰先生—」(葉

金定『学術研究』268、2007-3、広州、2007年3月、142～46頁）、「香港新界金錢村太平洪朝祭祀弁析」（『民俗研究』2007-1、山東大学、2007年3月、77～91頁）、「演劇史における目連戯」（野村伸一編『東アジアの祭祀伝承と女性救済』、風響社、2007年8月、319～353頁）、「戯曲文学從祭祀裏產生的条件及其在中国的過程」（葉春生編『文化遺産』創刊号、中山大學中國非物質文化遺產研究中心、広州、2007年11月、12～21頁）⑦「明清徽州の農村演劇—宗族・鬼・亡靈—」（財団法人東洋文庫平成19年度秋期東洋学講座、2007年10月16日、要旨：『東洋学報』89-4、（財）東洋文庫、2008年3月）。

竺沙 雅章

③「關於黑水城出土的遼代刻本」（申軍訳、『天津学誌』2、北京図書館出版社、2007年8月、141～147頁）、「莫高窟北区石窟出土の版刻漢文大藏經本」（『轉型期的敦煌学』、上海古籍出版社、2007年11月、365～373頁）、「『金藏』本の装丁について」（『汲古』52、汲古書院、2007年12月、21～29頁）。

辻本 裕成

③「『とはずがたり』の御葉—雅忠と通雅の參仕をめぐって—」（『南山大学日本文化学科論集』7、南山大学日本文化学科、2008年3月、23～40頁）、「『瘡の虫』考（下）」（長谷川雅雄、ペトロ・クネヒト、美濃部重克との共著、『アカデミア 人文・社会科学編』86、南山大学、2008年1月、54～131頁）、「伝尸「鬼」と「虫」—杏雨書屋蔵『伝尸病肝心鈔』略解—」（美濃部重克、長谷川雅雄、ペトロ・クネヒトとの共著、『唱導文学研究 第六集』、三弥井書店、2008年1月、49～95頁）。

鶴見 尚弘

⑦「日中の留学生交流とその課題」（講演・司会、第4セクション地域協力と中日関係、“戰略的互惠關係の安定した發展を目指す—日中国交正常化35周年記念シンポジウム—”、中国社会科学院日本研究所、主催：中国社会科学院日本研究所、於：中国北京・九華山莊、2007年9月7日～9日、要旨：『戰略互惠 穩定發表』、通刊ページなし）。

戸倉 英美

③「漢鏡歌『戰城南』考—併論漢鏡歌與後代鼓吹曲的關係」（『樂府学』2、中国首都師範大學詩歌研究中心、2007年8月、1～18頁）、⑦「漢鏡歌『戰城南』考—併論漢鏡歌與後代鼓吹曲的關係」（於：台灣大學中文系、2008年1月14日）、「從變身故事的變遷看唐代小說的特点」（台灣逢甲大學唐代研究中心主催、於：

第一屆唐代學術研習營、2008年1月16日、要旨：『研習手冊』7頁）、「日本雅楽・伎楽与唐代的文学・戯曲・音楽」（台湾逢甲大学唐代研究中心主催、於：第一屆唐代學術研習營、2008年1月17日、要旨：『研習手冊』7頁）、⑧『『甘泉賦』新釈新考』の企画と監修（『東京大学中国語中国文学研究室紀要』10、2007年11月、120～231頁、「はじめに」（121～129頁）を執筆し、12篇の論文（130～231頁）の監修を行う）。

朽尾 武

⑦「夏目漱石と石鼓文」（於：三井記念美術館、6月23日）。

富澤 芳正

②『中国企業経営の文化的土壌と技術移転—『中国社史目録』編纂を基礎として—』（平成16年度～平成19年度科学研究費補助金（基盤研究(B)）研究成果報告書（課題番号16330067）、研究代表者：金丸裕一、2008年3月）④「二つの中国企業史シンポジウムに参加して」（『近きに在りて』52、2007年11月、131～133頁）、⑤「久保亨著『戦間期中国の綿業と企業経営』（『中国経済研究』41/2、2007年9月、52～54頁）、⑦「1930年代的河南、河北、山西紡織工業的重編與中国銀行」（「近代中国社会環境下の企業發展」国際學術討論会、於：中国・上海社会科学院經濟研究所、2007年7月20日）、「1920-30年代的嚴家經營的紡織企業」（「中国企業史の古典範：概念與個案」国際學術討論会、於：中国・復旦大学歴史系、2007年8月24日）、「在華紡と中国」（シンポジウム「中国進出の日本企業とその建築」、於：神奈川大学、2007年10月26日）。

鳥海 靖

②『近代日本の転機—明治・大正編』（上松俊弘氏らと分担執筆、全32項目中4項目の執筆と全体の編集担当、吉川弘文館、2007年6月、298頁）、『近代日本の転機—昭和・平成編』（渡辺昭夫氏らと分担執筆、全32項目中5項目の執筆と全体の編集担当、吉川弘文館、2007年6月、302頁）、⑤「伊藤隆・季武嘉也編『近現代日本人物資料情報事典』（『日本歴史』717、日本歴史学会、2008年2月、122～123頁）、⑦「近代日本の發展を推進した指導者たち」ほか連続20回（東京急セミナーBE、於：東京急行電鉄、2007年4月～2008年3月）、「世界の歴史問題と歴史教科書の中の日本」（中央大学大学院文学研究科総合講座、於：中央大学、10月10日・17日・24日）、「19世紀後半の国家的危機と立憲政治論—加藤弘之の『鄰艸』を中心に—」（日中歴史教育交流事業シンポジウム、於：東京・国際フレンドシップ協会、2008年3月4日）、「国際的な歴史相互理解の發展をめぐりて—近年の動向と未来に向けての提案—」（日韓歴史教育交流事業シン

ポジウム、於：東京・国際フレンドシップ協会、2008年3月11日）、⑧「私と国際交流—歴史を考え国際相互理解を果す—」（『ザ・コミュニケイター』187、国際フレンドシップ協会、2007年4月、1頁）、「ベルリンの伊藤博文—立憲政治調査の足跡をたずねて—」（『本郷』70、吉川弘文館、2007年7月、2～4頁）、「私の血となり肉となったこの三冊」（『諸君！』39-10、文藝春秋社、2007年10月、246～247頁）、「ヤルタへの旅」（『日本歴史』716、吉川弘文館、2008年1月、60～63頁）、「国際的な歴史相互理解のために—日韓歴史共同研究に寄せて—」（『外交フォーラム』236、都市出版社、2008年3月、44～46頁）、「『明治立憲政と伊藤博文』に寄せて」（『ジョージ=アキタ先生傘寿記念誌—その人と学問—』、ジョージ=アキタ先生の傘寿を祝う会、2008年3月、78～80頁）。

中兼 和津次

③「移行経済論—その1—社会主義体制移行の歴史的背景と理論的根拠」（『青山国際政経論集』72、青山学院大学国際政経学部、2007年5月、27～79頁）、「移行経済論—その2—体制移行の結果とその評価」（『青山国際政経論集』74、青山学院大学国際政経学部、2008年1月、1～61頁）。

長沢 栄治

③“Urban Unrest and Social Movements under the ‘Soft State’ after Introduction of the Open-Door Policy in Egypt”, (*International Journal of Public Affairs*, Vol. 4, Chiba University, March 2008, pp. 43-74.)、「経済改革の歴史的経緯」（山田俊一編『現代エジプトの政治と経済』、アジア経済研究所、2008年3月、89～114頁）、「近代エジプトの国家と社会」（池谷和信ほか編『アフリカ1：総説、イスラームアフリカ、エチオピア』〈『新世界地理—大地と人間の物語』第11巻〉、朝倉書店、2007年、319～32頁）、「門戸開放政策後エジプトの「軟らかい国家」と都市の社会不安と社会運動」（『公共研究』4-3、千葉大学公共研究センター、2007年12月、44～46頁）、⑤「横田貴之著『現代エジプトにおけるイスラームと大衆運動』」（『イスラーム世界研究』1-1、京都大学イスラーム地域研究センター、2007年6月、244～247頁）。

中見 立夫

③「『満文大藏経』の探索、考証及其復刊」（故宮博物院、国家清史編纂委員会編『故宮博物院八十華誕暨国際清史学術研究会論文集』、北京・紫禁城出版社、2006年11月、523～530頁）、「Search for the Secret History of the Mongols: Qing and Japanese Scholars’ Mongol Historical Studies in the 19th-Early 20th Centuries” (Монгол улсын шинжлэх ухааны акаеми & Олон улсын

Монгол судлалын холбоо ed, *Монгол судлалын өгүүллүүд / Essays on Mongol Studies*, Улаанбаатар: 《БЕМБИ САН》 хэвлэлийн газар, 2007, pp. 128-137.)、*「宣統三年夏の庫倫」*(細谷良夫編『清朝史研究の新たな地平—フィールドと文書を追って—』、山川出版社、2008年2月、310~330頁)、④「プリンストン高等研究所における日々」(『東方学』115、(財)東方学会、2008年1月、169~181頁)、⑦「曖昧な“帝国(Empire)”、不明瞭な“植民地(Colony)”—東アジア史の文脈から—」、(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所政治文化研究ユニット公開研究会:「帝国・植民地の政治支配と歴史認識」、2007年12月13日)、⑧「モンゴル」【事典項目執筆】(平野健一郎、牧田東一監修『新版【対日関係】を知る事典』、平凡社、2007年11月、378~381頁)。

西尾 寛治

③ “The Chams and the Malay World” (OMAR Farouk & YAMAMOTO, Hiroyuki eds. *CIAS Discussion Paper No.3, Islam at the Margins: The Muslims of Indochina*, Center for Integrated Area Studies, Kyoto University, March, 2008, pp. 86-93.)、⑦ “Bangsa and Politics: Melayu-Bugis Relations in Johor-Riau and Riau-Lingga” (KAWASHIMA Midori, ARAI, Kazuhiro & YAMAMOTO, Hiroyuki compiled *Proceedings of the Symposium on Bangsa and Umma; A Comparative Study of People-Grouping Concepts in the Islamic Areas of Southeast Asia, May 12, 13 & 19, 2007, Tokyo and Kyoto*, NIHU Program Islamic Area Studies Section for Islamic Area Studies, Institute of Asian Cultures, Sophia University. August 20, 2007, pp. 96-112.)。

延廣 眞治

①『三人吉三廓初買』(白水社、2008年3月、334頁)、③「見立と戯作」(『図説「見立」と「やつし」』、八木書店、2008年3月、13頁)。

濱下 武志

⑦ “Maritime Asia and Maritime History Studies: 1600-2000” (Symposium VI, The International Conference of Eastern Studies, The Tōhō Gakkai, 18 May, 2007, Transactions of The International Conference of Eastern Studies No. LII 2007, The Tōhō Gakkai, August, 2007, pp. 155-160.)。

林 俊雄

①『スキタイと匈奴(興亡の世界史第2巻)』(講談社、2007年6月、380頁)、⑧「騎馬遊牧民スキタイと東西文化交流—グリフィン図像の伝播と変容に焦

点を当てて—」（『オリエンテ』36、(財)古代オリエント博物館、2008年2月、13～20頁）。

原 實

- ① “Tapas in the Bhagavadgītā” (The Adyar Library Pamphlet Series No.61 The Adyar Library and Research Centre, Chennai 2007, vii-ix 38pp.)、③ “A Note on the Sanskrit Word andha” (Indo-Iranian Journal 49, 2006, pp. 273-303.)、
“A Note on vinaya” (The Journal of Pari Text Society, vol.XXIX, 2007, pp. 285-311.)、「古代インドの草木観」（『超域アジア研究報告—附 歴史文化研究—』4、(財)東洋文庫、2007年3月、46～93頁）、⑤ 「P. オリヴェル著『マヌ法典（批判的校訂と翻訳）』（『東洋学報』89-3、(財)東洋文庫、2007年12月、029～035頁）、⑧ Obituary, Colette Caillat (15 January 1921-15 January 1007, Indo-Iranian Journal 50, 2007, pp. 1-4)、「伊藤千賀子著『仏教説話の展開と変容』、序文」（ノンブル社、2008年3月、1～3頁）。

平勢 隆郎

- ①『史記の「正統』』（講談社、2007年12月、353頁）、②『東亜歴史的天下与中国概念』（甘懷真主編、台湾大学出版中心、2007年6月、総357頁、「戦国時代の天下与其下的中国、夏等特別領域」53～91頁を担当）、『古代中国：社会転型与多元文化』（韓昇主編、上海人民出版社、2007年12月、総467頁、「大国・小国の関係と漢字伝播」13～23頁を担当）、『鳥学大全』（秋篠宮文仁・西野嘉章編、東京大学総合研究博物館、2008年3月、総636頁、「南方の守神、朱雀の誕生」86～111頁を担当）、③「中国古代における説話（故事）の成立とその展開」（『第八屆韓国中国史学会国際學術討論会論文集』、2007年、『史料批判研究』8、汲古書院、2007年12月）、「游侠の「儒化」とは何か」（『紀念西安碑林九二〇周年華誕国大学術研究討会論文集』、2007年、『史料批判研究』8、汲古書院、2007年12月）、⑦「亀趺と茨城の文化および秋田のことなど」（中国出土史科学会12月例会、2007年12月15日、概要：『中国出土資料学会会報』37、中国出土資料学会、2007年）、「《左伝》所載故事的成立与展開」（台湾仏光大学歴史系講演会、2007年9月26日、配布資料とパワーポイント。内容は上記論文「中国古代における説話（故事）の成立とその展開」を利用）、「秦始皇的城市計画」（台湾仏光大学歴史系講演会、2007年9月27日、配布資料とパワーポイント。内容は平勢隆郎「秦始皇的城市建設計画与其理念基礎」Historical Memory and Urban Culture, November 2-5, 2006, Xi'an（出版準備中）を利用）、「怎样解読〈史記〉」（台湾仏光大学歴史系講演会、2007年9月28日、配布資料とパワーポイント。内容は上記著書『史記の「正統』』終章を利用）、「怎样解読〈史記〉」（台湾中興大学

歴史系講演会、2007年10月2日、配布資料とパワーポイント。内容同上)、「怎样解説〈史記〉」(中国社会科学院歴史研究所先秦史研究室学術報告、2007年10月30日、講演要旨は王震中氏の紹介文が社会科学院歴史研究所のホームページに掲載された。http://www.xianqin.org/xr_html/articles/bugao/594.html)。

平野 健一郎

② *A New East Asia: Toward a Regional Community*, (Mori Kazuko & Hirano Kenichiro, editors, National University of Singapore Press, 2007, 242p.), 『東アジア共同体の構築3・国際移動と社会変容』(西川潤氏と共編、岩波書店、2007年9月)、『新版【対日関係】を知る事典』(牧田東一氏と共同監修、平凡社、2007年11月)、③「国際関係と文化—アジアの場合—」(『ワセダアジアレビュー』2、早稲田大学アジア研究機構、2007年7月、66~71頁)、「国際関係を文化で見る—アジアの場合を中心に—」(『早稲田政治経済学雑誌』370、早稲田大学政治経済学会、2008年1月、2~17頁)。

弘末 雅士

③「インド洋におけるムスリムが形成した港市国家—北スマトラの港市と後背地」(『自然と文化そしてことば04—特集インド洋海域世界：人とモノの移動』、葫蘆舎、2008年1月、14~21頁)。

深沢 眞二

③「頼の祭見て来よ—七十二候と俳諧」(『文学』隔月刊8-3、岩波書店、5月、143~157頁)、「「すゞしさを」歌仙注釈(上)」(『和光大学表現学部紀要』8、和光大学、3月、178~196頁)。

藤田 忠

②『水経注疏訳注(渭水篇上)』(東洋文庫古代地域史研究班編、(財)東洋文庫、2008年3月、x+463+36頁)。

弁納 才一

③「近代山東省における粉条の生産から見た中国農村経済の特質」(『金沢大学経済学部論集』28-1、金沢大学経済学部、2007年12月、161~182頁)、「どこにも食べるものがない—汪精衛政権下中国における食糧事情」(弁納才一・鶴園裕福『東アジア共生の歴史的基礎—日本・中国・南北コリアの対話』、御茶の水書房、2008年2月、65~88頁)、⑧「日中戦争期中国における食糧事情に関する資料調査の報告」(『金沢大学経済学部論集』28-1、金沢大学経済学部、

2007年12月、265～293頁)、「近代中国の農村経済と食糧事情」(『歴史と地理』611、山川出版社、2008年2月、47～50頁)。

細谷 良夫

①『清朝史研究の新たなる地平—フィールドと文書を追って—』(山川出版社、2008年2月、359頁)。

堀川 徹

③「エルトゥールル号遭難救助活動に対するオスマン帝国の感謝状」(『研究論叢』70、京都外国語大学国際言語平和研究所、2008年1月)、71～83頁、⑦「中央アジアのイスラーム法廷文書：社会史研究資料としての可能性」(平成19年度第2回関西大学東西学術研究所研究例会、2007年9月22日、要旨：未刊)、「トルコ 悠久の歴史」(浜松北高等学校関西同窓会総会、2007年5月26日、要旨：『浜松北高等学校関西同窓会会報』、2007年8月、7～12頁)。

松重 充浩

③「『満洲日日新聞』(1919-1920) モンゴル関係記事標題目録」(『近現代東北アジア地域史研究会NEWS LETTER』19、2007年12月8日、84～93頁)、⑦「日本における中国東北地域史研究の展開と特徴：近代史(20世紀前半)部門と事例として」(満洲学会第15回学術大会、2007年8月24日、要旨：『Various Topics Of Manchuria Studies』、満洲学会・安東大学校人文科学研究所、2007年8月、77～83頁)、「コメント：日本デンマークの<行方>：村井誠人氏報告を中心に」(早稲田大学史学会大会シンポジウム、2007年10月6日、要旨：『史観』158、早稲田大学史学会、2008年3月、150～151頁)。

松永 泰行

③“Mohsen Kadivar, an Advocate of Postrevivalist Islam in Iran,” (*British Journal of Middle Eastern Studies* (BRISMES) 34(3), 2007年12月, pp. 317-329)、「三年目に入ったアフマディーネジャード政権下のイラン内政と対米関係」(『中東研究』497、(財)中東調査会、2007年10月、23～31頁)、⑤「吉村慎太郎著『イラン・イスラーム体制とは何か—革命・戦争・改革の歴史から』」(『国際政治』149、日本国際政治学会、2007年11月、176～178頁)、「澤江史子著『現代トルコの民主政治とイスラーム』」(『アジア・アフリカ地域研究』7-1、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科、2007年9月、109～112頁)。

松丸 道雄

②『水経注疏訳注（渭水篇上）』（東洋文庫古代地域史研究班編、(財) 東洋文庫、2008年3月、x+463+36頁）。

松本 弘

②『中東民主化ハンドブック 2007』（NIHUプログラム「イスラーム地域研究」東京大学拠点TIAS Middle East Research Series No.1、2008年1月、177頁）、⑧「読書案内 アラビア半島の近現代史」（『歴史と地理』606、山川出版社、2007年8月、38～41頁）。

丸尾 常喜

③「『阿Q正伝』再考—關於“類型”」（郭偉訳、『魯迅研究月刊』2007年9期、魯迅博物館、2007年9月、25～30頁）。

丸川 知雄

①『現代中国の産業—勃興する中国企業の強さと脆さ』（中央公論新社、2007年5月、iv+266頁）、②『中国企業の多国籍化・報告書』（(財) 国際貿易投資研究所、2007年3月、うち序章「中国企業の多国籍化」1～12頁、「中国系自動車メーカー（奇瑞・吉利）の海外展開」62～71頁を執筆）、『中国産業ハンドブック 2007～2008年版』（蒼蒼社、2007年10月、379頁、うち「はしがき」1～6頁、「産業政策」13～28頁、「電子・情報産業」175～192頁、「自動車産業」231～252頁を執筆）、『高等学校新地理 A・初訂版』（共著、帝国書院、2008年3月、「拡大する世界の貿易」71～72頁、「中国の生活と文化」134～145頁を執筆）、③「『自動車産業発展政策』後の中国自動車産業」（『JAMagazine』41、日本自動車工業会、2007年6月、2～7頁）、「まだまだ伸びる中国経済—リスク過敏になってチャンスを見逃すな」（『日本の論点2008』、文藝春秋、2008年1月、230～233頁）、「東アジアの経済統合と技術標準の問題」（阿部一知・浦田秀次郎・NIRA編『日中韓FTA—その意義と課題』、日本経済評論社、2008年2月、78～102頁）、「産業政策 高度化か比較優位か」（関志雄・朱建榮・日本経済研究センター・清華大学国情研究センター編『中国の経済大論争』、勁草書房、2008年3月、82～107頁）、⑤「今井健一・渡邊真理子著『企業の成長と金融制度』（『比較経済研究』44-2、比較経済体制学会、62～64頁）、「ロビン・メレディス著『インドと中国』（監修・解説、ウェッジ、2007年9月）、⑦“Why do Japanese MNCs fail in China?”（International Symposium “Japan-China in the Globalization Era”、於：日仏会館、2007年5月）、「温州の産業集積の地理と歴史」（中国経済学会全国大会、2007年6月）、「中国自動車産業における自主技術」（中国経営管理学会研究集

会、2007年9月)、「中国系自動車メーカーの分業構造」(産業学会・自動車産業研究会、2007年9月)、⑧「アフリカに進出する中国」(『東亜』480、霞山会、2007年6月、6～7頁)、「中国産業の謎を探る」(『国際貿易』、日本国際貿易促進協会、2007年8月14日)、「風評被害に遭う中国産食品」(『東亜』483、霞山会、2007年9月、6～7頁)、「現代中国の産業と技術進歩」(科学技術政策研究所講演録-211、文部科学省科学技術政策研究所企画課、2007年9月、42頁)、「黄河が『黄河』でなくなる日」(『東亜』486、霞山会、2007年12月、6～7頁)、「拡大する中国—日本はどう付き合うか(インタビュー記録)」(『週刊東京大学新聞』2410、2008年1月1日、3面)、「中国市場で積極的商品開発を」(『生産性新聞』(社会経済生産性本部)2219、2008年1月5日、2面)、「移動通信(ワールドインパクト—中国の産業)」(『国際貿易』1788、日本国際貿易促進協会、2008年1月15日、5面)、「East Asian Regional Integration: An Introduction」(Tamio Nakamura ed. *Future East Asian Regionalism: Proposal for an East Asian Charter, CREP International Symposium 2007 Proceedings. ISS Research Series No.28*, Institute of Social Science, February 2008, pp.12-26.)、「Is Japan Ready for Economic Integration with China?」(*Social Science Japan*, No.38, March 2008.)、「東アジアの企業内福利厚生 of 国際比較」(末廣昭編『東アジアの社会保障制度と企業内福祉 7カ国・地域の国際比較』、東京大学社会科学研究所、2008年2月、83～97頁)、「国別分析・中国(1)」(末廣昭編『東アジアの社会保障制度と企業内福祉 7カ国・地域の国際比較』、東京大学社会科学研究所、2008年2月、143～166頁)。

水野 善文

③「死の手紙、東へ?西へ?—説話伝承研究の試み—」(『総合文化研究』10、東京外国語大学総合文化研究所、2007年3月15日、78～102頁)、④“Session Report 4: How does the study of literature contribute to South Asian studies?”(『南アジア研究』18、日本南アジア学会、2007年3月15日、249～250頁)、⑦「文学作品にみるバクティの風潮」(‘バクティ研究会’(拓殖大学)における研究報告、2007年7月21日)、⑧「バクティ信仰の潮流」(小谷汪之編『世界歴史大系・南アジア史2—中世・近世—』、山川出版社、2007年8月31日、139～143頁)。

村井 章介

②宮地正人編『世界各国史1 日本史』(山川出版社、2008年、第4章・第5章の全部と第6章の半分を分担執筆)、『中世港湾都市遺跡の立地・環境に関する日韓比較研究』(平成15年度～平成19年度科学研究費補助金研究成果報告書、東京大学大学院人文社会系研究科、2008年)、③「肖像画・賛からみた禅の日

中交流」(『国際学術シンポジウム海を渡る文学—日本と東アジアの物語・詩・絵画・芸能』、新典社、2007年、108～137頁)、「十五世紀日朝間の境界人たち—井家次・職家父子の場合」(佐藤信・藤田覚編『前近代の日本列島と朝鮮半島』、山川出版社、2007年、145～156頁)、「朝鮮史料から見た「倭城」」(『東洋史研究』66-2、東洋史研究会、2007年9月、69～106頁)、「鬼界が島考—中世国家の西境」(『東アジアの古代文化』130、大和書房、2007年、178～189頁)、「15世紀から16世紀の東アジア国際秩序と日中関係」(日中歴史共同研究寄稿論文、2007年)、「中世における禅宗の輸入と「日本化」」(鈴木靖民編『古代日本の異文化交流』、勉強出版、2008年、388～394頁)、「中世日本と古琉球のはざま」(池田榮史編『古代中世の境界領域—キカイガシマの世界』、高志書院、2008年、97～122頁)、⑦「朝鮮からみた倭城」(学習院大学史学会大会講演、於：学習院大学、2007年6月16日)、「古琉球をめぐる冊封関係と海域交流」(史学会公開シンポジウム「琉球から見た世界史」、於：東京大学、2007年11月17日、要旨：『史学雑誌』117-1、史学会、2008年1月)、「内乱と統一の連鎖—14世紀後半～15世紀前半の日明関係—」(青山学院大学史学会大会、於：青山学院大学、2007年12月1日、要旨：『青山史学』26に掲載予定)、「朝鮮人から見た倭城」(朝鮮通信使400年記念国際シンポジウム「アジアのなかの日朝関係史」、於：九州国立博物館、2007年12月15日)、「境界論からみた外の浜と平泉」(第8回平泉文化フォーラム、於：奥州市文化会館(岩手県)、2008年2月2日)、「世界をかける石見銀」(石見銀山学講座公開フォーラム、於：あすてらす(島根県)、2008年3月22日)。

村田 雄二郎

③「一九〇二年東京“支那亡国記念会”史実訂正」(孔祥吉氏と共著、『歴史研究』2007-3、中国史学会、2007年5月、180～185頁)、「敵の敵は友?—中米関係100年」(『アメリカ太平洋研究』8、東京大学大学院総合文化研究科附属アメリカ太平洋地域研究センター、2008年3月、18～27頁)、④「企画の趣旨：小特集“近現代中国と東アジアの公共性—自由と統制をめぐる”」(『中国—社会と文化』22、中国社会文化学会、2007年6月、200～202頁)、⑦「東アジア国際秩序論再考—冊封—朝貢体制論覚書」(東アジア思想史国際シンポジウム、於：長春・東北師範大学、一般発表、中国語、2007年8月6-7日)、「清末国語問題と単一言語制—政治外交を中心に」(“周辺から見る中国”国際シンポジウム、於：上海・復旦大学、一般発表、中国語、2007年12月17～19日)、⑧『広辞苑 第六版』(岩波書店、2008年1月、3049頁のうち、中国史関連の項目の増補・執筆)。

毛里 和子

① *A New East Asia: Toward a Regional Community*, (Mori Kazuko & Hirano

Kenichiro, editors, National University of Singapore Press, 2007, 242p.)、③「現代アジア学への挑戦」(『アジア経済』48-12、アジア経済研究所、2007年、41～52頁)、「日中関係の再構築のために」(川島真編『中国の外交—自己認識と課題』、山川出版社、2007年、214～238頁)、「東アジア共同体」を設計する—現代アジア学へのチャレンジ」(山本武彦・天兒慧編『東アジア共同体の構築① 新たな地域形成』、岩波書店、2007年、1～34頁)、⑤「一国史から「地域史」へ—川島真・服部龍二編『東アジア国際政治史』—」(『東方』321、東方書店、2007年11月、20～24頁)。

初山 明

②『水経注疏訳注(渭水篇上)』(東洋文庫古代地域史研究班編、(財)東洋文庫、2008年3月、x+463+36頁)、⑤「山は隔て、川は結ぶ—『里耶発掘報告』を読む—湖南省文物考古研究所編著『里耶発掘報告』—」(『東方』315、東方書店、2007年5月、22～25頁)。

森安 孝夫

③「西ウイグル仏教のクロノロジー—ベゼクリクのグリェンヴェーデル編号第8窟(新編号第18窟)の壁画年代再考—」(『仏教学研究』62/63、龍谷仏教学会、2007年7月、1～45頁)、「唐代における胡と仏教的世界地理」(『東洋史研究』66-3、東洋史研究会、2007年12月、1～33頁)、「Epistolary Formulae of the Old Uighur Letters from Central Asia」(*Acta Asiatica* 94, The Tōhō Gakkai, 2008年2月, pp. 127-153)、「Chronology of West Uighur Buddhism: Re-examination of the Dating of the Wall-paintings in Grünwedel's Cave No. 8 (New: No. 18), Bezeklik」(P. Zieme編, *Aspects of Research into Central Asian Buddhism. In Memoriam Kōgi Kudara*, Silk Road Studies 16, Turnhout: Brepols, 2008年, pp. 191-227)、④「Introduction to the *Japanese Studies in the History of Pre-Islamic Central Asia*」(*Acta Asiatica* 94, The Tōhō Gakkai, 2008年2月, pp. iii-ix)、「Japanese Research on the History of the Sogdians along the Silk Road, Mainly from Sogdiana to China」(*Acta Asiatica* 94, The Tōhō Gakkai, 2008年2月, pp. 1-39)、⑤「研究会紹介6: 中央ユーラシア学研究会—中央アジア学の国際的な発表・交流の場—」(『東方』311、東方書店、2007年1月、14～15頁)。

柳澤 明

③「駐防城チチハルの風景—康熙50年代を中心に—」(細谷良夫編『清朝史研究の新たな地平—フィールドと文書を追って—』、山川出版社、2008年2月、

52～73頁)。

柳田 征司

②『高山寺資料叢書第二十四冊 高山寺経蔵典籍文書目録 完結篇』(高山寺典籍文書総合調査団編(築島裕他)、汲古書院、2007年12月、580頁)、③「上代日本語の母音連続」(『國學院雑誌』108-11、國學院大学、2007年11月、219～231頁)、④「資料研究の現在—抄物の場合—」(『日本語の研究』4-1、日本語学会、2008年1月、18～30頁)、⑤「金水敏著『日本語存在表現の研究』」(『国語と国文学』84-6、東京大学国語国文学会、2007年6月、80～83頁)、⑥「抄物目録稿(原典国書—日本書紀)下」(『抄物の研究』15、抄物研究会、2008年3月、1～40頁)、⑦「〔翻刻〕東京大学文学部国語研究室蔵『蒙求抄』(二)」(真嶋俊介・中谷恭子・中村辰之介と共編、『奈良大学大学院研究年報』12、2008年3月)。

柳谷 あゆみ

⑦「ザンギー朝ヌール・アッディーンの対スゲール、ディヤール・バクル政策」(日本中東学会第23回年次大会、2007年5月13日、要旨：日本中東学会第23回年次大会要旨集、日本中東学会ニューズレター No.111)、「東洋文庫におけるアラビア文字資料目録作成について」(イスラーム地域研究・上智大学拠点グループ2「東南アジア・イスラームの展開」2007年度第一回研究会、2007年6月30日、要旨：『「イスラーム地域研究」研究実績報告書(2007年度版)』、190頁)。

矢吹 晋

①『激辛書評で知る中国の政治経済の虚実』(日経BP、2007年5月、271頁)、②『朝河貫一とその時代』(花伝社、2007年12月、295頁)、③「笠井新也の卑弥呼・邪馬臺国論」(『國學院雑誌』108-9、國學院大学、2007年9月、16～27頁)、④『人間周恩来』(『週刊読書人』、読書人、2007年10月26日号)、「血肉の三冊」(『諸君!』、文芸春秋社、2007年10月号)、⑤「党大会人事分析」(時事通信ネット複眼中国、2007年4月3日号)、「温家宝訪日」(時事通信ネット複眼中国、2007年4月18日号)、「楊潔篪外相」(時事通信ネット複眼中国、2007年5月10日号)、「趙紫陽軟禁談話」(時事通信ネット複眼中国 2007年6月13日号)、「党大会常務委員予測」(時事通信ネット複眼中国 2007年8月16日号)、「党大会中央委員予測」(時事通信ネット複眼中国、2007年9月26日号)、「党大会年齢制限問題」(時事通信ネット複眼中国、2007年10月4日号)、「党大会習近平昇格」(時事通信ネット複眼中国、2007年10月31日号)、「党大会人事決定の内幕」(時事通信ネット複眼中国、2007年11月29日号)、「李克強の行政改革」(時事通信ネット複眼中国

国、2008年1月7日号)、「毒ギョーザ事件」(時事通信ネット e-world、2008年2月27日号)、「チベットの反乱」(時事通信ネット e-world、2008年3月26日号)、日中国交正常化35周年に寄せて」(『長陽』2007年夏、37~42頁)、「東アジア平和へ対話急げ」(『読売新聞』2007年7月25日)、「党大会座談会」(『読売新聞』2007年10月23日)、「党大会分析」(『京都新聞』2007年10月24日)、「党大会人事分析」(『国際貿易』2007年10月30日)。

山内 弘一

③「星湖李穡と文明の化」(『上智史学』52、上智大学史学会、2007年11月、67~98頁)、「朝鮮王朝後期の宗族制度の確立と祭祀説—四代奉祀と不遷の位をめぐる—(其之二)」(『漢文学解釋與研究』10、漢文学研究会、2008年3月、55~84頁)、「朝鮮王朝における儒教的婚礼の普及について—両班知識人の親迎論との関連から—」(上智大学文学部史学科編『歴史家の散歩道』、SUP上智大学出版会、2008年3月、199~224頁)、⑦「十九世紀前半朝鮮王朝の小中華意識と王権論—洪直弼の事例—」(中日学術論壇『東亜的王権与政治思想』、復旦大学、179~189頁、2007年9月)。

山内 民博

②『新潟県立図書館所蔵「金山政英旧蔵韓国・北朝鮮関係資料」仮目録』(山内民博編、新潟大学人文社会・教育科学系プロジェクト報告書、2008年2月、284頁)、③「朝鮮後期郷村社会と文字・文書—伝令と所志類をてがかりに」(『韓国朝鮮の文化と社会』6、韓国・朝鮮文化研究会、2007年10月、22~59頁)、「17世紀初頭の朝鮮・女真・日本—1609年蔚山府戸籍をてがかりに—」(『環東アジア研究センター年報』3、新潟大学環東アジア研究センター、2008年3月、27~37頁)。

山口 瑞鳳

③「西蔵大蔵経における深刻重大な誤訳—《阿字本不生》義を伝え損ねた大過失」(『成田山仏教研究要』31、成田山仏教研究所、2008年、1~62頁)。

山本 英史

①『清代中国の地域支配』(慶應義塾大学出版会、2007年5月、503頁)、③「官箴より見た地方官の民衆認識—明清時代を中心として—」(『大阪市立大学東洋史論叢』別冊特集号、大阪市立大学、2007年6月、173~186頁)、「清末民国期における郷村役の実態と地方文献—蘇州府を中心とする史料紹介—」(太田出・佐藤仁史編『太湖流域社会の歴史学的研究—地方文献と現地調査からのアプ

ローチ』、汲古書院、2007年11月、5～34頁）、「伝統地方志と新編地方志」（太田出・佐藤仁史編『太湖流域社会の歴史学的研究—地方文献と現地調査からのアプローチ』、汲古書院、2007年11月、309～311頁）、『『衙蠹』のいみするもの—清初の地方統治と胥役—』（細谷良夫編『清朝史研究の新たな地平—フィールドと文書を追って—』、山川出版社、2008年2月、140～162頁）。⑦「清初における浙江沿海地方の秩序形成と地方統治官」（文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成—寧波を焦点とする学際的創生—」文献資料研究部門「東アジアの地域形成と地方統治官：規範の普及と現実」班および東南アジア研究フォーラム（SEAF）共催ワークショップ「東アジア海域の地方統治」、2008年1月12日、於：広島）。

吉田 寅

②『原典現代中国キリスト教資料集—プロテスタント教会と中国政府の重要文献1950-2000』（富坂キリスト教センター編、新教出版社、2008年1月、xv+926頁）。

吉田 豊

③「トルファン学研究所所蔵のソグド語仏典と「菩薩」を意味するソグド語語彙の来源について—百濟康義先生のソグド語仏典研究を偲んで」（『仏教学研究』62・63合併号、龍谷仏教学会、2007年、46～87頁）、“On the taxation system of pre-Islamic Khotan” (*Acta Asiatica* 94, The Tōhō Gakkai, 2007, pp. 95-126)、 “Sogdian fragments discovered from the graveyard of Badamu” (『西域歴史語言研究集刊』1、中国・科学出版社、2007年、45～33頁）、 「ソグド人とトルコ人の接触に関するソグド語資料2件」（『西南アジア研究』67、西南アジア研究会、2007年、48～56頁）、⑦ “A Newly Recognized Manichaean Painting: Manichaean Daena from Japan” (A Hundred Years of Dunhuang, 1907-2007. Organized by the British Academy Jointly with the British Museum and British Library, 2007年5月18日）、 「史君墓の銘文とレリーフについて」（ソグド文化研究会、於：滋賀県立大学、2007年8月2日）、 “Indo-European Language Confronted with Altaic: A Case from Sogdo-Turkish Language Contact” (Conference on Indo-European Studies. Organized by Department of Linguistics, Kyoto University, 2007年9月12日）、 「ソグド人とソグド語・ソグド語文献」（人文研アカデミー、於：京都大学人文科学研究所、2007年10月11日）、 「大和文華館所蔵のマニ教絵画について」（中央アジア学フォーラム、於：大阪大学文学部、2007年12月22日）、 「シルクロードの商人が残した文献と図像を讀み解く」（京都大学市民講座、於：京都大学、2008年2月16日）。

吉水 千鶴子

②「トゥカン『一切宗義』序章「インドの思想と仏教」(川崎信定氏と共著、『西藏仏教宗義研究』8、(財)東洋文庫、2007年3月、202頁)。

③“Causal efficacy and spatiotemporal restriction: An analytical study of the Sautrāntika philosophy.” (*Pramāṇakīrti. Papers dedicated to Ernst Steinkellner on the occasion of his 70th birthday*, Part 2. B. Kellner, H. Krasser, H. Lasic, M.T. Much, H. Tauscher (eds.), Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde 70. 2. Wien 2007, pp.1049–1078.)。

Ⅳ 業 務 報 告

1. 総 務 報 告

①会議事項

(理 事 会)

第333回 開催日 平成19年 6月 5日 (火曜日)
出席者 斯波義信、山川尚義、草原克豪、佐藤次高、田仲一成、
鶴見尚弘、中根千枝、榎原 稔、若井恒雄
委任状 石井米雄、岩崎寛彌、西田龍雄、原 實

第334回 開催日 平成19年 6月 5日 (火曜日)
出席者 斯波義信、山川尚義、大崎 仁、草原克豪、佐藤次高、
田仲一成、鶴見尚弘、中根千枝、濱下武志、榎原 稔、
三木繁光
委任状 石井米雄、岩崎寛彌、原 實、福澤 武

第335回 開催日 平成20年 2月19日 (火曜日)
出席者 榎原 稔、山川尚義、石井米雄、大崎 仁、草原克豪、
佐藤次高、斯波義信、田仲一成、濱下武志、原 實、
福澤 武、三木繁光
委任状 石井米雄、岩崎寛彌、鶴見尚弘

(評 議 員 会)

第157回 開催日 平成19年 6月 5日 (火曜日)
出席者 梅村 坦、大崎 仁、佐竹昭広、濱下武志、平野健一郎
委任状 安西祐一郎、池端雪浦、尾池和夫、岸本美緒、後藤 明、
小宮山宏、白井克彦、福澤 武、間野英二

第158回 開催日 平成20年 2月19日 (火曜日)
出席者 荒蒔康一郎、岸本美緒、久保正彰、後藤 明、平野健一郎、
増田信行
委任状 有馬朗人、安西祐一郎、梅村 坦、尾池和夫、小宮山宏、

佐竹昭弘、白井克彦、瀬谷博道、西田龍雄、間野英二、
Wang Gungwu

(東洋学連絡委員会)

- 前期 開催日 平成19年5月22日(火曜日)
出席者 斯波義信(委員長)、梅原 郁、尾崎 康、興膳 宏、
竺沙雅章、中根千枝、間野英二、森本公誠
議 題 1. 平成18年度財団法人東洋文庫事業報告について
2. 平成19年度財団法人東洋文庫事業計画について
3. その他
- 後期 開催日 平成20年2月5日(火曜日)
出席者 榎原 稔(委員長)、斯波義信、石井米雄、尾崎 康、
興膳 宏、間野英二、森本公誠
議 題 1. 平成19年度財団法人東洋文庫事業中間報告について
2. 平成20年度財団法人東洋文庫事業計画案について
3. その他

②総務・広報事項

- ・当文庫ホームページを大幅に改訂すると共に「友の会」を発足し、「友の会だより」を発刊した。
- ・特別展示会の開催、文京区等の行事への参加及び関係する広報誌への協力等を行い、広報普及活動を図った。

③設備・営繕事項

- ・勤務時間外の出入館をカード方式に切り替え、土日及び勤務時間外にも当文庫施設を利用できるようにした。

2. 人 事 報 告

i. 役員

年月日	役職名	氏名	区分	備考
19. 6. 5	理事長	斯波義信	退任	
〃	〃	榎原稔	就任	

ii. 職員異動

年月日	役職名	氏名	区分	備考
18. 3. 31	研究員	粕谷元	退任	
18. 3. 31	〃	塩沢裕仁	〃	
18. 3. 31	〃	西尾寛治	〃	
18. 3. 31	〃	長谷川誠夫	〃	
18. 3. 31	〃	松永泰行	〃	
18. 3. 31	研究員(兼任)	磯貝健一	〃	
18. 3. 31	〃	梅村坦	〃	
18. 3. 31	〃	鈴木立子	〃	
18. 3. 31	〃	土田哲夫	〃	
18. 3. 31	〃	深沢眞二	〃	
19. 4. 23	総務課長	青木雄二	就職	
19. 6. 30	総務課長	光田憲雄	退職	
19. 4. 1	研究員	多田狷介	委嘱	
19. 5. 29	〃	堀敏一	逝去	
19. 6. 24	〃	中嶋敏	〃	
19. 10. 1	職員	藤代和卓	就職	
19. 10. 31	常勤嘱託	田谷恵津子	退職	
19. 10. 15	研究員	宇津木章	逝去	
19. 11. 1	〃	大澤肇	委嘱	
19. 12. 12	〃	衛藤藩吉	逝去	
20. 3. 31	司書	田中麻衣子	転任	*
20. 3. 31	〃	田中亮之介	〃	*
20. 3. 31	〃	沢崎京子	〃	*

(*印は国立国会図書館支部東洋文庫職員)

iii. 客員研究員異動

年月日	役職名	氏名	区分	備考
19. 4. 1	研究員(客員)	磯貝健一	委嘱	
〃	〃	梅村坦	〃	
〃	〃	粕谷元	〃	
〃	〃	塩沢裕仁	〃	
〃	〃	鈴木立子	〃	
〃	〃	土田哲夫	〃	
〃	〃	西尾寛治	〃	

年月日	役職名	氏名	区分	備考
19. 4. 1	研究員(客員)	長谷川 誠 夫	委 嘱	
〃	〃	深 沢 眞 二	〃	
〃	〃	松 永 泰 行	〃	
19. 6. 1	〃	武 内 紹 人	〃	
19. 11. 1	〃	片 山 剛 樹	〃	
20. 2. 1	〃	重 近 啓 樹	〃	
〃	〃	本 野 英 一	〃	
20. 3. 31	〃	杉 山 正 明	退 任	

3. 会計報告

貸借対照表

平成20年3月31日現在

(単位:円)

科 目	当年度	前年度	増減
I 資産の部			
1. 流動資産			
現金預金	2,681,579	1,995,457	686,122
前払費用	2,856,507	0	2,856,507
未収金	20,081,023	19,718,445	362,578
仮払金	5,400,000	0	5,400,000
商 品	5,655,865	2,586,287	3,069,578
流動資産合計	36,674,974	24,300,189	12,374,785
2. 固定資産			
(1) 基本財産			
図書資料	1,041,708,012	1,041,708,012	0
土地	110,494	110,494	0
建物	0	487,034,941	△ 487,034,941
構築物	0	2,689,339	△ 2,689,339
保証金	50,000	50,000	0
投資有価証券	2,841,936,643	2,841,454,301	482,342
預金	115,322	114,822	500
基本財産合計	3,883,920,471	4,373,161,909	△ 489,241,438
(2) 特定資産			
退職給付引当資産	25,950,488	54,697,345	△ 28,746,857
特定資産合計	25,950,488	54,697,345	△ 28,746,857
(3) その他固定資産			
建物	457,692,206	0	457,692,206
構築物	1,344,669	0	1,344,669
什器備品	27,049,400	25,495,722	1,553,678
図書資料	110,184,981	66,154,836	44,030,145
ソフトウェア	2,648,743	3,220,753	△ 572,010
電話加入権	364,000	364,000	0
建物等修繕引当資産	63,077,400	62,989,523	87,877
運営調整積立資産	36,387,985	39,339,716	△ 2,951,731
その他固定資産合計	698,749,384	197,564,550	501,184,834
固定資産合計	4,608,620,343	4,625,423,804	△ 16,803,461
資産合計	4,645,295,317	4,649,723,993	△ 4,428,676
II 負債の部			
1. 流動負債			
未払金	2,684,025	12,420,425	△ 9,736,400
預り金	1,316,150	1,726,548	△ 410,398
賞与引当金	6,496,053	6,646,098	△ 150,045
流動負債合計	10,496,228	20,793,071	△ 10,296,843
2. 固定負債			
退職給付引当金	25,950,488	54,697,345	△ 28,746,857
固定負債合計	25,950,488	54,697,345	△ 28,746,857
負債合計	36,446,716	75,490,416	△ 39,043,700
III 正味財産の部			
1. 指定正味財産			
寄付金等	202,110,494	202,110,494	0
指定正味財産合計	202,110,494	202,110,494	0
(うち基本財産への充当額)	(202,110,494)	(202,110,494)	
2. 一般正味財産	4,406,738,107	4,372,123,083	34,615,024
(うち基本財産への充当額)	(3,681,809,977)	(4,171,051,415)	(△489,241,438)
(うち特定資産への充当額)	(0)	(0)	0
正味財産合計	4,608,848,601	4,574,233,577	34,615,024
負債及び正味財産合計	4,645,295,317	4,649,723,993	△ 4,428,676

正味財産増減計算書

平成19年4月1日から平成20年3月31日まで

(単位:円)

科 目	当年度	前年度	増減
I 一般正味財産増減の部			
1. 経常増減の部			
(1) 経常収益			
基本財産運用益	57,186,203	56,656,621	529,582
特定資産運用益	45,882	53,843	△ 7,961
受取寄付金			0
維持会費収入	40,200,000	35,200,000	5,000,000
寄付金収入	55,800,000	59,445,854	△ 3,645,854
受取会費	485,000	15,000	470,000
受取分担金	25,160,000	12,000,000	13,160,000
事業収益	7,741,142	5,895,341	1,845,801
受取補助金等	113,240,000	111,770,000	1,470,000
雑収益	659,565	536,400	123,165
経常収益計	300,517,792	281,573,059	18,944,733
(2) 経常費用			
事業費	191,140,763	97,697,810	93,442,953
調査研究費	28,193,658	26,399,004	1,794,654
資料収集・整理費	15,484,435	18,947,182	△ 3,462,747
研究資料出版費	18,075,810	19,563,196	△ 1,487,386
普及活動費	12,907,396	14,261,133	△ 1,353,737
学術情報提供費	9,343,562	14,344,442	△ 5,000,880
地域研究プログラム費	11,733,133	4,182,853	7,550,280
人件費	41,545,453	0	41,545,453
給料手当	34,951,451	0	34,951,451
賞与引当金繰入	1,786,739	0	1,786,739
退職給付費用	1,012,954	0	1,012,954
福利厚生費	3,794,309	0	3,794,309
事務費	53,857,316	0	53,857,316
設備保守修繕費	6,760,324	0	6,760,324
水道光熱費	5,613,510	0	5,613,510
謝金	1,518,572	0	1,518,572
減価償却費	31,135,718	0	31,135,718
諸雑費	8,829,192	0	8,829,192
管理費	77,163,604	157,464,465	△ 80,300,861
人件費	59,214,313	93,041,537	△ 33,827,224
役員報酬	9,070,000	14,281,818	△ 5,211,818
給料手当	36,888,785	58,980,116	△ 22,091,331
賞与引当金繰入	4,709,314	6,646,098	△ 1,936,784
退職給付費用	1,514,109	2,552,938	△ 1,038,829
福利厚生費	7,032,105	10,580,567	△ 3,548,462
事務費	17,949,291	64,422,928	△ 46,473,637
設備保守修繕費	2,253,442	21,648,221	△ 19,394,779
水道光熱費	1,871,170	6,768,526	△ 4,897,356
謝金	2,067,390	5,739,170	△ 3,671,780
減価償却費	8,326,428	20,600,905	△ 12,274,477
諸雑費	3,430,861	9,666,106	△ 6,235,245
経常費用計	268,304,367	255,162,275	13,142,092
当期経常増減額	32,213,425	26,410,784	5,802,641
2. 経常外増減の部			
(1) 経常外収益			
固定資産受贈益	2,634,188	1,439,109	1,195,079
過年度修正益	0	20,612,912	△ 20,612,912
経常外収益計	2,634,188	22,052,021	△ 19,417,833
(2) 経常外費用			
固定資産除却損	162,589	0	162,589
過年度減価償却	0	699,841,437	△ 699,841,437
過年度修正損	0	63,949,668	△ 63,949,668
経常外費用計	162,589	763,791,105	△ 763,628,516
当期経常外増減額	2,471,599	△ 741,739,084	744,210,683
税引前当期一般正味財産増減額	34,685,024	△ 715,328,300	750,013,324
法人税、住民税及び事業税	70,000	70,000	0
当期一般正味財産増減額	34,615,024	△ 715,398,300	750,013,324
一般正味財産期首残高	4,372,123,083	5,087,521,383	△ 715,398,300
一般正味財産期末残高	4,406,738,107	4,372,123,083	34,615,024
II 指定正味財産増減の部			
当期指定正味財産増減額	0	0	0
指定正味財産期首残高	202,110,494	202,110,494	0
指定正味財産期末残高	202,110,494	202,110,494	0
III 正味財産期末残高	4,608,848,601	4,574,233,577	34,615,024

財務諸表に対する注記

1. 重要な会計方針

(1) 有価証券の評価基準及び評価方法

満期保有目的有価証券

償却原価法（定額法）を採用している。

(2) 棚卸資産の評価基準及び評価方法

最終仕入原価法を採用している。

(3) 固定資産の減価償却方法

① 有形固定資産

定額法を採用している。

なお、主な耐用年数は次のとおりである。

建物 30～50年

什器備品 3～10年

平成19年度の法人税法の改正に伴い、当期より平成19年4月1日以降に取得した有形固定資産については、改正後の法人税法に基づく減価償却の方法に変更している。

又、平成19年3月31日以前に取得した有形固定資産については、改正前の法人税法に基づく減価償却の方法の適用により取得価額の5%に到達した事業年度のよく事業年度より、取得価額の5%相当額と備忘価額との差額を5年間にわたり均等償却し、減価償却費に含めて計上している。

これによる当財務諸表への影響は軽微である。

② 無形固定資産

定額法を採用している。

(4) 引当金の計上基準

① 賞与引当金

役員及び職員の賞与金の支払いに備えて、賞与支給見込額のうち当事業年度負担額を計上している。

② 退職給付引当金

役員及び職員の退職給付に備えるため、当事業年度における退職給付債務に基づき、当事業年度末において発生していると認められる額を計上している。

(5) 消費税等の会計処理

税込方式を採用している。

2. 基本財産及び特定資産の増減額及びその残高

基本財産及び特定資産の増減額及びその残高は、次のとおりである。

(単位：円)

科 目	前期末残高	当期増加額	当期減少額	当期末残高
基本財産				
図書資料	1,041,708,012	—	—	1,041,708,012
土地	110,494	—	—	110,494
建物 (注)	487,034,941	—	487,034,941	0
構築物 (注)	2,689,339	—	2,689,339	0
保証金	50,000	—	—	50,000
有価証券	2,841,454,301	2,982,296	2,499,954	2,841,936,643
預金	114,822	2,500,706	2,500,206	115,322
小計	4,373,161,909	5,483,002	494,724,440	3,883,920,471
特定資産				
退職給付引当資産	54,697,345	24,527,063	53,273,920	25,950,488
小計	54,697,345	24,527,063	53,273,920	25,950,488
合計	4,427,859,254	30,010,065	547,998,360	3,909,870,959

(注) 建物及び構築物については、立替の為「基本財産」から「その他固定資産」へ振替えております。

3. 基本財産及び特定資産の財源等の内訳

基本財産及び特定資産の財源等の内訳は、次のとおりである。(単位：円)

科 目	当期末残高	(うち指定正味財産からの充当額)	(うち一般正味財産からの充当額)	(うち負債に対応する額)
基本財産				
図書資料	1,041,708,012	—	(1,041,708,012)	—
土地	110,494	(110,494)	—	—
保証金	50,000	—	(50,000)	—
有価証券	2,841,936,643	(202,000,000)	(2,639,936,643)	—
預金	115,322	—	(115,322)	—
小計	3,883,920,471	(202,110,494)	(3,681,809,977)	—
特定資産				
退職給付引当資産	25,950,488	—	—	(25,950,488)
小計	25,950,488	—	—	(25,950,488)
合 計	3,909,870,959	(202,110,494)	(3,681,809,977)	(25,950,488)

4. 固定資産の取得価額、減価償却累計額及び当期末残高

固定資産の取得価額、減価償却累計額及び当期末残高は、次のとおりである。(単位：円)

科 目	取得価額	減価償却累計額	当期末残高
建物	1,137,126,157	679,433,951	457,692,206
構築物	26,893,390	25,548,721	1,344,669
什器備品	80,067,295	53,017,895	27,049,400
ソフトウェア	3,483,165	834,422	2,648,743
合 計	1,247,570,007	758,834,989	488,735,018

5. 満期保有目的の債券の内訳ならびに帳簿価額、時価及び評価損益

満期保有目的の債券の内訳ならびに帳簿価額、時価及び評価損益は次のとおりである。(単位：円)

科 目	帳簿価額	時 価	評 価 損 益
国債	2,499,687	2,513,825	14,138
三菱自動車工業	299,436,956	297,000,000	△ 2,436,956
東京三菱インターナショナルクレジット債	1,000,000,000	1,000,350,000	350,000
三菱セキュリティーズインターナショナルクレジット債	500,000,000	478,265,000	△ 21,735,000
三菱信託銀行ユーロ円建永久劣後債	500,000,000	501,910,000	1,910,000
三菱UFJセキュリティーズインターナショナル	500,000,000	433,835,000	△ 66,165,000
共同発行市場公募地方債	40,000,000	41,186,400	1,186,400
合 計	2,841,936,643	2,755,060,225	△ 86,876,418

6. 補助金の内訳並びに交付者、当期の増減額及び残高
 補助金の内訳並びに交付者、当期の増減額及び残高は次のとおりである。

補助金等の名称	交付者	前期末残高	当期増加額	当期減少額	当期末残高	貸借対照表上の記載区分
一般会計						
補助金						
科学研究費補助金 (特定奨励費)	文部科学省	0	110,000,000	110,000,000	0	—
科学研究費補助金	日本学術振興会	0	3,240,000	3,240,000	0	
合 計		0	113,240,000	113,240,000	0	—

7. 退職給付関係

- (1) 採用している退職給付制度の概要

確定給付型の制度として退職一時金制度をもうけている。

- (2) 退職給付債務及びその内訳

退職給付 Δ 25,950,488 円

退職給付 Δ 25,950,488

- (3) 退職給付費用に関する事項

勤務費用 2,527,063 円

退職給付費用 2,527,063

- (4) 退職給付債務等の計算の基礎に関する事項

退職給付債務の計算に当たっては退職一時金制度に基づく期末自己都合要支給額を基礎として計算している。

8. その他

事業費と管理費のいずれにも共通して発生する費用については、当期より事業費と管理費をより適切に表示するため、配賦基準については見直しを行っています。これにより管理費は95,402,769円減少し、事業費が同額増加している。

収支計算書

平成19年4月1日から平成20年3月31日まで

(単位:円)

科 目	予算額	決算額	増 減	備 考
I 事業活動収支の部				
1. 事業活動収入				
基本財産運用収入	56,300,000	56,703,361	△ 403,361	
維持会費収入	40,200,000	40,200,000	0	
寄付金収入	55,000,000	55,800,000	△ 800,000	
会費収入	500,000	485,000	15,000	
分担金収入	20,000,000	25,160,000	△ 5,160,000	
研究活動収入	7,000,000	7,741,142	△ 741,142	
補助金等収入	110,000,000	113,240,000	△ 3,240,000	
雑収入	500,000	523,419	△ 23,419	
事業活動収入計	289,500,000	299,852,922	△ 10,352,922	
2. 事業活動支出				
事業費	223,998,000	205,054,391	18,943,609	
調査研究費	34,000,000	28,193,658	5,806,342	
資料収集・整理費	41,000,000	47,412,480	△ 6,412,480	
研究資料出版費	21,500,000	18,075,810	3,424,190	
普及活動費	13,500,000	12,907,396	592,604	
学術情報提供費	15,500,000	12,413,140	3,086,860	
地域研究プログラム費	20,000,000	22,797,810	△ 2,797,810	
人件費	47,538,000	40,532,499	7,005,501	
事務費	30,960,000	22,721,598	8,238,402	
管理費	59,802,000	98,666,987	△ 38,864,987	
人件費	50,762,000	88,974,124	△ 38,212,124	
事務費	9,040,000	9,692,863	△ 652,863	
事業活動支出計	283,800,000	303,721,378	△ 19,921,378	
事業活動収支差額	5,700,000	△ 3,868,456	9,568,456	
II 投資活動収支の部				
1. 投資活動収入				
投資有価証券満期償還収入	2,500,000	2,500,000	0	
退職給付積立資産取崩収入	0	31,273,920	△ 31,273,920	
運営調整積立資産取崩収入	0	33,000,000	△ 33,000,000	
投資活動収入計	2,500,000	66,773,920	△ 64,273,920	
2. 投資活動支出				
固定資産取得支出	0	8,322,233	△ 8,322,233	
投資有価証券取得支出	2,500,000	2,500,000	0	
退職給付引当資産取得支出	5,000,000	2,481,181	2,518,819	
運営調整積立資産取得支出	0	30,000,000	△ 30,000,000	
投資活動支出計	7,500,000	43,303,414	△ 35,803,414	
投資活動収支差額	△ 5,000,000	23,470,506	△ 28,470,506	
III 財務活動収支の部				
1. 財務活動収入	30,000,000	0	30,000,000	
2. 財務活動支出	0	0	0	
財務活動収支差額	0	0	0	
IV 予備費支出	700,000	0	700,000	
当期収支差額	0	19,602,050	△ 19,602,050	
前期繰越収支差額	920,831	920,831	0	
次期繰越収支差額	920,831	20,522,881	△ 19,602,050	

収支計算書に対する注記

1. 資金の範囲

資金の範囲には、現金預金、前払費用、未収金、仮払金、未払金、預り金、賞与引当金を含めて
いる。

なお、前期末残高及び当期末残高は、下記2に記載するとおりである。

2. 次期繰越収支差額に含まれる資産及び負債の内訳

(単位：円)

科 目	前期末残高	当期末残高
現金預金	1,995,457	2,681,579
前払費用	0	2,856,507
未収金	19,718,445	20,081,023
仮払金	0	5,400,000
合 計	21,713,902	31,019,109
未払金	12,420,425	2,684,025
預り金	1,726,548	1,316,150
賞与引当金	6,646,098	6,496,053
合 計	20,793,071	10,496,228
次期繰越収支差額	920,831	20,522,881

V 役 職 員 名 簿

平成20年3月31日現在の財団法人東洋文庫の役職員は、以下の通りである。

1. 役 員

役 職 名	氏 名	現 職
理 事 長	榎 原 稔	東洋文庫理事長 三菱商事株式会社相談役
専務理事	山 川 尚 義	東洋文庫専務理事
理 事	石 井 米 雄	東洋文庫研究顧問 人間文化研究機構機構長 京都大学名誉教授
〃	岩 崎 寛 彌	東山農事株式会社取締役社長
〃	大 崎 仁	人間文化研究機構理事
〃	草 原 克 豪	拓殖大学副学長
〃	佐 藤 次 高	東洋文庫研究部長 早稲田大学教授 東京大学名誉教授
	斯 波 義 信	東洋文庫特別顧問 日本学士院会員 大阪大学名誉教授
〃	田 仲 一 成	東洋文庫図書部長 日本学士院会員 東京大学名誉教授
〃	鶴 見 尚 弘	山梨県立大学学長 横浜国立大学名誉教授
〃	中 根 千 枝	日本学士院会員第1部部长 東京大学名誉教授
〃	濱 下 武 志	東洋文庫図書顧問 龍谷大学教授
〃	原 實	日本学士院会員 東京大学名誉教授
〃	福 澤 武	三菱地所株式会社相談役
〃	三 木 繁 光	株式会社三菱東京 UFJ 銀行取締役会長
監 事	岡 野 理一郎	東洋文庫監事
〃	東 條 和 彦	三菱金曜会事務局長

2. 評議員

役職名	氏名	現職
評議員	荒 蒔 康一郎	キリンホールディングス株式会社代表取締役会長
〃	有 馬 朗 人	科学技術館館長 武蔵学園長 東京大学名誉教授
〃	安 西 祐一郎	慶應義塾塾長
〃	梅 村 坦	中央大学教授
〃	尾 池 和 夫	京都大学総長
〃	岸 本 美 緒	お茶の水女子大学教授
〃	久 保 正 彰	日本学士院院長 東京大学名誉教授
〃	後 藤 明	東洋大学教授 東京大学名誉教授
〃	小宮山 宏	東京大学総長
〃	佐 竹 昭 広	京都大学名誉教授
〃	白 井 克 彦	早稲田大学総長
〃	瀬 谷 博 道	旭硝子株式会社相談役
〃	西 田 龍 雄	日本学士院院長 京都大学名誉教授
〃	平 野 健一郎	早稲田大学教授 東京大学名誉教授
〃	増 田 信 行	三菱重工業株式会社相談役
〃	間 野 英 二	龍谷大学教授 京都大学名誉教授
〃	Wang Gungwu	シンガポール大学東亜研究所長

3. 東洋学連絡委員会委員

役職名	氏名	現職
委員長	檜 原 稔	東洋文庫理事長 三菱商事株式会社相談役
〃	石 井 米 雄	東洋文庫特別顧問 人間文化研究機構機構長 京都大学名誉教授
〃	梅 原 郁	京都大学名誉教授
〃	尾 崎 康	慶應義塾大学名誉教授

役職名	氏名	現職
委員	興善宏	京都国立博物館館長 京都大学名誉教授
〃	斯波義信	東洋文庫特別顧問 日本学士院会員 大阪大学名誉教授
〃	竺沙雅章	大谷大学教授 京都大学名誉教授
〃	中根千枝	日本学士院第1部部長 東京大学名誉教授
〃	西田龍雄	日本学士院会員 京都大学名誉教授
〃	間野英二	龍谷大学教授 京都大学名誉教授
〃	御牧克己	京都大学教授
〃	森本公誠	東大寺長老

4. 名誉研究員

氏名	所属機関
BLUSSE, Leonard	Universite Leiden
BARY, W. T. de	Columbia University
ELVIN, Mark	The Australian National University
FRANKE, H.	Ludwig-Maximilians-Universitat Munchen
HUMPHREYS, R. Stephn	University of California
GERNET, J.	Collège de France
KADIVAR, Mohsen	Tarbiat Modarres University
韓永愚	ソウル大学
黄寛重	中央研究院歴史語言研究所
KYCHANOV, E.I.	Saint-Petersburg Branch of the Institute of Oriental Studies of Russian Academy of Sciences
LANCIOTTI, Lionelio	University of Naples
李伯重	精華大学人文社会科学学院経済学研究所
McDERMOTT, Joseph P.	St. Johns college, Cambridge University
RAFEQ, Abdul-Karim	The College of William and Mary Department of History
ŞAHIN, İlhan	Kirgizistan-Turkiye Manas Universitiesi
WANG, Gungwu	National University of Singapore

5. 職員・研究員

部 名	職 名	氏 名	現 職 (*印は国立国会図書館支部東洋文庫職員)
	専務理事 特別顧問	山 川 尚 義 斯 波 義 信	(総務部長兼務)
総務部	課 長	青 木 雄 二	
〃	参 事	橘 伸 子	
〃	〃	藤 村 由美子	
〃	〃	柴 代 淳 子	
〃	〃	牧 祐 紀子	
〃	〃	藤 代 和 卓	
〃	〃	長谷川 茂 広	
図書部	部 長	田 仲 一 成	
〃	東洋文庫長	渡 辺 幸 秀	*
〃	閲覧係長	中善寺 慎	*
〃	司 書	桜 井 徹	
〃	〃	山 村 義 照	
〃	〃	沢 崎 京 子	*
〃	〃	篠 崎 陽 子	
〃	〃	田 中 亮之介	*
〃	〃	本 田 麻衣子	*
研究部	部 長	佐 藤 次 高	(早稲田大学教授)
〃	研 究 顧 問	石 井 米 雄	(人間文化研究機構機構長)
〃	研 究 員	荒 松 雄	(東京大学名誉教授)
〃	〃	磯 貝 健 一	(大手前大学講師)
〃	〃	市 古 宙 三	(お茶の水女子大学名誉教授)
〃	〃	大 江 孝 男	(東京外国語大学名誉教授)
〃	〃	太 田 幸 男	(東京学芸大学名誉教授)
〃	〃	大 澤 肇	現代中国研究資料室研究員
〃	〃	岡 田 英 弘	(東京外国語大学名誉教授)
〃	〃	風 間 喜代三	(東京大学名誉教授)
〃	〃	粕 谷 元	(日本大学講師)
〃	〃	菊 池 英 夫	(元中央大学教授)
〃	〃	草 野 靖	(元熊本大学教授)

部 名	職 名	氏 名	現 職
研究部	研 究 員	酒 井 憲 二	(調布学園短期大学名誉教授)
〃	〃	佐 竹 昭 広	(京都大学名誉教授)
〃	〃	塩 沢 裕 仁	(法政大学講師)
〃	〃	斯 波 義 信	東洋文庫特別顧問
〃	〃	志 茂 碩 敏	
〃	〃	末 成 道 男	
〃	〃	瀧 下 彩 子	
〃	〃	多 田 狷 介	(日本女子大学名誉教授)
〃	〃	田 仲 一 成	(東京大学名誉教授)
〃	〃	田 中 時 彦	(東海大学名誉教授)
〃	〃	田 村 晃 一	(青山学院大学名誉教授)
〃	〃	竺 沙 雅 章	(京都大学名誉教授)
〃	〃	千 葉 暎	(桐朋学園大学名誉理事長)
〃	〃	土 肥 義 和	(国学院大学名誉教授)
〃	〃	鳥 海 靖	(東京大学名誉教授)
〃	〃	永 積 洋 子	(元東京大学教授)
〃	〃	西 尾 寛 治	(立教大学非常勤講師)
〃	〃	西 田 龍 雄	(京都大学名誉教授)
〃	〃	長谷川 誠 夫	(千葉工業大学講師)
〃	〃	濱 島 敦 俊	(暨南国際大学教授)
〃	〃	本 庄 比 佐 子	
〃	〃	松 丸 道 雄	(東京大学名誉教授)
〃	〃	松 村 潤	(日本大学名誉教授)
〃	〃	丸 尾 常 喜	東洋文庫研究員
〃	〃	柳 谷 あゆみ	東洋文庫イスラーム地域研究資料室研究員
〃	〃	矢 吹 晋	(横浜市立大学名誉教授)
〃	〃	山 口 瑞 鳳	(東京大学名誉教授)
〃	〃	山 崎 元 一	
〃	〃	吉 田 寅	(元立正大学教授)
〃	〃	和 田 博 徳	(慶應義塾大学名誉教授)
〃	〃	渡 辺 紘 良	(獨協医科大学名誉教授)
〃	研究員(兼任)	飯 島 武 次	駒沢大学教授
〃	〃	石 橋 崇 雄	国士館大学教授

部 名	職 名	氏 名	現 職
研究部	研究員(兼任)	内 山 雅 生	宇都宮大学教授
〃	〃	梅 村 坦	中央大学教授
〃	〃	小 名 康 之	青山学院大学教授
〃	〃	糟 谷 憲 一	一橋大学教授
〃	〃	加 藤 直 人	日本大学教授
〃	〃	川 崎 信 定	東洋大学教授
〃	〃	岸 本 美 緒	東京大学教授
〃	〃	窪 添 慶 文	お茶の水女子大学教授
〃	〃	後 藤 明	東洋大学教授
〃	〃	小 松 久 男	東京大学教授
〃	〃	鈴 木 立 子	愛知大学教授
〃	〃	C.A. ダニエルス	東京外国語大学アジア・アフリカ 言語文化研究所教授
〃	〃	土 田 哲 夫	中央大学教授
〃	〃	中 兼 和津次	青山学院大学教授
〃	〃	長 沢 栄 治	東京大学東洋文化研究所教授
〃	〃	永 田 雄 三	明治大学教授
〃	〃	中 見 立 夫	東京外国語大学アジア・アフリカ 言語文化研究所教授
〃	〃	八尾師 誠	東京外国語大学教授
〃	〃	濱 下 武 志	京都大学東南アジア研究センター教授
〃	〃	林 佳世子	東京外国語大学教授
〃	〃	平 野 健一郎	早稲田大学教授
〃	〃	弘 末 雅 士	立教大学教授
〃	〃	深 沢 眞 二	和光大学准教授
〃	〃	古 屋 昭 弘	早稲田大学教授
〃	〃	三 浦 徹	お茶の水女子大学教授
〃	〃	御 牧 克 己	京都大学教授
〃	〃	毛 里 和 子	早稲田大学教授
〃	〃	昀 山 明	駒澤大学教授
〃	〃	柳 澤 明	人間文化研究機構
〃	〃	吉 田 光 男	東京大学教授

6. ■客員研究員■

部 名	職 名	氏 名	現 職
研究部	客員研究員	青 山 瑠 妙	早稲田大学准教授
〃	〃	秋 葉 淳	千葉大学准教授
〃	〃	浅 野 秀 剛	千葉市美術館学芸課長
〃	〃	天 児 慧	早稲田大学教授
〃	〃	新 井 政 美	東京外国語大学教授
〃	〃	荒 川 正 晴	大阪大学教授
〃	〃	飯 尾 秀 幸	専修大学教授
〃	〃	池 田 温	創価大学名誉教授
〃	〃	池 田 美佐子	名古屋商科大学教授
〃	〃	伊 香 俊 哉	都留文科大学教授
〃	〃	石 塚 晴 通	北海道大学名誉教授
〃	〃	磯 貝 健 一	京都外国語大学国際平和言語研究所研究員
〃	〃	井 上 和 枝	鹿児島国際大学教授
〃	〃	井 上 和 人	奈良文化財研究所企画調整部国際遺跡研究室長
〃	〃	今 西 祐一郎	九州大学教授
〃	〃	上 野 英 二	成城大学教授
〃	〃	内 田 知 行	大東文化大学教授
〃	〃	梅 田 博 之	麗澤大学名誉教授
〃	〃	梅 原 郁	京都大学名誉教授
〃	〃	梅 村 坦	中央大学教授
〃	〃	大河原 知 樹	東北大学准教授
〃	〃	大 澤 正 昭	上智大学教授
〃	〃	太 田 信 宏	東京外国語大学准教授
〃	〃	大 谷 俊 太	奈良女子大学准教授
〃	〃	丘 山 新	東京大学東洋文化研究所教授
〃	〃	小 川 裕 充	東京大学東洋文化研究所教授
〃	〃	奥 村 哲	首都大学東京教授
〃	〃	粕 谷 元	日本大学講師
〃	〃	片 桐 一 男	青山学院大学名誉教授
〃	〃	片 山 章 雄	東海大学教授
〃	〃	片 山 剛	大阪大学教授
〃	〃	加 藤 弘 之	神戸大学教授

部 名	職 名	氏 名	現 職
研究部	客員研究員	金 丸 裕 一	立命館大学教授
〃	〃	辛 島 昇 一	大正大学特任教授
〃	〃	川 井 伸 一	愛知大学教授
〃	〃	川 島 真	東京大学大学院准教授
〃	〃	貴 志 俊 彦	神奈川大学教授
〃	〃	北 本 朝 展	国立情報学研究所准教授
〃	〃	金 鳳 珍	北九州市立大学教授
〃	〃	楠 木 賢 道	筑波大学准教授
〃	〃	久 保 亨	信州大学教授
〃	〃	熊 本 裕	東京大学教授
〃	〃	黒 田 卓	東北大学准教授
〃	〃	気賀澤 保 規	明治大学教授
〃	〃	巖 善 平	桃山学院大学教授
〃	〃	胡 潔	名古屋大学准教授
〃	〃	黄 東 蘭	愛知県立大学准教授
〃	〃	興 栢 一 郎	神田外語大学准教授
〃	〃	小 島 芳 孝	金沢学院大学教授
〃	〃	小 杉 泰	京都大学教授
〃	〃	小 浜 正 子	日本大学教授
〃	〃	早乙女 雅 博	東京大学准教授
〃	〃	桜 井 由 躬 雄	前東京大学教授
〃	〃	佐 藤 慎 一	東京大学教授
〃	〃	佐 藤 宏	一橋大学教授
〃	〃	塩 沢 裕 仁	法政大学講師
〃	〃	重 近 啓 樹	静岡大学教授
〃	〃	設 楽 國 廣	立教大学教授
〃	〃	部 勇 造	東京大学教授
〃	〃	嶋 尾 稔	慶応義塾大学准教授
〃	〃	清 水 宏 祐	九州大学教授
〃	〃	清 水 信 行	青山学院大学教授
〃	〃	庄垣内 正 弘	京都大学教授
〃	〃	新 免 康	中央大学教授
〃	〃	須 川 英 德	元横浜国立大学教授
〃	〃	杉 山 正 明	京都大学教授

部 名	職 名	氏 名	現 職
研究部	客員研究員	鈴木 均	アジア経済研究所新領域研究センター 国際関係・紛争研究グループ長代理
〃	〃	鈴木 博之	山形短期大学講師
〃	〃	鈴木 立子	愛知大学教授
〃	〃	砂山 幸雄	愛知大学教授
〃	〃	妹尾 達彦	中央大学教授
〃	〃	關尾 史郎	新潟大学教授
〃	〃	關本 照夫	東京大学東洋文化研究所所長
〃	〃	曾田 三郎	広島大学教授
〃	〃	高田 幸男	明治大学准教授
〃	〃	武内 紹人	神戸外国語大学教授
〃	〃	武田 幸男	岐阜聖徳学園大学教授
〃	〃	田嶋 俊雄	東京大学教授
〃	〃	立川 武蔵	愛知学院大学教授
〃	〃	田中 明彦	東京大学東洋文化研究所教授
〃	〃	辻本 裕成	南山大学准教授
〃	〃	土田 哲夫	中央大学教授
〃	〃	鶴見 尚弘	山梨県立大学学長
〃	〃	寺田 浩明	京都大学教授
〃	〃	唐 亮	横浜市立大学准教授
〃	〃	戸倉 英美	東京大学教授
〃	〃	朽尾 武	成城大学名誉教授
〃	〃	富澤 芳亜	鳥根大学准教授
〃	〃	中野 真麻里	国文学研究資料館准教授
〃	〃	並木 頼寿	東京大学教授
〃	〃	西尾 寛治	防衛大学校教授
〃	〃	延廣 真治	帝京大学教授
〃	〃	萩田 博	東京外国語大学准教授
〃	〃	長谷川 誠夫	千葉工業大学講師
〃	〃	花田 宇秋	明治学院大学教授
〃	〃	濱田 正美	京都大学教授
〃	〃	林 俊雄	創価大学教授
〃	〃	原 實	東京大学名誉教授
〃	〃	平 勢隆	東京大学東洋文化研究所教授

部 名	職 名	氏 名	現 職
研究部	客員研究員	平野 聡	東京大学准教授
〃	〃	廣瀬 紳一	A. T Kearney. Principal
〃	〃	深沢 眞二	和光大学教授
〃	〃	藤田 忠	国土舘大学教授
〃	〃	藤本 幸夫	麗澤大学教授
〃	〃	古田 和子	慶応義塾大学教授
〃	〃	弁納 才一	金沢大学教授
〃	〃	細谷 良夫	東北学院大学教授
〃	〃	堀川 徹	京都外国語大学教授
〃	〃	松重 光浩	日本大学教授
〃	〃	松永 泰行	同志社大学一神教学際研究センター 客員フェロー
〃	〃	松涛 誠達	大正大学名誉教授
〃	〃	松本 弘	大東文化大学准教授
〃	〃	丸川 知雄	東京大学准教授
〃	〃	水野 善文	東京外国語大学准教授
〃	〃	三谷 孝	一橋大学教授
〃	〃	宮崎 修多	成城大学教授
〃	〃	村井 章介	東京大学教授
〃	〃	村田 雄二郎	東京大学教授
〃	〃	本野 英一	早稲田大学大学院教授
〃	〃	森平 雅彦	九州大学准教授
〃	〃	森安 孝夫	大阪大学教授
〃	〃	柳田 征司	奈良大学教授
〃	〃	山内 弘一	上智大学教授
〃	〃	山内 民博	新潟大学准教授
〃	〃	山本 英史	慶応義塾大学教授
〃	〃	山本 毅雄	国立情報学研究所名誉教授
〃	〃	吉田 伸之	東京大学教授
〃	〃	吉田 豊	神戸市外国語大学教授
〃	〃	吉水 千鶴子	筑波大学講師
〃	〃	吉村 慎太郎	広島大学准教授
〃	〃	六反田 豊	東京大学准教授
〃	〃	和田 恭幸	龍谷大学准教授

I The Toyo Bunko's activities in FY2007

The following is a summary of progress and contents of various projects implemented by the Toyo Bunko in FY2007.

The first to be mentioned is the management/personnel reshuffle during the fiscal year under review. Mr. Yoshinobu Shiba, who had served as Director General for more than five years since 2001, expressed his intension to resign from that post at the Board of Directors in June. In response, Mr. Minoru Makihara was appointed as the new Director General.

In addition, Messrs. Tatsuo Nishida and Tsuneo Wakai each retired from the position of Director upon the expiration of their term of service in June. In accordance with the Advisory Council's resolution, Messrs. Hitoshi Osaki, Takeshi Hamashita, Takeshi Fukuzawa and Shigemitsu Miki were newly appointed as Directors, while Messrs. Minoru Makihara, Katsuhide Kusahara, Tugitaka Sato, Issei Tanaka, Naohiro Tsurumi and Minoru Hara were reappointed as Directors, respectively. As for Auditors, Messrs. Riichiro Okano and Kazuhiko Tojo were reappointed.

With regard to Councilors, Ms. Setsuho Ikehata and Messrs. Hitoshi Osaki and Takeshi Hamashita each retired from the position upon the expiration of their term of service in June. Mr. Takeshi Fukuzawa also retired from that position, even though it was before the expiration of his term, in order to serve as Director. Meanwhile, in accordance with a resolution of the Board of Directors in June, Messrs. Koichiro Aramaki, Akio Arima, Masaaki Kubo, Hiromichi Seya, Tatsuo Nishida, Nobuyuki Masuda, and Wang Gungwu were newly appointed as Councilors, while Ms. Mio Kishimoto and Messrs. Yuichiro Anzai, Hiroshi Umemura, Kazuo Ochi, Akira Goto, Hiroshi Komiyama, Akihiro Satake, Katsuhiko Shirai, Ken'ichiro Hirano and Eiji Mano were reappointed.

Consequently, Toyo Bunko's management/supervisory structure now consists of 15 Directors, 2 Auditors and 17 Councilors.

As for staff members, Mr. Norio Mitsuda voluntarily resigned from his duties as head of the General Affairs Section, General Affairs Department,

while Mr. Yuji Aoki took up the concurrent post of heading both the General Affairs Section and the Accounting Section in April. In addition, Mr. Kazutaka Fujishiro, the curator, was assigned to the General Affairs Department in October. As part of the regional studies promotion projects by National Institutes for Humanities, the Islamic Area Studies project had been inaugurated in the previous fiscal year. Furthermore, the Contemporary Chinese Studies project was inaugurated in the fiscal year under review. In this context, Mr. Hajime Osawa has been temporarily assigned by National Institutes for Humanities to the Toyo Bunko's Documentation Center for China Studies. In addition, Mr. Yoshinobu Shiba, the former Director General, acceded to the post of Special Advisor to the Toyo Bunko and Mr. Takeshi Hamashita assumed the post of Advisor to the Library Department respectively, in June. For reference, Director Tanaka (concurrently serving as Head of the Library Department) was awarded the Order of the Sacred Treasure, Gold and Silver Star at the Spring Conferment of Decorations.

With regard to the reconstruction of the Toyo Bunko, which has been one pending issue, MITSUBISHI KINYOKAI had initially decided to provide financial support for the reconstruction and relocation of the Bunko to Yushima in January 2007. However, it turned out later that early relocation would have been impossible due to the circumstances of Bunkyo City. Accordingly, MITSUBISHI KINYOKAI approved a revised proposal for reconstruction at the current location. Specific work, including research into buried cultural property, the cutting/transplanting of trees and removal of surrounding structures, started in March 2008.

In addition to deliberation on and approval for FY2008 budgets, both the Board of Directors and the Advisory Council passed the following resolutions in February 2008: jurisdiction status change with regard to buildings/structures from basic assets to general assets in relation to the Toyo Bunko's reconstruction; setting up of a special account related to the reconstruction; and partial revision of executive pay regulations. For reference, qualification as Designated Public Interest Corporation was

renewed in May 2007.

Concerning the Library Department, in April the Toyo Bunko and the National Diet Library signed an agreement which shall terminate the branch agreement effective at the end of March 2009 after about 60 years in effect between the both parties since 1948. In association to this development, the number of dispatched representatives from the National Diet Library to the Toyo Bunko has been decreased from the conventional eight to five since April 2007.

II Activities Report

1. Survey and Research

A. Supradisciplinary Studies Group

(1) Contemporary Chinese Studies

Projects under this research department are subsumed under a research agenda for a holistic analysis, including historical and cultural aspects, of the whole specter of contemporary China within the turbulent times experienced since the end of World War II and the political and economic influence East Asia has exerted on the rest of the world.

The collection of sources for that purpose begins with the vast holdings of the Toyo Bunko's Library and aims at their substantiation and reorganization from the viewpoint of interdisciplinary approaches and public utilization.

[Research Activity]

- a) Political Science Research Group has aimed at publishing the research results which have accumulated from its research seminars.
- b) Economics Research Group is now preparing for the publication of an English language series on China's contemporary economy and plans to publish a collection of Japanese language research next year.
- c) International Relations and Culture Research Group is editing its recent findings for publication in issue no. 3 of the in-house journal *Modern Asian Studies Review*.

(2) Contemporary Islamic Studies: The Development of Parliamentarism and Comparative Constitutional Systems

This project is concerned with analyzing source materials available in Arabic, Persian and Turkish regarding parliamentary politics in the Middle East, comparing the related ideas and resulting constitutional systems established in the nations of the region, in an effort to come to some integrated understanding of the historical role and contemporary significance of the nation-state in the Islamic Middle East.

[Research Activities]

Analysis of the sources contained in *Agenda Index of the Minutes of the Iranian National Assembly* (English), *A Guide to Egyptian*

Parliamentary Records (English) and *From the Ottoman Empire to the Republic of Turkey* (Japanese) published during 2005 and 2006.

Preparation of Toyo Bunko Research Library (hereafter TBRL) English language monograph series Vol. 14, *Evolution of Parliamentarism and the Constitutional States in the Middle East* for publication during 2008.

B. Historical and Cultural Studies Group

In order to understand the dynamic and compound development that has occurred in contemporary Asia, the rich and unique heritage of the peoples of the region cannot be ignored.

<East Asian Section>

(3) Premodern Chinese Studies

- ① Regional History of Ancient China: Analysis of *Shijing Zhu* 水經注 (*Water Classic and Commentaries*)

Analysis of the annotated version of China's oldest work of geography dating back to the sixth century AD, utilizing the most recent archeological findings and Landsat mapping technology, in the hope of reconstructing regional society in ancient China.

[Research Activities]

- a) At study meetings held every other week, reading and analysis of Chapters 17, 18, 19 of Chen qiaoyi's 陳橋驛 collation of the work (published by Jiangsu guji chubanshi 江蘇古籍出版社刊), which are cover the Weishui 渭水 River from its source in Gansu 甘肅 Province through southern Xianyang 咸陽 (Shanxi 陝西 Province), northern Xian 西安 (Changan 長安), to where it empties into the Huanghe 黃河 River, based on comparison with the detailed 1/100,000 1978 Radosat map drawn in the former Soviet Union and US Aerial photography. The reading of Chapter 19 is continuing.
- b) After collecting the archeological reports on sites located in the 渭水 River basin, the group conducted a field survey of the region in May, checking the sites against items contained in *Shijing Zhu* 水經注. The results of this survey are reflected in the translation and analysis of Chapters 17 and 18 (vol.1). Preparations are now being made for the publication Chapter 19 (Vol.2).

② Glossary of Song Period Economic and Social History

The dictionary, based on 宋史食貨志 宋史食貨志 6 Vols., Toyo Bunko, 1961-2006 and cards from the ongoing subject indexing project for *Song huiyaojigao shihuo* 宋史食貨志, will be compiled as a database available to the public.

[Research Activities]

a) Publication of *The Terminology of Socio-Economy in the Section of The Song Digest*, a dictionary based on 宋史食貨志 宋史食貨志 6 Vols., Toyo Bunko, 1961-2006 and cards from the ongoing subject indexing project for *Song huiyaojigao shihuo* 宋史食貨志.

③ Archeological Survey and Research of East Asian Cities II

The comparative study, which began in 2004, of walled cities in the region centering upon Bohai 渤海. Two volumes of research have been published to date 『東アジアの都城と渤海』 *Bohai and the Walled Cities of East Asia*, 2005, 394 pp. and 『渤海都城の考古学的研究Ⅱ』 *Archeological Studies of the Walled Cities of Bohai*, Vol. II, 2007.

However, due to the inordinately large number of artifacts unearthed from the Bohaishangjing longquan 渤海上京龍泉 Site (Dongjing 東京 Castle), the task of cataloging them will continue during 2008.

[Research Activities]

- a) Together with continuing the research on Liao 遼 and Jin 金 period northeastern China, the team has chosen pre-Sui-Tang period Luoyang 洛陽 on the central plain as an object of study, beginning with the collection of research findings published in China to date on Luoyang.
- b) Survey of imprinted roof tiles from Xigu 西古 Castle preserved at Seoul University.
- c) Prof. Wang 培新 of 吉林 University was invited to Japan to exchange his ideas on the history of walled cities in northeastern China.

④ Law and Society in Premodern China II

The objective is to clarify legal institutions regarding family registers, land cadastres and forms of land taxation between the Song and Ming periods, identifying the "civil" characteristics of premodern Chinese law, analyzing their historical evolution and regional differences, in order to examine the relationship between "central" and "local" in premodern times.

The project is now concentrating on locating legal precedents and contracts from the periods in question.

[Research Activities]

- a) Review of the research to date to investigate new approaches to the subject. Publication of the findings is planned for 2009.
- b) Accumulation of bibliographic data concerning "civil" law, customary law and contracts.
- c) Continuing international collection of statutes and legal precedents.

(4) Modern Chinese Studies

① Japan's Image of China from the 1910s through the 1930s

Ascertaining perceptions about modern China through an examination of contemporary fieldwork conducted by both Japanese government and private sector organizations.

Based on the research done between 2003 and 2005 on various issues related to Japan's military occupation of Shandong during the First World War and the findings of the 2006 symposium entitled "The Japanese Occupation of Chintao and Shangdong: Society and Economy," the research will be expanded regionally to northern China, including Huabei and Shanxi.

[Research Activities]

- a) Further study of how the economic base was built in Japanese-occupied Shandong is related to a better understanding of Japan's advance into northern China.
- b) Scholarly exchange among concerned researchers active in Japan and abroad.

A research conference including non-team members was held in October, at which the following reports were presented.

"On the Rural Survey of Sanxin Province Conducted by the Manchurian Railway Company" (Yamauchi Masao); "Towards the Study of the Northern China's Leather Industry in Modern Times"

(Yoshida Ken'ichiro); "Factory Inspections and the Planned Economy of Northern China under Japanese Occupation" (Kubo Toru), "'Shina' as a Recreational Spot: Chinese Tourism Around 1920" (Takishita Ayako).

(5) Northeastern Asian Studies

① Late Premodern Korean Language Sources Held in Japan

A historio-bibliographical study of Korean sources held at such institutions as the Kyoto University Library (Kawai Collection), Tokyo University Main Library (Agawa Collection) and Tenri Library (Imanishi Collection).

There are many unpublished sources in Japan that are not found on the Korean Peninsula, like commercial documents from the 18th and 19th centuries. This four-year project (2004-2007) involves examination and analysis of the sources, leading up to the publication of its findings.

[Research Activities]

- a) Continuation of the survey and collection of the related documentation that exists in Japan, mainly government and civilian ledgers and pamphlets, with a purpose to building the empirical foundations for the study of late premodern Korea.
- b) Manuscript writing for the publication of the projects findings to be contained in 『日本所在朝鮮近世記録類目録』 *Catalogue of Records in Japan Pertaining to Late Premodern Korea*.

② Integrated Study of Qing Dynasty Manchurian Language Archival Sources

In recent years, attention has been drawn to the importance of the collection of such archives held by the Toyo Bunko as the collection of documents from the *Chao Xianghongqi* 鑲紅旗 Banner's Manchuria (southeastern Inner Mongolia) clerical office.

The collection, which contains some 2240 items dating from 1723 through 1922, has been introduced in TBRL No. 1 *The Bordered Red Banner Archives in the Toyo Bunko*.

[Research Activities]

- a) Preparation of an English publication of the project's findings.
- b) After the publication of *Neiguoshiyuandang* 『内国史院档、天聰七

年 1630』 (*Early Manchu Archives of the Qing Historiography Academy: The Seventh Year of Tiancong*) containing facsimiles from Qingruquanqian neiguoshi yuan dang manwen dang 清入関前内国史院档滿文档案 held by Historical Archives of China No.1, as well as Romanization and Japanese translations. The Group's study and discussion of Archive No. 1 will continue, leading to the publication of the holdings dated 1631.

Manuscripts are being prepared for the year 1634 and will be published in 2009.

③ Historical Structural Analysis of East and North Asia During the Qing Period

Overlapping a time marked by efforts on the part of the West to unify the world was an independent movement to consolidate the region spanning East and North Asia was also underway under the Qing Dynasty, an area that geographically corresponds to contemporary China. This project aims at analyzing the Dynasty's territorial structure and foreign relations, in relation to such events as the formation of the nation of Manchukuo in 1932 and contemporary issues related to China's present day autonomous regions and non-Han ethnic groups.

[Research Activities]

a) Source material searches and fieldwork are being conducted regarding such diverse areas of study as Qing Dynasty politics, the social, economic and political history of the Qing Period, the Qing Dynasty's relations with the Mongols and Russian Empire and the ethnic history of southwestern China during that period, in an attempt to transcend conventional schemes emphasizing territorial and chronological typology.

Work is continuing on the survey, cataloging and analysis of the documentation found to date in the hope of deepening the various areas of specialized research involved.

b) No. 14 in the TBRL series tentatively entitled *Historical Structures of Eastern and Northern Asia in the Qing Dynasty Era* is planned for publication during 2009. The volume will contain the project's findings over the three-year period beginning in 2006.

(6) Japanese Studies

①Bibliographical Study of the Iwasaki Collection

All of the rich sources dealing with Japanese culture, literature and language contained in the Library's Iwasaki Collection have yet to be bibliographically surveyed.

Upon the publication of a five-volume bibliographic introduction to the old manuscripts and printings dated up through the Muromachi Period was completed in 2006, the work then turned to the holdings that were published during the Tokugawa Period, preparing basic research on them to be published in the future.

[Research Activities]

a) During 2006 volume V of bibliography was published on the first batch of Tokugawa sources, 99 titles dealing with Japanese poetry.

Beginning in 2007, a bibliographic survey was begun on the approximately 100 titles in the Kimura Shoji Collection related to the ancient *Manyoshu* poetry compendium and similar titles in the Iwasaki Collection.

The findings will be published in volume VI of the series in 2009.

<Inner Asian Studies>

(7) Central Asian Research Team

①The St. Petersburg Documents

Based on the catalogue introducing the Uighur, Sogd, Khotan, Manichaeian and Mongolian documents recorded on the Library's microfilm copy of Russian Science Academy's St. Petersburg Asian Studies Institute Archives, reading and analysis of the Uighur documents is continuing from the viewpoints of bibliography, linguistics, Buddhist studies and historical science.

These documents, which are crucial to any historiographical understanding of central Eurasia from the 5-6th to the 15th century, are worth studying in detail down to the tiniest fragment, in order to form a base for utilizing them as research materials. In addition to studying the documents themselves, an understanding of the historical image of the regions from which they were unearthed will also be pursued.

[Research Activities]

a) The task of image scanning mainly the Uighur documents is nearing completion, and will be followed by the compilation of a database

which will facilitate their use as source materials.

However, under the contract signed with the Russian Academy, the pictorial materials on the microfilm cannot be offered en masse to general Library users, so the plan is to try to make them available to members of the immediate research team.

b) The Uighur documents, in particular, need to be compared with those held by other organizations, in order to compile a comprehensive catalogue. Document-by-document reading and analysis is continuing.

② The Ethnic Origins of Modern and Contemporary Central Asia

Since the breakup of the Soviet Union and the formation of five independent nations of Central Asia, and given the situation in Afghanistan, the Volga-Ural region has become the staging ground for various forms of "ethnic consciousness," which is also influencing surrounding regions, such as the Xinjiang Uighur Autonomous Region. This new dynamic characterizing the region is now being investigated at the Toyo Bunko based on the related historiographical sources held by its Library, leading to a re-examination of the "nation-state" framework and clarification of diversified approaches to the idea of "ethnic origins."

What we do know is that the prototype for "ethnic consciousness" in the region was created during the late nineteenth century, when Muslim intellectuals pioneered the formation of an ethnic identity through their contributions to newspapers and magazines. It is these periodicals dating around the turn of the 19th century, which are held by the Library, that now have become key sources in explaining what is happening in the region today.

[Research Activities]

a) While the work continues cataloging and studying the Library's Modern and Contemporary Central Asian Periodical Collection, related sources and research being published today are being accumulated.

b) The manuscript for TBRL No. 10, *Studies on Xinjiang Historical Sources in 17-18th Centuries* is now being prepared for publication some time in 2008.

c) Research seminars have been conducted monthly with participation

of outside experts.

- d) In order to disseminate research being done in Japan on Central Asian History internationally, a cooperative effort has been undertaken with the Indiana University Institute of Inner Asian Studies to publish an English translation series of Japanese research.

③Bibliographical Study of the Dunhuang-Turfan Chinese Documents

The analysis of Chinese documents that were written on the spot in locations around Inner Asia should be able to supplement and better clarify the historical image of the non-Han peoples that has been created by official histories and chronicles compiled at the center of the Chinese Empire. This project is involved in cataloging a collection of Chinese documents written between the 3rd and 13th centuries according to their content, based on the idea that they have just as much to tell about the actual historical conditions of the peoples of the region as about the formal aspects of diplomatics during that time.

[Research Activities]

- a) Continuing collation of the list of document serial numbers and no. of frames for reels with nos. 256-362 of the St. Petersburg microfilm with the facsimiled documents contained in the 17-volume *Echang dunhuang wenxian* 俄藏敦煌文献 published by *Shanghaiguji chubanshe* 上海古籍出版社.
- b) The microfilm listing is being investigated by each member of the team to evaluate the content's worth for each member's field of expertise.
- c) Work in indentifying documents on the microfilm pertaining to Turfan, Kucha and Khotan with an end to reproducing photographs of them.
- d) A manuscript is now being prepared for a volume of bibliographical research done by the team on Dunhuang-Turfan documents to be published during 2008.

(8) Tibetan Studies

①Bibliographical Study of Non-Buddhist (Tripitika) Sources

A database is being compiled of such sources held by the Library, including those brought to Japan by Kawaguchi Ekai. Also, another database is being prepared for textual revision and terminology from

18th century scholar Thu'u bkwan Chos kyi nyi ma's treatise on Buddhist doctrine, Thu'u bkwan's *Grub mtha' shel gyi me long*

[Research Activities]

- a) Continuing compilation of the non-Tripitika card catalogue.
- b) Continuing compilation of the textual revisions and glossary from the non-Tripitika collection.

<India and Southeast Asia Section>

(9) India Studies

① Political Power in Southern Asian: Documentary Sources Related to the Mughal Empire

The study of the histories compiled for each Mughal emperor and the related Persian historiography is continuing. In recent years, research done on India in Europe is putting more and more emphasis on primary source materials, resulting in the collection and analysis of Mughal imperial edicts. The team has decided to prepare its latest research finding for publication.

[Research Activities]

- a) The research team has undertaken the survey of official documents of the Mughal Empire held by the British Library, the cataloging of the related microfilm, etc.
- b) Seminars were held for the purpose of reading and analyzing the available historiography.
- c) Six years of findings on the Mughal documents are planned to be published in 2010.

(10) Southeast Asian Studies

① Images of Self Vs. Others in the Port Cities of Southeast Asia During its Transition to Modernity

The port cities of the region, which from ancient times acted as important entrepots of East-West trade, not only housed the merchants involved in that trade, but also became homes to many immigrants from China, India and Western Asia, resulting in a diversified, racially mixed population. On the other hand, these ports of trade became intermediaries linking the outside world with inland areas.

The present project focuses on these cities during their period of

transition to modernity and the way in which their residents viewed themselves in relation to others, in order to examine the dynamic that was created between local society and the wider world order.

[Research Activities]

- a) Continuing collection and analysis of bibliographic sources on the subject.
- b) Fieldwork has been conducted at the cities in question in Indonesia to examine this historical development of their foreign enclaves.
- c) Publication during 2008 of the bibliographic and fieldwork findings in TBRL No. 11, *The Changing Self Image of Southeast Asian Society during the Nineteenth and Twentieth Centuries*.

<West Asian Section>

(11) West Asian Studies

① Legal Contracts in the Islamic World

The documents in question include both private contracts (sale, etc.) and administrative (vassalage, tax farming, etc.). The aim is to examine social relations cemented in the Islamic through concluding contracts under the system guaranteeing their performance and enforcement.

[Research Activities]

- a) A research workshop was held on the international comparison of Islamic contracts, in conjunction with another project, "Research on Multinational Historical Archives," sponsored by the Archives Section of the National Institute of Japanese Literature. Japanese and Turkish language publications on the comparison of document sources from the Ottoman Empire and premodern Japan are planned for 2009.
- b) Publication from 2009 on of findings from the study of velum contract documents from Morocco held by the Library.
- c) Opening of joint research with such organizations as the Central Asia Diplomats Research Project (Kyoto University of Foreign Studies) and Interdisciplinary Research on Islamic Manuscripts and Documents Project (Tokyo University of Foreign Studies Asian and African Culture Institute)

C. Source Materials Section

(1) East Asian Studies

For the East Asian Research Team, this means its incorporation of a

new mix of regional specialists into a new organization. To begin with, an agreement has been reached with Taiwan's Academia Sinica to utilize its archives of complete texts and to exchange researchers. In addition, scholarly exchange is being promoted with such institutions as Fudan University (Shanghai), East China Normal University (Shanghai), the Shanghai Metropolitan Library and the Beijing Academy of Social Sciences.

[Research Activities]

- a) Professor Li Xiaoti 李孝悌 Academia Sinica was invited to Japan for one month between 19 October and 18 November 2007.
- b) Tanaka Issei, a auxiliary team member, visited the Chinese Literature Department at Beijing University for the purpose of research exchange and source material survey; and Takishita Saeko, Toyo Bunko research fellow, visited the Academia Sinica's Institute of History and Linguistics between 24 November and 7 December 2007 to survey its holdings regarding the social and cultural aspects of China during the 1930s.

D. Seminars and Lectures

No./Month	Apr	May	Jun	July	Aug	Sep	Oct	Nov	Dec	Jan	Feb	Mar	Total
Meetings	10	10	5	12	1	6	13	7	11	9	13	12	109
Attendance	111	312	48	120	12	54	459	100	172	121	212	260	1,981

2. Source Material Collection and Cataloging

All departments and their teams in the Research Sector are involved with the Library staff in supplementing the Toyo Bunko archives with the most up to date collection of primary source materials, research monographs and scholarly periodicals. In order to better grasp the world of Chinese periodicals, Internet access has been opened to the China National Knowledge Infra-Database (CNKI) information available on politics, economics, jurisprudence, history, philosophy and thought.

The Library's holdings now total approximately 370,000 titles, comprising 900,000 volumes, 97% of which has been cataloged into database form (as of March 2007). Efforts to repair of such holdings as rare Western and Chinese works, as well a frequently read and

photocopied titles, are being accompanied by a project to digitalize both text and image content for easier and gentler access.

A. Purchases by Language and Research Department (No. of Volumes)

Field	Chinese/Japanese	Asian Languages	Other
Supra-Disciplinary: China	368	21	87
Supra-Disciplinary: Islam	0	1,561	32
East Asia	636	16	0
Inner Asia	14	94	0
India-Southeast Asia	0	175	29
West Asia	0	511	0
Shared	1,049	216	34
Total	2,067	2,594	182

B. Publication Exchanges by Type and Language (No. of volumes)

Type	Received			Donated		
	China/Japan	Western	Total	China/Japan	Western	Total
Monograph	1,165	488	1,653	1,131	597	1,728
Periodical	2,133	660	2,793	4,808	11,721	16,529
Total	3,298	1,148	4,446	5,939	12,318	18,257

C. Database Input

The following data was input into databases between 1 Apr 2007-31 Mar 2008

Western Language	1,244	Turkish	146
Chinese-Japanese	5,777	SE Asian Language	1,238
Cyrillic	155	Periodicals	5,194
Persian	676		
Arabic	411		
			Total 14,841 件

D. Preservation and Cataloging

(1) Filming

Category	Frames Filmed	Film Reversed	Electronic Photocopies	Cataloging Jobs
Amount	0	0	0	8

3. Research Publications

The Research Departments are currently publishing monograph series, annotated source material collections, bibliographic introductions and periodicals in both Japanese and English, containing research based on the languages of Asia, including Chinese, Korean, Manchurian, Uighur, Arabic, Persian and Turkish.

This activity is intended to contribute to a better understanding of the issues facing Asia today and stimulate discussion of them within the international academic community.

A. Periodicals

- ・『東洋文庫和文紀要』(東洋学報)
(*The Journal of the Research Department of the TOYO BUNKO*)
A5 Size Journal Vol. 89 Nos. 1-4 Released
- ・『東洋文庫欧文紀要』
(*Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko*)
B5 Size Journal No. 65 Released
- ・『近代中国研究彙報』(*Report of Modern Chinese Studies*)
A5 Size Journal No. 30 Released
- ・『東洋文庫書報』(*Philological Report from the Toyo Bunko Archival*)
A5 Size Journal No. 39 Released

B. Monographs, etc.

- ① 『宋会要輯稿食貨社会經濟用語集成』
(*The Terminology of Socio-Economy in the Section of The Song Digest*)
One A4 Size Volumes Released
- ② 『水経注疏訳註』[上巻；渭水の条・巻17, 18]
(*Translation with Notes on The Water Classic and Commentaries*
[Chapter 17, 18: Wei Shui 1st, 2nd])
One A5 Size Volumes Released

4. Dissemination of Information

A. Research Information

(1) Reference

『東洋文庫年報』(*Toyo Bunko Yearbook*) 2006

B. Database Availability (1 Apr 2007-31 Mar 2008)

Databases	Apr	May	Jun	July	Aug	Sep	Oct	Nov	Dec	Jan	Feb	Mar
Chinese Sources	1,084	1,099	1,596	2,252	1,209	1,505	1,417	1,564	715	1,191	1,089	1,102
New Acquisitions (Chinese, Western, Russian Titles)	275	195	257	245	168	133	47	102	82	93	74	85
Chinese Titles (incl./Modern China Res. Team, Periodicals)	2,488	2,147	3,021	3,483	1,995	1,970	2,964	2,751	2,098	1,769	1,768	1,670
Japanese Titles (incl./Modern China Res. Team, Periodicals)	2,482	2,741	3,188	3,871	2,447	2,507	3,056	2,860	2,074	1,593	1,682	1,798
Japanese Bibliography (incl./Modern titles, Iwasaki Collection)	1,629	439	1,264	1,424	1,015	1,008	3,783	1,683	962	931	1,021	1,113
Western Titles Catalog (incl./Modern China Res. Team)	1,142	726	1,355	3,440	2,665	1,338	1,801	2,082	1,493	1,350	1,266	1,393
Consolidated Western Title DB	1,371	1,545	1,672	1,218	558	400	537	250	212	193	280	208
Arabic Titles	1,379	1,141	989	1,144	794	793	714	663	463	828	915	975
Turkish Titles	288	229	1,022	1,216	603	451	923	385	427	400	416	409
Persian Titles	557	353	470	420	315	265	192	313	174	283	365	602
Tibetan Titles (incl./Kawaguchi Collection, non-Buddhist titles)	346	190	720	837	443	438	166	329	109	174	214	317
Mongolian Titles	252	245	310	324	248	151	129	154	142	313	271	308
Uighur Titles	253	56	196	253	75	214	75	148	12	99	144	208
Burmese Titles	99	99	330	360	305	287	217	354	182	93	146	107
Thai Titles							57	78	32	248	239	250
Indonesian/Malay Titles	148	58	246	199	135	103	29	42	16	42	30	47
Central Asian Research Titles	409	166	375	431	254	263	130	271	135	63	81	89
Middle East/Islam Research Titles	880	251	1,020	1,182	447	447	518	483	577	260	188	213
Biographical Directory of Asian History	412	186	465	743	410	315	408	146	233	456	354	326
Image DB (incl./Umehara Collection, Hong Kong Copperplates)	1,240	3,729	4,406	6,627	4,596	6,841	12,651	16,020	13,359	169	280	331
Moving Image DB (Hong Kong Festivals and Stage Drama)							1,904	1,275	1,362	8,549	10,139	14,603
Miscellaneous (incl./Russian, Kazaf, Korean Titles)	7,116	4,416	8,456	8,099	6,036	7,884	5,015	8,251	10,519	18,374	15,900	17,526
合 計	23,850	20,011	31,358	37,768	24,718	27,313	36,633	40,204	35,378	37,471	36,842	43,680

5. Scientific Information Availability

In addition to its role as an Asian studies research institute, the Toyo Bunko also acts as a liaison for scholars and organizations in Japan and abroad. Related activities (1 Apr 2007-31 Mar 2008) include:

(1) Reading Room Services

Category	Service Request
Amount	259

(2) Photocopying Services**A) Microfilm and Paper Developing**

No./Month	Apr	May	Jun	July	Aug	Sep	Oct	Nov	Dec	Jan	Feb	Mar	Total
Users	146	204	191	216	255	203	182	219	196	171	189	193	2,219
Title Requests	2,088	2,064	2,471	3,125	4,991	3,952	2,137	2,887	2,520	3,177	2,682	4,164	34,170
Reference Service Requests	40	55	52	58	69	55	49	59	53	46	51	52	599

B) Electronic Photocopying

Category	Service request	Number of Copies
Amount	833	35,687

(3) Reprinting and Expanded Publication

『東洋学報』(<i>The Journal of the Research Department of the Toyo Bunko</i>) Vol. 88, No. 4	330
『東洋学報』(<i>The Journal of the Research Department of the Toyo Bunko</i>) Vol. 89, No. 1 ~ 3 号	330
<i>Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko</i> Vol.64	50
『岩崎文庫貴重書書誌解題Ⅴ』 <i>IWAKAKI-Kichosho Shoshikaidai V</i>	150
『晋書食貨志訳註』 <i>Treatise on the Economy and Finance of the Jin</i>	150
『日中戦争期の中国における社会・文化変容』 <i>The Socio-Cultural Transformation in China during the Sino-Japanese War</i>	180
<i>TBRL No. 8</i> <i>Restructuring China : Party, State and Society after the Reform and Open Door</i>	80
<i>A Guide to parliamentary records in monarchical Egipt</i>	50
<i>A Guide to parliamentary records in monarchical Egipt (CD)</i>	50
『宋史食貨志訳註(五)・(六) 語彙索引』(<i>An Index to The Translation with Annotation of the Chapters 182 to 186 on Economics of the Song Dynastic History</i>)	150
<i>Agenda Index of the Minutes of the Iranian National Assembly</i>	50
『近代中国研究彙報』(<i>Report of Modern Chinese Studies</i>) No.29	50
『東洋文庫書報』(<i>Philological Report from the Toyo Bunko Archival etc;</i> 2 items)	各50
『東洋文庫年報』 <i>Toyo Bunko Yearbook 2007</i>	10

(4) Research Information Services

『東洋文庫年報』*Toyo Bunko Yearbook 2007*

One A5 Size Volumes Released

(5) Public Relations

Periodic update of the Toyo Bunko English and Japanese websites.

(6) Scholarly Exchange

A) Long Term Fellowships

1) Japan

Mitsuta Tsuyoshi (Prof. of Seikei University)

Specialty: The Chinese Revolution as an Asian Revolution

Term: 2007

2) 2007 Japan Association for the Promotion of Science Post-Doctoral

Fellowships

①SPD

Noda Jin (University of Tokyo)

Specialty: Diplomatic History of the Kazaf Khanate: Its Relations with the Qing Dynasty During 18th and 19th Centuries

Term: 3 years through 2009.

②PD

Igarashi Daisuke (Chuo University)

Specialty: Social Change During the Breakup of the Iqta System in Late Mamluk Dynasty Egypt and Syria

Term: 3 years ending 2007.

Kawahara Yayoi (University of Tokyo)

Specialty: Islam and the Formation of Fergana Muslim Society During the Kokand Khanate

Term: 3 years through 2007

Iiyama Tomoyasu (Waseda University)

Specialty: The Origins of Han Society and Social Integration in Northern Jin Period China as seen from Movements Among Indigenous Peoples

Term: 3 years through 2008

Ogasawara Hiroyuki (University of Tokyo)

Specialty: Historical Consciousness Within the Ottoman Empire: The Creation and Evolution of the "Memory" about its Mythological Origins

Term: Three years through 2008.

Moriyama Hiroaki (University of Tokyo)

Specialty: Ulama and Local History in the Middle East from the 10th to the 12th Century: Social Historical Study of the Compilation of Biographical Dictionaries

Term: Three years through 2008.

Onodera Shiro (University of Tokyo)

Specialty: Nationalism and Political Symbolism in Modern China
Term: Three years through 2009.

Yoshida Tateichiro (Keio University)

Specialty: Interdisciplinary Examination of International Trade in
Animal Husbandry Commodities in Modern China: Egg, Bone and
Leather Products

Term: Three years through 2009

2) Foreign Fellowships

Claus M. FISCHER (Prof. Universität Göttingen)

Traditional Musical Performing Arts in Late Premodern Japan,
Especially in the History of Kabuki Theater

Term: 8 Feb 2004-7 Feb 2007; Privately funded.

and 6 other scholars.

B) Funding to Foreign Scholars

Dr. Robert Cribb, Australian National University Senior Fellow China
(Peoples Republic)

and 15 other scholars.

6. Regional Studies Program

(1) Documentation Center for Islamic Area Studies

The Aim of the Center is to build a research foundation for local source materials in regional languages through the systemization of bibliographical information, and set up a convenient environment for the systematic collection and use of source materials. Viewing source materials as mirrors reflecting society, the Center promotes its research activities from a broad perspective in order to comprehend the complexity of social, political, and cultural structures in Islamic areas.

1. Systematic collection of local source materials in regional languages, including manuscripts and historical documents
2. Development of bibliographical databases and network for librarians

3. Comparative historical study based on the documents

[Research Activities]

a) 7 workshops and 1 international conference were held to study social institutions and relationships in Islamic regions through interregional comparison, utilizing historical documents (especially Islamic court documents and *Waqf* documents, etc.)

b) Network building

A survey of the archival and cataloging situation regarding source materials written in Arabic scripts held in Japan was conducted for the purpose of improving that situation, and preparations are now being made for the publication of the survey findings next year.

5 workshops were conducted in coordination with the Section for Islamic Area Studies, Institute of Asian Cultures, Sophia University, Research Group 2 for the purpose of compiling a catalogue of Arabic sources in Southeast Asia (*Kitab Kuning* Catalogue). Also, a meeting to exchange information and opinions about bibliographical databases was organized among librarians from 9 institutes which hold source materials written in Arabic scripts.

c) Overseas Projects

Dispatches (Dispatched scholars)

- (1) Participation in "Multinational Comparison of Historical Archives" Conference, Paris and research liaison (Miura Toru)
- (2) Survey and photography of Sharia court records in Uzbekistan (Isogai Ken'ichi)
- (3) Source material survey and collection in Syria (Yanagiya Ayumi)
- (4) Participation in an international conference on Ottoman studies, Zurich University (Stefan Knost).
- (5) Source material survey and collection in Iran (Tamenaga Kenji)

Invitations

- (1) Dr. Özer Ergenç (Turkey; research fellow majoring in documents related to the Ottoman Empire bureaucracy) to participate in an international symposium and exchange research information.
- (2) Dr. Astrid Meier (Switzerland; research fellow majoring in *waqf* documents in Ottoman era) to hold a workshop and exchange research information.

d) Opening of a website during June 2007 carrying reports on the Center's activities, offering an online database of collected sources

(opened in April 2008), and presenting links to related websites containing source references and introductions to sources. Work continues on the building of another database entitled "Bibliographical Database of Middle East Studies in Japan " in conjunction with the Japanese Association for Middle East Studies.

(2) Documentation Center for China Studies (DCCS)

Constructing a System of Collecting and Studying Source Materials for China Studies

The Center puts emphasis on building a systematic organization for the collection, use and research of sources through cooperation with every kind of research institution dealing with contemporary China. Such support functions as compiling of bibliographic data, preparing a Chinese bibliographic search system and making source material information available to subscribers are also being carried out.

In concrete terms, DCCS's activities are built upon 3 supports:

1. Organized, systematic collection, cataloging and dissemination of source materials related to contemporary China
2. Cooperation with related organizations to promote joint research and use of source materials related to contemporary China.
3. Promoting empirical research based on the available primary sources.

proofreading
[Research Activities] :

a) Systematic Source Collection and Research

Primary materials pertaining to various aspects of political movements in China during the 1950s and 60s were successfully obtained. In addition, reprints of periodicals and microfilm never before held in Japan were obtained. During February two joint research meetings were held concerning these new sources, preparing the way for the coming year's agenda. Also, in order to get a grasp of source material accessibility and publication at the prefectural level, Osawa Hajime (DCCS research fellow) was dispatched to Wuxi (Jiangsu Province, China), and he interviewed with director and archivists of Wuxi municipal Archive. Takada Yukio (DCCS Director) was dispatched to Korea in January to meet with China studies scholars and examine the conditions of contemporary Chinese sources collection there.

b) As the result of investigation into the aspects of cooperation and division of labor with respect to source material collection and information provision, the digitalization of sources and making them available on NACSIS-Webcat has been recommended. Osawa Hajime will participate in NII training seminars in order to prepare for the opening of full operations come fiscal year 2008.

c) Research on Network Building and Source Cataloguing and Public Availability

To address problems related to 1) recent rapid developments in digital source materials and digital archives, 2) database compiled for reporting research results, and 3) insufficient accumulation of information and experience on an international scale, a workshop was organized in the hope of forming a network among researchers, librarians and archivists, called "China Studies Database Workshop."

In September, Christian Henriot (Prof, University Lumiere Lyon 2), DCCS's global partner, and Osawa Takehiko (Research fellow, the National Archives of Japan) were invited to introduce and discuss digitalization as it is being carried out in France and Japan, respectively. The discussion revealed that with respect to such technological issues as standards for preserving image data and the use of GIS, as well as dealing with copyrighted materials, both countries are still in stages of experimentation. During February, two scholars (one presently studying in the United States) and one archivist, all affiliated with Academia Sinica, were invited to report on the study of Chinese history and digitalization in Taiwan and the United States. It was revealed that in the light of the exemplary progress being made on both fronts in both those countries, Japan has seriously fallen behind international standards pertaining to digitizing source materials.

DCCS's website was put online on 10 October 2007, and English and Chinese versions were added by the end of November. In February, "Digital Resource Links" was added to the site map directing visitors to primary source materials (statistical databases, digital libraries and digital archives) now available on the Internet.

III Accounting Report

Balance Sheet of General Account

As of March 31, 2008

(Unit: Yen)

Account Title	Current FY	Previous FY	Increase/Decrease
I ASSETS			
1. Current Assets			
Cash and deposits	2,681,579	1,995,457	686,122
Prepaid expenses	2,856,507	0	2,856,507
Accounts receivable	20,081,023	19,718,445	362,578
Suspense payments	5,400,000	0	5,400,000
Goods	5,655,865	2,586,287	3,069,578
Total current assets	36,674,974	24,300,189	12,374,785
2. Fixed Assets			
(1) Basic assets			
Library materials	1,041,708,012	1,041,708,012	0
Land	110,494	110,494	0
Buildings	0	487,034,941	△ 487,034,941
Structures	0	2,689,339	△ 2,689,339
Guarantee money	50,000	50,000	0
Investment securities	2,841,936,643	2,841,454,301	482,342
Deposits	115,322	114,822	500
Total basic assets	3,883,920,471	4,373,161,909	△ 489,241,438
(2) Specific assets			
Pension assets	25,950,488	54,697,345	△ 28,746,857
Total specific assets	25,950,488	54,697,345	△ 28,746,857
(3) Other fixed assets			
Buildings	457,692,206	0	457,692,206
Structures	1,344,669	0	1,344,669
Fixtures and fittings	27,049,400	25,495,722	1,553,678
Library materials	110,184,981	66,154,836	44,030,145
Softwares	2,648,743	3,220,753	△ 572,010
Telephone rights	364,000	364,000	0
Allowance for repairs of buildings, etc.	63,077,400	62,989,523	87,877
Reserve for operation adjustments	36,387,985	39,339,716	△ 2,951,731
Total other fixed assets	698,749,384	197,564,550	501,184,834
Total fixed assets	4,608,620,343	4,625,423,804	△ 16,803,461
Total Assets	4,645,295,317	4,649,723,993	△ 4,428,676
II LIABILITIES			
1. Current Liabilities			
Accounts payable	2,684,025	12,420,425	△ 9,736,400
Deposits received	1,316,150	1,726,548	△ 410,398
Allowance for bonuses	6,496,053	6,646,098	△ 150,045
Total current liabilities	10,496,228	20,793,071	△ 10,296,843
2. Fixed Liabilities			
Allowance for retirement benefits	25,950,488	54,697,345	△ 28,746,857
Total fixed liabilities	25,950,488	54,697,345	△ 28,746,857
Total liabilities	36,446,716	75,490,416	△ 39,043,700
III NET WORTH			
1. Specified Net Worth			
Donations, etc.	202,110,494	202,110,494	0
Total specified net worth	202,110,494	202,110,494	0
(of which the amount appropriated to basic assets)	(202,110,494)	(202,110,494)	0
2. General Net Worth			
(of which the amount appropriated to basic assets)	4,406,738,107	4,372,123,083	34,615,024
(of which the amount appropriated to specific assets)	(3,681,809,977)	(4,171,051,415)	(△ 489,241,438)
(of which the amount appropriated to specific assets)	(0)	(0)	0
Total Net Worth	4,608,848,601	4,574,233,577	34,615,024
Total Liabilities and Net Worth	4,645,295,317	4,649,723,993	△ 4,428,676

The Increase and Decrease of General Account's Net Worth
from April 1, 2007 to March 31, 2008

(Unit: Yen)

Account Title	Current FY	Previous FY	Increase/Decrease
I GENERAL NET WORTH INCREASE/DECREASE			
1. Current Increase/Decrease			
(1) Current revenues			
Financial revenue from basic assets	57,186,203	56,656,621	529,582
Financial revenue from specific assets	45,882	53,843	△ 7,961
Donations received			0
Donations by Support Society	40,200,000	35,200,000	5,000,000
Other donations	55,800,000	59,445,854	△ 3,645,854
Membership fee received	485,000	15,000	470,000
Project fee received	25,160,000	12,000,000	13,160,000
Operating revenue	7,741,142	5,895,341	1,845,801
Grants, etc.	113,240,000	111,770,000	1,470,000
Other revenue	659,565	536,400	123,165
Total current revenues	300,517,792	281,573,059	18,944,733
(2) Current expenditures			
Operating expenses	191,140,763	97,697,810	93,442,953
Library and research program	28,193,658	26,399,004	1,794,654
Acquisition	15,484,435	18,947,182	△ 3,462,747
Publishing	18,075,810	19,563,196	△ 1,487,386
Research dissemination	12,907,396	14,261,133	△ 1,353,737
Academic information service	9,343,562	14,344,442	△ 5,000,880
Regional study program	11,733,133	4,182,853	7,550,280
Payroll	41,545,453	0	41,545,453
Wages	34,951,451	0	34,951,451
Provision for bonuses	1,786,739	0	1,786,739
Pension expense	1,012,954	0	1,012,954
Welfare expense	3,794,309	0	3,794,309
Office expenses	53,857,316	0	53,857,316
Equipment repairs and maintenance	6,760,324	0	6,760,324
Utilities	5,613,510	0	5,613,510
Rewards	1,518,572	0	1,518,572
Depreciation expense	31,135,718	0	31,135,718
Other expense	8,829,192	0	8,829,192
Administrative expenses	77,163,604	157,464,465	△ 80,300,861
Payroll	59,214,313	93,041,537	△ 33,827,224
Directors' compensation	9,070,000	14,281,818	△ 5,211,818
Wages	36,888,785	58,980,116	△ 22,091,331
Provision for bonuses	4,709,314	6,646,098	△ 1,936,784
Pension expense	1,514,109	2,552,938	△ 1,038,829
Welfare expense	7,032,105	10,580,567	△ 3,548,462
Office expenses	17,949,291	64,422,928	△ 46,473,637
Equipment repairs and maintenance	2,253,442	21,648,221	△ 19,394,779
Utilities	1,871,170	6,768,526	△ 4,897,356
Rewards	2,067,390	5,739,170	△ 3,671,780
Depreciation expense	8,326,428	20,600,905	△ 12,274,477
Other expense	3,430,861	9,666,106	△ 6,235,245
Total current expenditures	268,304,367	255,162,275	13,142,092
Current increase/decrease for this term	32,213,425	26,410,784	5,802,641
2. Nonrecurring Increase/Decrease			
(1) Nonrecurring revenues			
Gain from receiving fixed assets	2,634,188	1,439,109	1,195,079
Gain from prior period adjustment	0	20,612,912	△ 20,612,912
Total nonrecurring revenues	2,634,188	22,052,021	△ 19,417,833
(2) Nonrecurring expenditures			
Loss on retirement of fixed assets	162,589	0	162,589
Prior period depreciation expense	0	699,841,437	△ 699,841,437
Loss on prior period adjustment	0	63,949,668	△ 63,949,668
Total nonrecurring expenditures	162,589	763,791,105	△ 763,628,516
Nonrecurring increase/decrease for this term	2,471,599	△ 741,739,084	744,210,683
Pretax general net worth increase/decrease	34,685,024	△ 715,328,300	750,013,324
Corporate tax, inhabitant tax and business tax	70,000	70,000	0
General net worth increase/decrease for this term	34,615,024	△ 715,398,300	750,013,324
General net worth at the beginning of the term	4,372,123,083	5,087,521,383	△ 715,398,300
General net worth at the end of the term	4,406,738,107	4,372,123,083	34,615,024
II SPECIFIED NET WORTH INCREASE/DECREASE			
Change in specified net worth for this term	0	0	0
Specified net worth at the beginning of the term	202,110,494	202,110,494	0
Specified net worth at the end of the term	202,110,494	202,110,494	0
III NET WORTH AT THE END OF THE TERM	4,608,848,601	4,574,233,577	34,615,024

List of Assets

As of March 31, 2008

(Unit: Yen)

Account Title	Amount	
(ASSETS)		
I Current Assets		
Cash and deposit		
Ordinary deposit at Komagome Branch, The Bank of Tokyo-Mitsubishi UFJ	6,096,454	
Postal transfer account	1,043,220	
Prepaid expenses		
Insurance premium	2,856,507	
Accounts receivable		
Accrued interest on securities, etc.	20,081,023	
Suspense payments		
Travel expense	400,000	
Goods		
Publication, etc.	5,655,865	
Total current assets		36,133,069
II Fixed Assets		
(1) Basic assets		
Library materials	1,041,708,012	
Japanese and Chinese books	515,330 books	
Western books	364,722 books	
Copied materials	29,800 items	
Land	110,494	
Location	2-28-21 Honkomagome, Bunkyo-ku, Tokyo	
Lot number	2-147- 1 Honkomagome, Bunkyo-ku, Tokyo	
Land category	Building land	
Area	3,687.63 square meters	
Guarantee money		
Guarantee money to Nihon Keibi Hoshō Co., Ltd.	50,000	
Investment securities		
Securities to be held to maturity	2,841,936,643	
Deposit		
Ordinary deposit at Komagome Branch, The Bank of Tokyo-Mitsubishi UFJ	115,322	
Total basic assets	3,883,920,471	
(2) Specific assets		
Cumulative deposits as pension assets		
Ordinary deposit at Komagome Branch, The Bank of Tokyo-Mitsubishi UFJ	5,927,665	
Time deposit at the above bank branch	20,000,000	
Ordinary deposit at Ikebukuro Branch, Mitsubishi UFJ Trust and Banking	22,823	
Construction in progress		
Leveling/plane longitudinal surveying	514,500	
Total specific assets	26,464,988	
(3) Other fixed assets		
Buildings	457,692,206	
Location	2-28-21 Honkomagome, Bunkyo-ku, Tokyo	
Buildings	Construction Reinforced concrete structure	
Building area	1,415.17 square meters	
Total floor area	7,141.00 square meters	
Air-conditioning & plumbing, elevator machinery, utilities, etc.		
Structures	1,344,669	
Fixtures and fittings		
Office furniture, etc.	145 items	
Library materials		
Japanese and Chinese books	10,764 books	
Western books	17,249 books	
Microfilms, etc.	532 books	
Softwares	2,648,743	
3 items		
Telephone rights	364,000	
5 lines		
Cumulative deposits for repairs of buildings, etc.		
Ordinary deposit at Komagome Branch, The Bank of Tokyo-Mitsubishi UFJ	23,077,400	
Time deposit at the above bank branch	40,000,000	
Cumulative deposit for operation adjustments		
Ordinary deposit at Komagome Branch, The Bank of Tokyo-Mitsubishi UFJ	36,387,985	
Total other fixed assets	698,749,384	
Total fixed assets	4,609,134,843	
TOTAL ASSETS		4,645,267,912
(LIABILITIES)		
I Current Liabilities		
Accounts payable	2,684,025	
Publication printing fee, etc.		
Deposits received	1,316,150	
Withholding income tax on employees' wages, etc.		
Allowance for bonuses	6,496,053	
Cumulative allowance for bonuses to officers and employees		
Total current liabilities		10,496,228
II Fixed Liabilities		
Allowance for retirement benefits	25,950,488	
Cumulative allowance for retirement benefits		
Total fixed liabilities		25,950,488
TOTAL LIABILITIES		36,446,716
TOTAL NET WORTH		4,608,821,196

Income & Expenditure Statement of General Account

from April 1, 2007 to March 31, 2008

(Unit: Yen)

Account Title	Budget (A)	Settlement (B)	Increase/Decrease (A) - (B)	Remarks
I OPERATING ACTIVITIES				
1. Operating Revenues				
Financial revenue from basic assets	56,300,000	56,703,361	△ 403,361	
Donations by Support Society	40,200,000	40,200,000	0	
Other donations	55,000,000	55,800,000	△ 800,000	
Membership fee received	500,000	485,000	15,000	
Project fee received	20,000,000	25,160,000	△ 5,160,000	
Revenue from research	7,000,000	7,741,142	△ 741,142	
Grants, etc.	110,000,000	113,240,000	△ 3,240,000	
Other revenue	500,000	523,419	△ 23,419	
Total operating revenues	289,500,000	299,852,922	△ 10,352,922	
2. Operating Expenditures				
Operating expenses	223,998,000	205,054,391	18,943,609	
Library and research program	34,000,000	28,193,658	5,806,342	
Acquisition	41,000,000	47,412,480	△ 6,412,480	
Publishing	21,500,000	18,075,810	3,424,190	
Research dissemination	13,500,000	12,907,396	592,604	
Academic information service	15,500,000	12,413,140	3,086,860	
Regional study program	20,000,000	22,797,810	△ 2,797,810	
Payroll	47,538,000	40,532,499	7,005,501	
Office expenses	30,960,000	22,721,598	8,238,402	
Administrative expenses	59,802,000	98,666,987	△ 38,864,987	
Payroll	50,762,000	88,974,124	△ 38,212,124	
Office expenses	9,040,000	9,692,863	△ 652,863	
Total operating expenditures	283,800,000	303,721,378	△ 19,921,378	
Net operating activities	5,700,000	△ 3,868,456	9,568,456	
II INVESTMENT ACTIVITIES				
1. Investment Revenues				
Redemption of matured investment securities	2,500,000	2,500,000	0	
Accrued retirement benefits	0	31,273,920	△ 31,273,920	
Operating expenses allowance	0	33,000,000	△ 33,000,000	
Total investment revenues	2,500,000	66,773,920	△ 64,273,920	
2. Investment Expenditures				
Acquisition of fixed assets	0	8,322,233	△ 8,322,233	
Acquisition of investment securities	2,500,000	2,500,000	0	
Accrued retirement benefits	5,000,000	2,481,181	2,518,819	
Operating expenses allowance	0	30,000,000	△ 30,000,000	
Total investment expenditures	7,500,000	43,303,414	△ 35,803,414	
Net investment activities	△ 5,000,000	23,470,506	△ 28,470,506	
III FINANCIAL ACTIVITIES				
1. Financial Revenues	30,000,000	0	30,000,000	
2. Financial Expenditures	0	0	0	
Net financial activities	0	0	0	
IV OTHERS	700,000	0	700,000	
Current balance	0	19,602,050	△ 19,602,050	
Balance carried over from the previous term	920,831	920,831	0	
Balance carried forward to the next term	920,831	20,522,881	△ 19,602,050	

IV List of personnel

The personnel of the Toyo Bunko as of March 31, 2008 are as follows:

1.Directors

Title	Name	Present Post
Director General	MAKIHARA,Minoru	Director General, The Toyo Bunko; Advisor, Mitsubishi Corporation
Executive Director	YAMAKAWA,Naoyoshi	Executive Director & General Affairs
Directors	ISHII,Yoneo	Advisor, Research Department, The Toyo Bunko; President, National Institutes for the Humanities; Prof. Emer., Kyoto University
	IWASAKI,Hiroya	President, Tozan Noji Kaisha, Ltd.
	OSAKI,Hitoshi	Executive Director, National Institutes for the Humanities
	KUSAHARA,Katsuhide	Vice-President, Takushoku University
	SATO,Tsugitaka	Research Department Head, The Toyo Bunko; Prof., Waseda University; Prof. Emer., The University of Tokyo
	SHIBA,Yoshinobu	Executive Librarian, The Toyo Bunko; Member, The Japan Academy; Prof. Emer., Osaka University
	TANAKA,Issei	Head Librarian, The Toyo Bunko; Member, The Japan Academy; Prof. Emer., The University of Tokyo
	TSURUMI,Naohiro	President, Yamanashi Prefectural University; Prof. Emer., Yokohama National University
	NAKANE,Chie	Chairman of Section1, The Japan Academy; Prof. Emer., The University of Tokyo
	HAMASHITA,Takeshi	Advisor, Library Department, The Toyo Bunko; Prof., Ryukoku University
	HARA,Minoru	Member, The Japan Academy; Prof. Emer., The University of Tokyo
	FUKUZAWA,Takeshi	Advisor, Mitsubishi Estate Co., Ltd.
	MIKI,Shigemitsu	Chairman, Bank of Tokyo-Mitsubishi UFJ, Ltd.
Auditor	OKANO,Riichiro	Auditor, The Toyo Bunko
	TOJO,Kazuhiko	Secretary-General, The Mitsubishi Kin'yo-kai

2. Councilors

Title	Name	Present Post
Councilors	ARAMAKI, Koichiro	Chairman, Kirin Holdings Co., Ltd.
	ARIMA, Akito	Chairman, Japan Science Foundation; Chancellor, Musashi Gakuen; Prof. Emer., The University of Tokyo
	ANZAI, Yuichiro	President, Keio University
	UMEMURA, Hiroshi	Prof., Chuo University
	OIKE, Kazuo	President, Kyoto University
	KISHIMOTO, Mio	Prof., Ochanomizu University
	KUBO, Masaaki	Secretary General, The Japan Academy Prof. Emer., The University of Tokyo
	GOTO, Akira	Prof., Toyo University Prof. Emer., The University of Tokyo
	KOMIYAMA, Hiroshi	President, The University of Tokyo
	SATAKE, Akihiro	Prof. Emer., Kyoto University
	SHIRAI, Katsuhiko	President, Waseda University
	SEYA, Hiromichi	Advisor, Asahi Glass Co., Ltd.
	NISHIDA, Tatsuo	Member, The Japan Academy; Prof. Emer., Kyoto University
	HIRANO, Ken'ichiro	Prof., Waseda University; Prof. Emer., The University of Tokyo
	MASUDA, Nobuyuki	Advisor, Mitsubishi Heavy Industries, Ltd.
	MANO, Eiji	Prof., Ryukoku University Prof. Emer., Kyoto University
WANG, Gungwu	Director, East Asian Institute, National University of Singapore	

3. Oriental Studies Advisory Council

Title	Name	Present Post
Chairman of the Committee	MAKIHARA Minoru	Director General, The Toyo Bunko Advisor, Mitsubishi Corporation
Members of the Committee	ISHII Yoneo	Advisor, Research Department, The Toyo Bunko; President, National Institutes for the Humanities; Prof. Emer., Kyoto University
	OZAKI Yasushi	Ret. Prof., Keio University
	KOZEN Hiroshi	Director General, Kyoto National Museum; Prof. Emer., Kyoto University

Title	Name	Present Post
Members of the Committee	CHIKUSA Masaaki	Prof., Otani University
	MANOEiji	Prof. Emer., Kyoto University
	MIMAKI Katumi	Prof. Emer., Kyoto University
	MORIMOTOKosei	Member, The Japan Academy;
	NAKANEChe	Prof. Emer., Kyoto University
	NISHIDATatsuo	Abbot Emeritus, Todai-ji
	SHIBAYoshinobu	Member, The Japan Academy;
		Prof. Emer., The University of Tokyo
	UMEHARA Kaoru	Member, The Japan Academy;
	Prof. Emer., Osaka University	
	Prof. Emer., Kyoto University Honorary Fellows	

4. Honorary Fellows

Name	Home Institution
BLUSSE, Leonard	Universite Leiden
DE BARY, W. T.	Columbia University
ELVIN, Mark	The Australian National University
FRANKE, H.	Ludwig-Maximilians-Universitat Munchen
HUMPHREYS, R. Stephn	University of California
GERNET, J.	Collège de France
KADIVAR, Mohsen	Tarbiat Modarres University
HAN Yeong'u	Seoul National University
HUANG Kuanzhong	Institute of History and Philology, Academia Sinica
KYCHANOV, E.I.	Saint-Petersburg Branch of the Institute of Ori-ental Studies of Russian Academy of Sciences
LANCIOTTI, Lionelio	University of Naples
LI Bozhong	National Tsing Hua University
McDERMOTT, JosephP.	St. Johns College, Cambridge University
RAFEQ, Abdul-Karim	The College of William and Mary Department of History
SAHIN, Ilhan	Kirgizistan-Turkiye Manas Universitesi
WANG, Gungwu	National University of Singapore

5. Personnel, research fellows

(As of March 31, 2008)

Department	Title	Name	Present Post (Persons with * are personnel of the Toyo Bunko Branch of the National Diet Library.)
	Executive Director	YAMAKAWA Naoyoshi	
	Executive Librarian	SHIBA Yoshinobu	
General Affairs Department	Assistant General manager	AOKI Yuji	
		TACHIBANA Nobuko	
		FUJIMURA Yumiko	
		SHIBADAI Junko	
		MAKI Yukiko	
		FUJISHIRO Kazutaka	
		HASEGAWA Shigehiro	
Library Department	Head Librarian	TANAKA Issei	
	Director, Toyo Bunko Branch of National Diet Library	WATANABE Yukihide	*
		CHUZENJI Makoto	*
		SAKURAI Toru	
		YAMAMURA Yoshiteru	
		SAWASAKI Kyoko	*
		SHINOZAKI Yoko	
		TANAKA Ryonosuke	*
		HONDA Maiko	*
Research Department	Research Department Head	SATO Tsugitaka	(Prof., Waseda University)
	Advisor, Research Department	ISHII Yoneo	(President, National Institutes for the Humanities, Inter-University Research Institute corporation)
	Research Fellow: Full Appointments	ARA Matsuo	(Prof. Emer., The University of Tokyo)
		CHIBA Hiroshi	(Former Director, Toho Gakuen)
		CHIKUSA Masaaki	(Prof. Emer., Kyoto University)
		DOHI Yoshikazu	(Prof. Emer., Kokugakuin University)

Department	Title	Name	Present Post
		HAMASHIMA Aatsutoshi	(Prof., National Chi Nan University)
		HASEGAWA Yoshio	(Lecturer, Chiba Institute of Technology)
		HONJO Hisako	
		ICHIKO Chuzo	(Prof. Emer., Ochanomizu University)
		ISOGAI Ken'chi	(Lecturer, Otemae University)
		KASUYA Gen	(Lecturer, Nihon University)
		KAZAMA Kiyozo	(Prof. Emer., The University of Tokyo)
		KIKUCHI Hideo	(Former Prof., Chuo University)
		KUSANO Yasushi	(Former Prof., Kumamoto University)
		MARUO Tsuneki	Research Fellow, The Toyo Bunko
		MATSUMARU Michio	(Prof. Emer., The University of Tokyo)
		MATSUMURA Jun	(Prof. Emer., Nihon University)
		NAGAZUMI Yoko	(Former Prof., The University of Tokyo)
		NISHIDA Tatsuo	(Prof. Emer., Kyoto University)
		NISHIO Kanji	(Part-time Lecturer, Rikkyo University)
		OHTA Yukio	(Prof. Emer., Tokyo Gakugei University)
		OKADA Hidehiro	(Prof. Emer., Tokyo University of Foreign Studies)
		OOE Takao	(Prof. Emer., Tokyo University of Foreign Studies)
		OSAWA Hajime	Research Fellow, Documentation Center for China Studies
		SAKAI Kenji	(Prof. Emer., Den-en Chofu University)
		SATAKE Akihiro	(Prof. Emer., Kyoto University)
		SHIBA Yoshinobu	Executive Librarian, The Toyo Bunko
		SHIMO Hirotoishi	
		SHIOZAWA Hirohito	(Lecturer, Hosei University)
		SUENARI Michio	
		TADA Kensuke	(Prof. Emer., Japan Women's University)
		TAKISHITA Saeko	
		TAMURA Koichi	(Prof. Emer., Aoyama Gakuin University)
		TANAKA Issei	(Prof. Emer., The University of Tokyo)
		TANAKA Tokihiko	(Prof. Emer., Tokai University)
		TORIUMI Yasushi	(Prof. Emer., The University of Tokyo)
		WADA Hironori	(Prof. Emer., Keio University)
		WATANABE Hiroyoshi	(Prof. Emer., Dokkyo Medical University)

Department	Title	Name	Present Post
		YABUKI Susumu	(Prof. Emer., Yokohama City University)
		YAMAGUCHI Zuiho	(Prof. Emer., The University of Tokyo)
		YAMAZAKI Gen'chi	
		YANAGIYA Ayumi	Research Fellow, Documentation Center for Islamic Area Studies
		YAZAWA Toshihiko	(Prof. Emer., Saitama University)
		YOSHIDA Tora	(Former Prof., Risho University)
		DANIELS, Christian	Prof., Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies
		FUKAZAWA Shinji	Associate Prof., Wako University
		FURUYA Akihiro	Prof., Waseda University
		GOTO Akira	Prof., Toyo University
		HACHIOSHI Makoto	Prof., Tokyo University of Foreign Studies
		HAMASHITA Takeshi	Prof., Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University
		HAYASHI Kayoko	Prof., Tokyo University of Foreign Studies
		HIRANO Ken'chiro	Prof., Waseda University;
		HIROSUE Masashi	Prof., Rikkyo University
		IJIMA Taketsugu	Prof., Komazawa University
		ISHIBASHI Takao	Prof., Kokushikan University
		KASUYA Ken'ichi	Prof., Hitotsubashi University
		KATO Naoto	Prof., Nihon University
		KAWASAKI Shinjo	Prof., Toyo University
		KISHIMOTO Mio	(Prof., The University of Tokyo)
		KOMATSU Hisao	(Prof., The University of Tokyo)
		KUBOZOE Yoshifumi	Prof., Ochanomizu University
		MIMAKI Katsumi	Prof. Kyoto University
		MIURA Toru	Prof., Ochanomizu University
		MOMIYAMA Akira	Prof., Komazawa University
		MOURI Kazuko	Prof., Waseda University
		NAGASAWA Eiji	Prof., The Institute of Oriental Culture, The University of Tokyo
		NAGATA Yuzo	Prof., Meiji University
		NAKAGANE Katsuji	Prof., Aoyama Gakuin University

Department	Title	Name	Present Post
		NAKAMI Tatsuo	Prof., Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies
		ONA Yasuyuki	Prof., Aoyama Gakuin University
		SUZUKI Ritsuko	Prof., Aichi University
		TSUCHIDA Tetsuo	Prof., Chuo University
		UCHIYAMA Masao	Prof., Utsunomiya University
		UMEMURA Akira	Prof., Chuo University
		YANAGISAWA Akira	National Institutes for the Humanities, Inter-University Research Institute Corporation
		YOSHIDA Mitsuo	(Prof., The University of Tokyo)

6. Research Fellows: Acting Appointments

Department	Title	Name	Present Post
Research Department	Research Fellows: Acting	AKIBA Jun	Associate Prof., Chiba University
		AMAKO Satoshi	Prof., Waseda University
		AOYAMA Rumi	Associate Prof., Waseda University
		ARAI Masami	Prof., Tokyo University of Foreign
		ARAKAWA Masaharu	Prof., Osaka University
		ASANO Shugo	Chief Curator, Chiba City Museum of
		BENNO Saiichi	Prof., Kanazawa University
		FUJIMOTO Yukio	Prof., Reitaku University
		FUJITA Tadashi	Prof., Kokushikan University
		FUKASAWA Shinji	Prof., Wako University
		FURUTA Kazuko	Prof., Keio University
		GEN Zenhei	Prof., St. Andrew's (Momoyama Gakuin) University
		HAGITA Hiroshi	Associate Prof., Tokyo University of Foreign Studies
		HAMADA Masami	Prof., Kyoto University
		HANADA Nariaki	Prof., Meiji Gakuin University
		HARA Minoru	Prof. Emer., The University of Tokyo
		HASEGAWA Yoshio	Lecturer, Chiba Institute of Technology
HAYASHI Toshio	Prof., Soka University		
HIRANO Satoshi	Associate Prof., The University of Tokyo		
HIRASE Takao	Prof., The Institute of Oriental Culture, The University of Tokyo		

Department	Title	Name	Present Post
Research Department	Research Fellows: Acting	HIROSE Shin'chi	A. T Kearney. Principal
		HORIKAWA Toru	Prof., Kyoto University of Foreign Studies
		HOSOYA Yoshio	Prof., Tohoku Gakuin University
		HU Jie	Associate Prof., Nagoya University
		HUANG Donglan	Associate Prof., Aichi Prefectural University
		IIO Hideyuki	Prof., Senshu University
		IKEDA Misako	Prof., Nagoya University of Commerce & Business
		IKEDA On	Prof. Emer., Soka University
		IKO Toshiya	Prof., Tsuru University
		IMANISHI Yuichiro	Prof., Kyushu University
		INOUE Kazue	Prof., The International University of Kagoshima
		INOUE Kazuto	Head, International Cooperation Section, Department of Planning&coordination, Nara National Research Institute for Cultural Properties
		ISHIZUKA Harumichi	Prof. Emer., Hokkaido University
		ISOGAI Ken'chi	Research Fellow, International Research Institute for Studies Language and Peace, Kyoto University for Foreign Studies
		KANAMARU Yuichi	Prof., Ritsumeikan University
		KARASHIMA Noboru	Executive Prof., Taisho University
		KASUYA Ken'chi	Lecturer, Nihon University
		KATAGIRI Kazuo	Prof. Emer., Aoyama Gakuin University
		KATAYAMA Akio	Prof., Tokai University
		KATAYAMA Tsuyoshi	Prof., Osaka University
		KATO Hiroyuki	Prof., Kobe University
		KAWAI Shin'chi	Prof., Aichi University
		KAWASHIMA Shin	Associate Prof., Graduate school, The University of Tokyo
		KEGASAWA Yasunori	Prof., Meiji University
		KIM Bongjin	Prof., The University of Kitakyushu
		KISHI Toshihiko	Prof., Kanagawa University
		KITAMOTO Asanobu	Associate Prof., National Institute of Informatics
		KOHAMA Masako	Prof., Nihon University

Department	Title	Name	Present Post
		KOJIMA Yoshitaka	Prof., Kanazawa Gakuin University
		KOROGI Ichiro	Associate Prof., Kanda University of International Studies
		KOSUGI Yasushi	Prof., Kyoto University
		KUBO Toru	Prof., Shinshu University
		KUMAMOTO Hiroshi	Prof., The University of Tokyo
		KURODA Takashi	Associate Prof., Tohoku University
		KUSUNOKI Yoshimichi	Associate Prof., University of Tsukuba
		MARUKAWA Tomoo	Associate Prof., The University of Tokyo
		MATSUMOTO Hiroshi	Associate Prof., Daito Bunka University
		MATSUNAGA Yasuyuki	CISMOR Fellow, Doshisha University
		MATSUNAMI Yoshihiro	Research Fellow, The Toyo Bunko
		MATSUSHIGE Mitsuhiro	Prof., Nihon University
		MITANI Takashi	Prof., Hitotsubashi University
		MIYAZAKI Shuta	Prof., Seijo University
		MIZUNO Yoshifumi	Associate Prof., Tokyo University of Foreign Studies
		MORIHIRA Masahiko	Associate Prof., Kyushu University
		MORIYASU Takao	Prof., Osaka University
		MOTONO Eichi	Prof., Graduate school, Waseda
		MURAI Shosuke	Prof., The University of Tokyo
		MURATA Yujiro	Prof., The University of Tokyo
		NAKANO Maori	Associate Prof., National Institute of Japanese Literature Department of Literary Development Studies
		NAMIKI Yoriyhisu	Prof., The University of Tokyo
		NISHIO Kanji	Prof., National Defense Academy of
		NOBUHIRO Shinji	Prof., Teikyo University
		OGAWA Hiromitsu	Prof., The Institute of Oriental Culture, The University of Tokyo
		OHKAWARA Tomoki	Associate Prof., Tohoku University
		OHSAWA Masaaki	Prof., Sophia University
		OHTA Nobuhiro	Associate Prof., Tokyo University of Foreign Studies
		OHTANI Shunta	Associate Prof., Nara Women's
		OKAYAMA Hajime	Prof., The Institute of Oriental Culture, The University of Tokyo
		OKUMURA Satoshi	Prof., Metropolitan University
		ROKUTANDA Yutaka	Associate Prof., The University of Tokyo

Department	Title	Name	Present Post
		SAKURAI Yumio	Former Prof., The University of Tokyo
		SAOTOME Masahiro	Associate Prof., The University of Tokyo
		SATO Hiroshi	Prof., Hitotsubashi University
		SATO Shin'chi	Prof., The University of Tokyo
		SEKIMOTO Teruo	Director, The Institute of Oriental Culture, The University of Tokyo
		SEKIO Shiro	Prof., Niigata University
		SEO Tatsuhiko	Prof., Chuo University
		SHIDARA Kunihiro	Prof., Rikkyo University
		SHIGECHIKA Keiju	Prof., Shizuoka University
		SHIMAO Minoru	Associate Prof., Keio University
		SHIMIZU Kosuke	Prof., Kyushu University
		SHIMIZU Nobuyuki	Prof., Aoyama Gakuin University
		SHINMEN Yasushi	Prof., Chuo University
		SHIOZAWA Hirohito	Lecturer, Hosei University
		SHITOMI Yuzo	Prof., The University of Tokyo
		SHOGAITO Masahiro	Prof., Kyoto University
		SODA Saburo	Prof., Hiroshima University
		SUGIYAMA Masaaki	Prof., Kyoto University
		SUKAWA Hidenori	Former Prof., Yokohama National
		SUNAYAMA Yukio	Prof., Aichi University
		SUZUKI Hiroyuki	Lecturer, Yamagata Junior College
		SUZUKI Hitoshi	Assistant Director, International Relations and Conflict Studies Group,
		SUZUKI Ritsuko	Prof., Aichi University
		TACHIKAWA Musashi	Prof., Aichi Gakuin University
		TAJIMA Toshio	Prof., The University of Tokyo
		TAKADA Yukio	Associate Prof., Meiji University
		TAKADA Yukio	Prof., Gifu Shotoku Gakuen University
		TAKEUCHI Tsuguhito	Prof., Kobe City University of Foreign
		TANAKA Akihiko	Prof., The Institute of Oriental Culture, The University of Tokyo
		TANG Liang	Associate Prof., Yokohama City
		TERADA Hiroaki	Prof., Kyoto University
		TOCHIO Takeshi	Prof. Emer., Seijo University
		TOKURA Hidemi	Prof., The University of Tokyo
		TOMIZAWA Yoshia	Associate Prof., Shimane University
		TSUJIMOTO Hiroshige	Associate Prof., Nanzan University

Department	Title	Name	Present Post
		TSURUMI Naohiro	President, Yamanashi Prefectural
		TUCHIDA Akio	Prof., Chuo University
		UCHIDA Tomoyuki	Prof., Daito Bunka University
		UENO Eiji	Prof., Seijo University
		UMEDA Hiroyuki	Prof. Emer., Reitaku University
		UMEHARA Kaoru	Prof. Emer., Kyoto University
		UMEMURA Hiroshi	Prof., Chuo University
		WADA Yasuyuki	Associate Prof., Ryukoku University
		YAMAMOTO Eishi	Prof., Keio University
		YAMAMOTO Takeo	Prof., National Institute of Informatics
		YAMAUCHI Koichi	Prof., Sophia University
		YAMAUCHI Tamihiro	Associate Prof., Niigata University
		YANAGIDA Seiji	Prof., Nara University
		YOSHIDA Nobuyuki	Prof., The University of Tokyo
		YOSHIDA Yutaka	Prof., Kobe City University of Foreign Studies
		YOSHIMIZU Chizuko	Lecturer, University of Tsukuba
		YOSHIMURA Shintaro	Associate Prof., Hiroshima University



財団
法人 東洋文庫年報 平成19年度

平成20年12月25日 発行

発行者 東京都文京区本駒込2丁目28番21号

財団法人 東洋文庫
榎原稔

印刷者 中央印刷株式会社

東京都中央区八丁堀3丁目17番12号

発行所 東京都文京区本駒込2丁目28番21号

財団法人 東洋文庫

本書は財団法人東洋文庫に対する平成20年度文部科学省補助金の一部によって刊行されたものである。

Toyo Bunko NENPŌ

Toyo Bunko Yearbook 2007

I	The Toyo Bunko's activities in FY2007	115
II	Activities Report	118
	1. Surveys and Research	118
	2. Source Material Collection and Cataloging	129
	3. Research and Source Material Publication	131
	4. Dissemination of Information	131
	5. Providing Scientific Information	132
	6. Regional Studies Programs	135
III	Accounting Report	139
	1. Balance Sheet of General Account	139
	2. The Increase and Decrease of General Account's Net Worth	140
	3. List of Assets	141
	4. Income & Expenditure Statement of General Account	142
IV	List of personnel	143
	1. Directors	143
	2. Councilors	144
	3. Oriental Studies Advisory Council	144
	4. Honorary Fellows	145
	5. Personnel, Research Fellows : Full Appointments	146
	6. Research Fellows : Acting Appointments	149

THE TOYO BUNKO

Honkomagome 2-chome, 28-21

Bunkyo-ku, Tokyo,

Japan
